

---

# 魔女に乾杯！

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

魔女に乾杯！

### 【Nコード】

N1558A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ここは私達の住んでいる世界とはちょっと違う世界、魔法の存在する世界。そこには当然魔法を学ぶ女の子達もいる。彼女達が繰り出す様々なお話です。

魔女に乾杯！

## 序曲

### 序曲

ここは私達が住んでいる世界とは少し違った世界。住んでいる人達も行いも変わりはないけれど一つだけ違ったところがある。それは何であろうか。

それは魔法の存在である。私達が住んでいる世界では表向きは否定されている魔法、この世界ではごくありきたりのものとして存在しているのである。そして普通に魔女や魔法使いも存在している。

当然日本においても。日本では明治維新、いやそれ以前にはバレンと一緒に伝えられたこの魔法、江戸時代では廃れはしたが今はちゃんと根を張っている。明治の時は文明開化の一つとして言われたものである。

そして今では日本は立派な魔法大国、今や科学と魔法は日本のお家芸とまで言われるまでになった。

あちこちに魔法を教える塾があり子供達はそこで魔法を勉強する。そして将来立派な魔法使いとして世間で活躍する為の準備をしているのだ。魔法使いはこの世界では科学者と同じ位重要なのだ。

平和な梅花町でもそれは同じ。クラスに一人は絶対に魔法を習っている子供がいる状態。そしてこの物語の主人公もその中の一人であった。

彼女の名前は菊地華奈子。長くて綺麗な茶色の髪の可愛い小学生の女の子である。学年は六年、もうそろそろ大人の入口に入る年頃である。

勉強は今一つだけけれどスポーツは万能、元気のいい女の子である。魔女になって一年、使い魔に家のペットでもある犬と猫を連れてくる。

家族は両親に双子のお姉さんの美奈子、こちらは黒くて長い髪の綺麗な女の子。華奈子がお父さん似なら美奈子はお母さん似、勉強

魔女に乾杯！

もできて大人しくてしつかりした女の子である。

彼女が一番得意なのは音楽、特に歌と笛は学校どころか町でも評判になる程。それ程凄い音楽の才能がある。

けれど美奈子は魔法が使えない。けれどそれでも華奈子と美奈子は仲良し、いつも一緒にいる。そんな仲のいい双子だった。

二人には何の秘密もない筈。けれど最近美奈子は華奈子に何か隠しているみたい。それは何か。

さて、それこそがこの物語のはじまり。美奈子が華奈子に隠している秘密は何か。そしてそれから二人はどうなるか。

ここに魔女のお話が開幕です。

## 第一話

### 第一話 華奈子登場

「只今ー！ー！ー！」

ありきたりの一軒家に飛び込む一人の少女。赤いTシャツにベージュのホットパンツを身に着けている。その格好からかなり活動的な印象を受ける。

この少女の名を菊地華奈子という。梅花小学校に通う六年生の女の子である。

学校では二つのことで知られている。一つはスポーツ万能なこと。スポーツなら何をやらせても得意である。ただし勉強はあまり得意ではないがこれはご愛嬌といったところであつた。

そしてもう一つは魔法であつた。彼女は魔女でもあつたのだ。塾で魔女としての勉強をしている。こつちの方は学校の勉強よりはまだ得意であつた。

「お帰り、華奈子」

玄関のところにいる黒い犬が声をかけてきた。

「今日は早かつたね」

「うん」

華奈子はその犬に対して答えた。

「今日はね。ところで今家にいるのはタロだけ？」

「ええと」

タロと呼ばれたその犬は華奈子に問われてあらためて辺りを見回した。

それから匂いを嗅ぐ。そして華奈子に答えた。

「どうやらそうみたいだよ。ママさんの匂いもしないし」

「ふうん、そうなんだ」

華奈子はそれを聞いて応えた。

「お買い物かなあ」

魔女に乾杯！

「そうじゃないかな。僕は今まで寝てたからよくわからないけど」  
「また寝てたの？好きねえ」

「好きって言われてもそれしか趣味はないし」

タロは華奈子に対して言った。

「じゃあ他に何するっていうんだよ」

「ライゾウみたいに色々やってみたら？」

「ライゾウみたいって」

タロはそれを聞いて元々細長い口を尖らせた。

「僕は猫じゃないし」

「おいらだって犬じゃないぜ」

ここで奥の廊下の方から声がした。

「ライゾウ」

見ればそこにスコッティ・ホルドがいた。白地に黒と灰色の模様  
の猫であった。

「タロとはまた生き方が違うのさ」

ライゾウはタロのところに来てそう言った。

「どっちがいいか悪いかは別だけれどな」

「別に僕だってライゾウの生き方にいちいち注文はしないさ」

タロもそう返した。

「ただ違うってことだけは意識してるだけで」

「そうそう」

「ところで二匹共」

華奈子が二人に声をかけてきた。

「今暇？」

「まあ寝てた位だから」

「丁度見たいビデオも観終わってたし」

二匹はそれぞれそう言葉を返した。

「それが何か？」

「じゃあさ」

華奈子はそれを受けて言う。

「どっか行かない？魔法で」

「ていつても華奈子まだそんなに魔法使えないだろ？」

「精々箒に乗って空を飛ぶ位じゃないの」

「失礼しちゃうわね」

華奈子はそれを聞いて頬を膨らませた。

「あたしだって最近色々使えるようになってきたんだから  
「どんなの？」

二匹は同時に彼女に尋ねた。

「まず手を使わずにものを動かすことですよ」

「ふん」

「そしてちょっと姿を消すこと」

「ふん」

「あとは……」

「それだけ？」

「何だ、今迄とあまり変わらないんだ」

「変わるわよ」

華奈子はそう反論した。

「他にも一つ覚えたんだから。見ててよ」

「見るからさ。何？」

「早く見せてよ」

「ええとね」

そう言われてあらためて考え込む。

「それで……」

「やっぱりできないんだ」

「やれやれ。本当に運動以外何もできないんだから」

「待ちなさいよ」

そこで二匹を怖い目で睨みつけた。

「使い魔なのにあたしを馬鹿にするの？」

「だってできないじゃないか」

「嘘つきは泥棒鼠のはじまりだぜ」

「それを言うなら泥棒猫でしょ」  
「まあまあ」

だがライゾウは華奈子のそんな攻撃をかわした。  
「それで何なの？新しい魔法って」

「思い出してよ」

「ええとね」

だが容易には思い出せない。

「何だったっけ」

「そういう時は深呼吸」

タロが言う。

「してみたら思い出せるよ」

「そうね。それじゃあ」

「うん」

華奈子はそれを受けて深呼吸した。そして思い出したようである。

「あっ」

「思い出した？」

「うん。あれよ、服よ」

「服？」

「うん。自分で服を出せるようになったのよ。見ててね」

「見るよ」

「どうぞ」

「それじゃ」

それを受けて魔法の詠唱をはじめた。詠唱しながら身体を動かす。  
素早く躍動的な動きだ。

「ここに出でよ、我が身を護りし者達よ」

詠唱が続く。その間も身体を動かしている。

「そして我を護るのだ」

そして赤い魔女の服で身を覆った。だがそれは何処かおかしかった。

「あれ？」

魔女に乾杯！

それを見てまずライゾウが声をあげた。

「その服どっかおかしくない？」

「え、そうかなあ」

「うん。何か短い」

「足が丸見えだよ」

「うっ」

見ればその通りであった。普通魔女の服は身体全体を覆うがそれは膝の少し上までであったのだ。

「それじゃあ魔女の服じゃないよ」

「そうそう」

「こ、これは自分でそうしたのよ」

華奈子は言い訳をはじめた。

「ほら、こっちの方が動き易いじゃない。あたし運動得意だし」

「ホントかな」

ライゾウが意地悪そうな目で見る。

「まあそうじゃないの」

タロもそれに合わせる。

「華奈子が言うんだし」

「そ、そうそう」

タロの言葉に乗っかる。

「だからね。気にすることないから」

「じゃあさ」

ライゾウは質問を変える。

「さっきの服は何処へ行ったの？」

「そういえば」

「どこなのかなあ」

「そ、それは」

それまで来ていた服が魔女の服になったのである。従ってもうない。

「ありません」

魔女に乾杯！

「あらあら」

「まだまだ魔女失格だな、こりゃ」

「二匹のきつい評価が下った。華奈子もまだまだこれからだようである。」

第一話 完

2005・5・26

## 第二話

### 第二話 双子のお姉さん

華奈子には姉がいる。双子のお姉さんで美奈子という。華奈子が茶色の髪なのに対して美奈子のそれは黒だ。華奈子の髪はお父さんの、美奈子の髪はお母さんのものだ。けれど顔は同じだ。お母さんによく似ていると言われる。目が大きくぱっちりとしている。そして可愛いとよく言われる。

けれど性格はかなり違っている。華奈子は活動的でやんちゃだが美奈子は何処か落ち着いていてしっかりしている。これは美奈子がお姉さんだからだろうか。

華奈子が得意なのは運動、けれど美奈子は音楽が得意だ。特に歌と踊りでは誰にも負けない。

「ねえ美奈子」

華奈子が自分の部屋で姉に声をかける。二人は同じ部屋にいて並んだ机に座っている。ベッドは二段で華奈子が上、美奈子が下になっている。趣味も全然違う。

華奈子はござっぱりしたものを、美奈子は華やかなものが好きだ。したがって美奈子の服も何処か派手である。今も白いドレスのような服を着ている。

「何かしら」

美奈子はそれを受けて妹に顔を向けてきた。

「昨日何処へ行ってたの？夕方いなかったけれど」

「ちよつとね」

美奈子はくすりと笑ってそう答えた。

「遊びに行ってたのよ」

「遊びに？」

「ええ」

美奈子はまだ笑っていた。

魔女に乾杯！

「最近面白いこと見つけて。華奈子もどう？」  
「うっん」

華奈子は姉の誘いに眉を顰めさせて考え込んだ。

「遠慮しとく」

「あら」

「美奈子の遊びつて歌とか踊りでしょ。あたし歌下手だし」

「けれど踊りは得意じゃない」

「身体動かすのはいいのよ。けれどそれだけじゃないでしょ」

「ええ、まあ」

「だからね。遠慮しとく。あたし歌とか楽器とか苦手だから」

「残念ね。けれどいいわ」

美奈子はそれを聞いて一旦は諦めた。

「そのうち華奈子も一緒に遊ぶことになるから」

「それどういう意味？」

「あ、何でもないの」

美奈子はそう言って誤魔化した。

「何でもないからね」

「何か引つ掛かるなあ。まあいいか」

さっぱりした性格の華奈子は引つ掛かるものを感じながらもそれを追求しようとはしなかった。

「とりあえずは今日の宿題なんだけど」

「あら、何処かしら」

二人は宿題について話をはじめた。もともと華奈子が美奈子に聞くだけであったが。勉強は美奈子の方が得意なのである。そんな二人であった。

魔女に乾杯！

2  
0  
5  
・  
5  
・  
2  
7

## 第三話

### 第三話 魔女っこ集合

華奈子を通っている塾の生徒は六年生では彼女を入れて全部で五人である。皆彼女と同じ小学校の生徒だ。

「こんにちは、華奈子ちゃん」

眼鏡をかけた黒いツインテールの女の子が華奈子に声をかけてきた。おっとりとした声である。

「うん、春奈ちゃん」

華奈子は彼女に挨拶を返した。彼女は河波春奈、隣のクラスの女の子である。学校では勉強ができることで知られている。しかしそれ以上におっとりした性格で知られている。

「今日は遅刻しなかったのね」

「私だっていつも遅刻しないよお」

春奈は苦笑いしてそう答えた。

「今日はいつもより早めに出たんだから」

「それがいいね」

別の少女の声がした。二人の後ろに赤い短髪の燐とした女の子がいた。

「春奈ちゃんっておっとりしてるから」

「梨花ちゃん」

岩本梨花、自分のクラスでは学級委員を務めている。男の子が委員長で彼女が副委員長、けれど委員長よりずっとしっかりしていると言われている。学年でもまとめ役とされている。

「ちょっと早く出たらいいのよ、いつも」

「うん」

春奈はそれに頷いた。

「じゃあこれからそうするね」

「そうそう」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

梨花はそれを聞いて満足そうに頷いた。そこにまた一人来た。

「久し振り」

「久し振りって」

かなり背の高い女の子がいた。他の三人よりも背はずっと高い。

少し茶がかつた黒い髪を後ろで束ねている。

「おとついここで会ったばかりじゃない」

「私にとっては久し振りなの」

その背の高い女の子はそう言ってむくれた。

「だって皆別々のクラスだもん。寂しいよ」

「クラスには他のお友達がいるでしょ」

「うん」

「だったら寂しくないじゃない」

「この皆に会えるのはここしかないのよ」

彼女はそう言って反論した。

「じゃあ寂しいじゃない」

「そうかもね」

梨花がそれに頷いてみせた。

「美樹ちゃんなら」

「そういうこと」

その少女佐藤美樹は梨花のその言葉を聞いて満足そうな笑顔になった。彼女はこれで意外と寂しがり屋であるようだ。梨花もそれがわかっていくらしい。

「あいたっ」

今度は後ろで誰かが倒れる音と声が出た。

「いたたたたたた……」

「赤音ちゃん？」

「うん」

茶色に黒がかつた髪の子が立ち上がりながら答えた。髪は肩まで伸ばしている。

「また転んじゃった」

「仕方ないなあ」

「怪れない？」

春奈が心配そうに歩み寄る。

「すりむいたりとか」

「あ、大丈夫」

赤音はそれに答えた。

「怪我はないから。気にしないで」

「よかった」

彼女は平沢赤音という。彼女もまた魔法の塾に通う女の子である。

この塾の六年生の生徒はこの五人であった。

「じゃあ皆一緒に行こうか」

「うん」

皆華奈子の言葉に頷いた。そして塾に向かうのであった。

第三話 完

2005・5・28

## 第四話

### 第四話 先生

華奈子達の先生はちよつと変わった先生、うっかりさんでぼんやりしたところのある先生だ。

今田先生という。町では評判の魔法の先生で美人としても知られている。ちよつと口が大きいが顔も整っていて背も高い。そしてプロポーシヨンもいい。声はまるで子供のように可愛い。結婚しても小学生の女の子がいるがとてもそうには見えない。まだ大学卒業したてといつても通用する程である。

頭もよくて顔もいい。才色兼備だがおまけに性格もいい。華奈子達にとつてはとても優しい先生だ。しかし人間というのは必ず欠点があるものである。

「皆さんお早うございます」

教室に先生が入って来た。華奈子達は五人横一列に座っているがそれを聞いて不思議そうな顔をした。

「先生」

「はい」

白い魔法の服を着た先生は華奈子の声に顔を向けた。先生は白魔術が得意なのである。

「もうお昼ですけど」

「あら」

先生はそれを聞いて思わず声をあげた。

「すみません。じゃあこんにちは」

「はい、こんにちは」

挨拶がやり直された。こうしたことはしょつちゆうである。

他にも色々ある。何でもないのでこけたりパジャマで教室にやって来たこともある。とにかくぼんやりした先生であった。これはもう赤音に匹敵する程であった。

魔女に乾杯！

「もしかして親戚とかじゃないよね」

華奈子達にそう尋ねられたこともある。

「違うよお」

「けれどやってることがそっくりよ。ぼんやりしてるし」

「私ぼんやりしてないもん」

「いや、それでも一緒だから。やってること」

周囲の評価はそうであった。それでも魔法の先生をやれるのが凄  
いところであった。これには秘密があった。

この先生は天才だったのだ。魔法の天才である。魔法を使わせた  
ら右に出る者は少なくともこの町では一人もない程であったのだ。  
「次はこうしますね」

華奈子達の前で実践しながら説明する。今はゴーレムの召還につ  
いてである。

「そうしたら完成です」

すると今まで単なる泥の塊であったものが人の形になった。そし  
て先生の横に立った。

「これでゴーレムです。後は動かすだけです。えいっ」

念じる。するとそれだけでゴーレムが動きだした。まるで人間の  
ように普通に動いている。

一見すると簡単そうだが実はそうではない。こうなるまでには相  
当の勉強が必要なのである。

それをこの先生は容易に行っていた。これができるのは日本でも  
そうはいないというのに。

「すごおい……」

皆それを見て素直に感嘆の言葉を述べた。

「ゴーレムをあんな簡単に」

「わかりましたか？要は心です」

「こころ」

「そう、心です」

先生は笑顔でそう答えた。

「心が一番大事なのですよ、魔法には」

「そうなんですか」

「はい。このゴーレムさんにしろそうです」

先生はゴーレムを見上げて言った。

「心がないと動きませんから。動いて欲しい、命を持って欲しいと願う心が」

「先生」

梨花が質問した。

「何ですか？岩本さん」

「それって私達もですよ」

「勿論ですよ」

先生はそう答えた。

「皆さんも魔法を本当に好きで純粋に念じるなら何でもできますよ」

「ホントですか!？」

「先生みたいになれますか!？」

「ええ、勿論です」

先生は笑っていた。

「ですから皆さん、今日も頑張りましょうね!」

「はい!」

こうして華奈子達は塾に來るといつもこうしてやる気にさせられるのである。そして頑張る。今田先生は本当に不思議な先生だった。だから魔女なのかも知れない。

第四話 完

## 第五話

### 第五話 得意不得意

五人は今日は塾で楽しく先生の授業を受けていた。華奈子もその中にいた。今日はシャボン玉を使った魔法についての授業である。

「うん」

しかしどうも上手くいかない。華奈子は首を傾げていた。

「華奈子ちゃん、どうしたの？」

春奈がそんな彼女の側に来て尋ねてきた。

「上手くいかないの？」

「うん」

隠し事は嫌いである。素直にそう答えた。

「何かね、シャボン玉って苦手なんだよね」

そして苦笑いを浮かべた。実際に彼女はシャボン玉を使ったものはあまり得意ではないのだ。他の魔法も得手不得手が激しいのであるが。はつきり言うとな得意なものの方が多いのである。

「あら、困りましたね」

そこに先生がやって来た。

「それじゃあ華奈子さんの得意なふうにしてみますか」

「どうするんですか？」

「はい」

華奈子の問いに応えた。そして一つのシャボンの壺を差し出した。

「これをどうぞ」

「先生、これって」

華奈子はそのシャボンを受け取って先生を見た。

「あたしが今使ってるのと変わリませんかけれど」

「やってみたらわかりますよ」

けれど先生はそんな彼女に対して笑ってそう言った。

「さ、やってみて下さい」

魔女に乾杯！

「わかりました」

騙されたと思っただけでやってみることにした。実際に騙されていた。やってみる。ストローを壺に入れ吹く。すると上手くできた。シヤボンが華奈子の念じたまま動くのだ。

「あ、あれ!？」

驚いたのはそれだけではなかった。何とシヤボンの色が普通のもので違うのである。

「あ、赤い」

「はい」

先生はにこやかに笑ってそれに答えた。

「華奈子さんは火を使った魔法が得意ですよ」

「はい」

「だから赤くしてみたんです。そうしたら上手く使えるかな、と思  
いまして」

「そうだったんですか」

「ええ。実際に上手くいきましたよ」

「はい」

華奈子は嬉しそうに頷いた。

「嘘みたいです。さっきまで全然上手くいかなかったのに」

「こうすれば上手くいきますね。要は相性です」

「相性」

「火は赤ですよ。ですから赤い色にすれば」

「あつ」

それを言われて気付いた。

「だからなんです。じゃああなたは赤を使っていけば」

「これまでより魔法がずっと上手くいきますよ」

「先生」

それを聞いて他の女の子達も尋ねてきた。

「それは私達もですか!？」

「勿論ですよ」

先生は笑って答えてくれた。

「皆さんにもそれぞれのシャボン玉をあげましょうか？」

「はい！」

「是非！」

こうして他の子達にもシャボンが渡された。春奈は青、赤音は白、美樹は緑、そして梨花は黄色であった。それぞれシャボンを吹く。

「うわあ……」

するとさっきまでとは比べものにならない位多くのシャボンが出た。そしてそれが彼女達の思うがままに動く。五色のシャボンがその場を支配したのである。

それから女の子達はそれぞれの色を決めた。シャボン玉の色に倣った。それが魔女の服にまでなるのにそうそう時間はかからなかった。

第五話 完

2005・5・30

## 第六話

### 第六話 美奈子の秘密!?

美奈子は音楽に関することなら何でも得意、ピアノも笛も何でもできる。

特に歌では誰にも負けたことがない。今日のコンクールでも見事優勝した。

「おめでとう、美奈子」

華奈子が姉に祝福の言葉をかける。

「また優勝したね」

「ありがとう」

美奈子にはにこりと笑ってそれに応える。その手には大きなトロフィーがある。

「これで何度目だったっけ。優勝」

「八つ目だったかしら」

考え込みながらそう答える。

「またお家に飾るものが増えたね」

「うん」

華奈子もトロフィーをもらっていないわけではない。彼女はスポーツで取っている。結果として家は二人が取ったメダルやトロフィーで一杯であった。

二人は並んで家に帰った。歩きながら話をしている。

「そっちのクラスどう？」

華奈子は美奈子にそう尋ねてきた。

「楽しい？」

「ええ」

美奈子は笑って頷いた。二人の通っている学校は六つのクラスがあり二人はそれぞれ別のクラスにいるのである。華奈子の魔法塾のクラスメイト達もそれぞれ違うクラスだ。

魔女に乾杯！

「とつても」

「いじめたりする奴いない？」

「いないわよ、そんなの」

「そう、だったらいいけど」

華奈子はそれを聞いてとりあえずは安心した。

「けれど何かあったらあたしに言ってね」

そしてこう付け加えた。

「美奈子をいじめる奴は誰でも許さないんだから」

華奈子に比べて大人しめで運動もあまり得意ではない美奈子は幼い頃よくいじめられた。そんな美奈子をかばっていつも喧嘩をしていたのが華奈子であった。泣いて家に帰ってきた美奈子を見て飛び出で行ったこともある。泣き虫の姉にそれをかばう妹、二人はそんな関係だった。

「ありがと、けど大丈夫だから」

「いいの？」

「うん。うちのクラスは平和だし」

そして言った。

「私もね。色々あるから」

「色々!？」

華奈子はその言葉に反応した。

「何かあるの!？」

「あ、いや」

妹の突っ込みに言葉を濁した。

「何でもないわ。気にしないで」

「前もそんなの言ってたような気がするけど」

「気のせいよ、気のせい」

「そうかなあ」

「そうよ、そう。だから忘れて」

「うん」

華奈子は何だかわからないままそれに頷いた。

「まあいいや。それよりね」

「何!？」

「今夜お母さんご馳走作ってくれるよ。美奈子が優勝したらご馳走作ってくれるって言ってたし」

「何だろう」

「ステーキだったししてね。それもでっかいの」

「ステーキ!？」

美奈子の目の色が変わった。ステーキは二人の好物だったのだ。

「ポタージュとね。あとトマトのサラダ」

これは華奈子の好物である。

「デザートにはコーヒージェリー」

こちらは美奈子の好物だ。二人の目の色がどんどん変わっていく。

「だから早く帰りましょ。美味しい食べ物が待ってるよ」

「うん」

こうして二人は帰り道を急いだ。そして一家で楽しい夕食を囲むのであった。

第六話 完

2005・5・31

## 第七話

### 第七話 ライバル登場

華奈子達五人は今日も楽しく塾で魔法を勉強する為に塾へ向かう。そして教室に入るとやっぱり先生はいない。ただ机と椅子、そして教壇や黒板があるだけである。これはいつも通りであった。

五人は特に何も考えることなく席に着いた。そして先生を待つ。その間はおしゃべりだ。

「ねえ、昨日のウタバン観た？」

「あ、観たよ」

「やっぱりコウイチ君いいよね」

「あたしツヨシ君の方がいい。可愛いじゃない」

「え〜〜、可愛いのならコウイチ君の方がそうじゃない？」

「そうかなあ。やっぱりツヨシ君の方がいい」

「昨日の娘の新曲もよかったよね」

「コンコン最近上手くなったよね」

「うんうん」

昨日の歌番組の話をしていた。アイドルについてである。こうしたところは年相応であった。魔女だからといって女の子であることは変わりがなかった。

そうこうおしゃべりをしているうちに足音が聞こえてきた。華奈子達はそれを聞いておしゃべりを止めた。そしてきちんと座りなおして足音の主を待った。

扉が開いた。そして白い魔法の服に身を包んだ先生が姿を現わした。

「起立」

梨花の声に合わせて五人が席を立つ。

「礼」

「こんにちは」

魔女に乾杯！

先生も挨拶を返す。こうしていつもの授業が始まる。筈だった。  
「皆さんにお手紙が来ていますよ」

先生は授業をはじめめる前に五人に対してそう言った。

「あかし達にですか？」

「ええ」

先生はにこりと笑って華奈子にそう答えた。

「これです。どうぞ」

「はい」

華奈子達は先生からその手紙を受け取った。それは封がしてあった。細長い紫の封であった。

「何か変な色の封筒ね」

「うん」

そう言いながらあける。そしてそこにあった手紙を読みはじめた。そこには綺麗な文字でそう書かれていた。

『梅花町の魔女っこの皆さんへ』

「あかし達のことね」

「うん」

五人で顔を見合わせながら読み続ける。華奈子が読み他の四人がそれを覗き込みながら聞いている。

『はじめまして。私は別の町の魔女です。どうか宜しく願いします』

「礼儀正しいなあ」

「華奈子ちゃんと大違い」

「放つといてよ」

そう言い合いながらも読み続ける。

『今私も立派な魔女になる為に勉強しています。そしてその修業の為に明日あることをします』

「何だろ」

『明日梅花小学校の校旗を頂きに行きます。貴女達にそれを止められるかしら』

「えっ!？」

「どうやら只ならぬ状況であるらしい。華奈子達はそれを読んで聞いて絶句した。」

『私を防げたら貴女達の勝ち。私が校旗を頂いたら負けよ。どう、勝負してみませんか。』

それでは明日の夜九時に梅花小学校で。どうか宜しく。

### 紫の魔女より』

手紙はそれで終わっていた。読み終わった華奈子達は皆驚きの表情であった。

「どうする?」

まずは美樹が他の四人に尋ねた。

「これ大変なことよ。私達の学校の校旗を盗もうなんて」

「かといって警察にいつてもね。何か信用してくれなさそう」

「子供の言うことだからね。どうする?」

「どうするって決まってるじゃない」

華奈子が強い声で皆に言った。

「売られた喧嘩よ。買わなくてどうするのよ」

「華奈子ちゃん、男の子じゃないんだから」

「男の子も女の子も関係ないわよ。挑戦状よ、これ」

春奈に対してそう返す。

「引き下がっちゃ駄目よ。皆はどう思う」

「私は華奈子ちゃんに賛成するわ」

まず梨花が言った。

「校旗盗まれちゃううちの学校も恥ずかしいしね」

「あれでもないし寂しいしね」

美樹も頷いた。

「私も。それに喧嘩は売られたら買えって、いつも姉ちゃんに言わ

れたし」

赤音もだ。残るは春奈だけである。

「春奈ちゃんはどうするの？」

四人は彼女に尋ねてきた。

「わたし？」

「ええ。どうするの？行くも行かないも自由よ」

「行くわ」

意を決した顔で頷いた。

「喧嘩とかは嫌いだけど。わたし達の学校のことだから。行きまし

よ

「これで決まりね。じゃあ明日の九時に学校で」

「うん！」

五人は頷き合ってその場を後にした。後には先生だけが残った。

「あの、皆さん授業は」

だが皆もう授業のことは忘れていた。先生はそれを見て仕方無いな、という顔をした。

「まあいいですね。明日は特別授業がありますし」

にこりと笑ってそう言った。こんな時でも落ち着いた先生であった。

第七話 完

## 第八話

### 第八話 紫の魔女

その次の日になった。華奈子は夕食を食べるとすぐに家を出た。

「華奈子、何処行くの？」

「ちよつと塾の皆と。約束があつて」

お母さんにはそう答える。そしてそのまま家を出た。

「行つたわね」

美奈子はそれを見て何やら意味ありげに笑つた。そして彼女もお母さんに対して言った。

「私勉強があるから部屋に戻るわ」

「ええ」

「お父さん帰つてきたら宜しくね」

そう言つて自分達の部屋に入った。そしてそのまま出ては来なかつた。

華奈子は学校に向かつた。タロとライゾウも一緒である。

「華奈子、まだ着替えなくていいの？」

「タロはそう尋ねてきた。」

「まだいいの」

「そう、だったらいいけど」

「早いとこしといた方がいいと思うけどね、おいらは」

そんな話をしているうちに学校に着いた。既に他の四人は魔女の服を着てそこにいた。見ればそれぞれの使い魔達も連れている。春奈は蛙と亀、赤音は兎とハムスター、美樹はジュウシマツとインコ、そして梨花は蛇とトカゲであつた。それぞれ特徴的な使い魔である。同時に彼女達のペットでもあるのだ。

「遅いよ、華奈子ちゃん」

「しかも魔女の服もまだだし」

「御免御免」

魔女に乾杯！

「だから言ったのに」

「先に着替えるもんだと思うけどな」

「こっちの服の方が動き易いもん」

頬を膨らせてタロとライゾウに反論する。

「それにまだ九時じゃないし。じゃあ着替えるね」

「どうぞ」

そして魔女の服に着替えた。それまで着ていた洋服が赤い魔女の服に変わる。

「これでいいでしょ」

「まあね」

タロとライゾウはそれに一応は納得した。そして学校の時計を見上げた。

見れば暗闇の中に校舎がそびえ立っている。昼は何とも思わなかったが今ではまるで巨人の様に無気味に感じる。

「何か怖いね」

「ええ」

赤音が春奈の言葉に頷く。

「何か出るかも」

美樹も少し怖いようである。梨花に寄り添っている。

その校舎の中央の一番上に校旗がある。とりあえずはまだある。

そしてそのすぐ下に時計が。そろそろ九時になりそうである。

「もうすぐね」

「うん」

じつと時計を見る。時計は彼女達に應えるかのようにゆっくりと動いていた。

遂に九時を指した。すると時間を告げるかのように何か聴こえてきた。

「これって」

それは笛の音であった。何処からか笛の音が聴こえてきたのだ。

「何処!？」

「あそこだよ、華奈子」

ライゾウが教える。右手にある一本の大きな木を手で指し示した。この学校の名物である一本の大きなモミの木である。クリスマス近くにはツリーにもなる。

その一番上にいた。横笛を吹きながらそこに立っている。一人の少女が暗闇の中に浮かび上がっていた。その後ろには黄金色の満月が映っている。

「貴女は!?!」

「はじめまして、梅花小学校の魔女の皆さん」

少女は笛を吹くのを止めて華奈子達に声をかけてきた。

「私が校旗を狙っている魔女よ」

「貴女が」

「ええ」

少女はにこりと笑って答えた。目が慣れて彼女の姿がよく見えるようになってきた。見れば紫の魔女の服を着ている。そして名乗った。

「私は紫の魔女」

「紫の魔女」

「ええ、宜しくね」

またにこりと笑った。これが華奈子達と紫の魔女の出会いであった。

第八話 完

## 第九話

### 第九話 笛の音

五人と紫の魔女は対峙していた。木の上と下で互いに見合っている。

「紫の魔女っていったわね」

「ええ」

「一体何であたし達の学校の旗を盗もっつていうのよ」

「貴女達への挑戦状よ」

「挑戦状」

「そう」

華奈子に対して答えた。

「貴女達はこの学校の魔女よね。だから挑戦したいのよ」

「何で!？」

「簡単よ。どっちが魔女として凄いのか」

今度は梨花の問いに答える。

「試してみたいのよ。どう？」

「その為に校旗をとるっていつの？」

「そうよ。そうでないと貴女達も来ないでしょ」

「確かに」

春奈の問いに答えると赤音が同意した。それを美樹が嗜める。

「くら」

「御免」

「さて、準備はいいかしら。こっちはもうできてるわよ」

「やって御覧なさいよ」

売り言葉に買い言葉だ。華奈子が受けて立った。

「あんたの魔法がどんなのか知らないけどね、あたし達だって意地があるんだから」

「意地」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「そうよ。見てらっしやい」

赤い小さなステッキを取り出した。

「あんたなんかこれでやつつけちゃうんだから」

「できるの？」

「馬鹿にしていられるのも今のうちよ」

そこから火の玉を出した。小さいがはっきりとしたものであった。

「これ、よけられるかしら」

それを放ってきた。火の玉は一直線に紫の魔女へ向かって行く。

魔女はよけようとしめない。ただ木の上に立っただけである。

「うふふ」

魔女は笑っていた。そして笛をまた吹きはじめた。

「また笛を」

「待って」

見れば火の玉が掻き消された。そして後には何も残ってはいなかった。煙の様に消えてしまっていた。

「あたしの火の玉が」

「それが貴女の魔法ね」

「ええ」

五人に対して答えた。

「私の魔法は貴女達のそれとは少し違うの。笛とかを使うのよ」

「笛を」

「そうよ。例えばこうやって」

再び笛を吹きはじめた。それは何処かで聴いた曲だった。

「この曲……」

「音楽の授業で習ったは」

五人は口々に言う。そして最後に梨花が言った。

「ブラームスの子守唄ね」

「そうよ」

紫の魔女は頷いた。

「この曲を聴くとどうなるか、わかるわよね」

魔女に乾杯！

「そんな・・・あつ」  
五人も使い魔達も崩れ落ちた。眠気が彼女達を襲ったのである。

第九話 完

2005・6・4

## 第十話

### 第十話 五人対紫の魔女

「うっ……」

「これはどうかしら」

使い魔達の中にはもう眠りに入っている者達もいる。五人ももうすぐ落ちそうであった。

だがここで春奈が立ち上がった。そして青いステッキを振った。

「皆、これで！」

「きゃっ！」

五人と使い魔達に水が降り注いだ。それで眠気を飛ばしたのだ。

「もう、春奈ちゃん酷いよお」

「御免なさい、他にどうしたらいいかわからなくて」

「けれどこれで眠くはなくなったわね」

「うん」

五人は完全に立ち上がってそう言い合った。

「さて、紫の魔女さん」

「今度は美樹が彼女を見上げていた。」

「今度は私の番よ。てやっ！」

緑のステッキを振ると竜巻が出て来た。それで紫の魔女を撃とうとする。だが魔女はまた笛を口にした。

「風も」

「そうはいかないわよ」

今度は赤音が動いた。彼女は光を放った。

竜巻は消すことができた。しかし光はそうはいかなかった。光が魔女を直撃した。

「ああっ！」

「やった!？」

「いえ、まだよ」

魔女に乾杯!

魔女は空中に浮きゆつくりと着地してきた。特に怪我もないようであった。

「迂闊だったわ。光を使う娘がいたなんて」

「驚いた？」

赤音は得意気に魔女に対して言った。

「私は光の魔法を使えるのよ。これは防げないでしょ」

「さっきのはね。けれどこれからは違うわよ」

「あら、強気ね」

「強気じゃないわ。だって」

そう言つと再び笛を口にした。

「私も光は使えるから」

「また音楽を」

今度は宝石の歌であった。グノーのオペラ『ファウスト』のソプラノの曲である。

無数の光が魔女の身体を包んだ。そして辺りを照らす。

「これなら貴女の光も通用しないわね」

「うっ」

その光で自分の光が相殺されることはあきらかであった。赤音は絶句せざるをえなかった。

「さて、どうするの？」

「それなら私が」

梨花が出た。黄色いステッキを出す。

「これで」

地響きがした。彼女は地の魔法の使い手なのだ。

「空に飛び上がっても無駄よ。地面がおっかけてくるから」

「そうみたいね。じゃあ」

曲を変えた。マーラーの巨人だった。

岩の巨人が姿を現わした。彼は魔女を自分の手の平の上に置き守った。それで梨花の魔法を防いだのだ。

「今度は巨人で」

魔女に乾杯！

「どう、音楽の力は偉大でしょ」

「それでも」

五人は魔女を一斉に取り囲んできた。

「あたし達五人いれば」

「貴女でも」

一斉に魔法を放ってきた。これはさしもの魔女もかわすしかなかった。彼女は再び木の上に位置した。

「危なかったわ。まさか五人一度に来るなんて」

「どう。一人一人じゃ貴女に負けるかも知れないけれど」

「五人いれば負けないわよ」

「そうみたいね」

五人を見下ろしてそう言葉を返した。

「五人で一つの力なのね。わかったわ」

「五人で一つ？」

「そうよ。それがわかったから今日はもういいわ」

そう言って籌を出しそれに跨った。

「待って、何処へ行く気なの」

「今日のところはこれだね。引き分けってところで」

「逃げるつもり？」

「いえ」

華奈子に答えた。

「仕切りなおしてどこかしら。校旗はもういいわ」

「もういいの」

「そうよ。そのかわり今度は」

くすりと笑った。

「別のものを賭けたいわ。それが決闘か」

「決闘」

「私と貴女達のどっちが凄いかね。どう、受ける？」

「受けない筈がないでしょ」

「華奈子ちゃん」

「やい紫の魔女」

「何かしら」

「あたしはね、売られた喧嘩は絶対に買う主義なのよ。それはわか  
つてるでしょうね」

「ええ」

魔女は頷いた。

「じゃあこれからも宜しくね。私も負けたくはないから」

「それはこつちの台詞よ。絶対に負けないからね」

「わかつたわ。それじゃ皆」

魔女は箒を進めさせながら言う。

「また会いましょう。次は負けないわよ」

「こつちこそ！」

華奈子の言葉が夜の学校に響いた。紫の魔女はその声を聴きなが  
ら満月の中に消えていくのであった。

第十話 完

2005・6・4

## 第十一話

### 第十一話 出会いの後で

紫の魔女との戦いの後華奈子達は少し変わった。魔法をこれまで以上に真剣にやるようになったのだ。

「あらあら」

先生はそれを見て少し驚いた声を出した。

「これは意外ですね。こんなに真剣に魔法を勉強してくれるなんて質問も増えた。先生はそれに対していつも真剣に答えた。それにより華奈子達はさらに魔法に磨きをかけていった。

暫く経つと今までは明らかに魔法の腕が違っていた。特に華奈子の成長は大きかった。

「えいっ！」

掛け声と共に火の玉を出す。それは今までのより一回りも二回りも大きかった。

それを自由自在に操ってみせる。それまでの彼女ならばできないようなことであった。

「すごいですねえ」

先生はそれを見て素直に賞賛の声を華奈子にかけた。

「こんな魔法使えるなんて凄いじゃないですか」

「いえ、まだです」

だが華奈子はそれに対して首を横に振った。

「これ位じゃ。あいつに勝てません」

キツと見据える。その目は燐として輝いていた。

「いい目をしていますね」

先生は心の中で彼女に対してそう言った。

「皆さんも。本当に頑張っていますね」

華奈子だけではなく他の四人もそうであった。春奈も赤音も美樹も梨花もこれまで以上に頑張っていた。そして魔法の腕を上達させ

魔女に乾杯！

ていた。

先生は生徒達のそんな成長を見て一人微笑んでいた。彼女にとっては皆可愛い生徒であり弟子であるからだ。

華奈子は家に帰っても魔法の勉強をしていた。学校の勉強よりそっちの勉強を優先させている程であった。

「こら、華奈子」

背の高いエプロン姿の女の人がそんな華奈子を叱った。華奈子と美奈子の母である由美子だ。二人にとっては厳しい母である。

「少しは学校の勉強もしなさい。あんたはそっちは全然駄目なんだから」

「そっちはどうでもいいの」

華奈子はそう反論する。

「今はね。こっちの方が」

「全く」

ママはそれを聞いて頬を膨らませた。

「スポーツで進学するつもりでも少しはそっちもしなさい。いいわね」

「気が向いたら」

華奈子の心はそちらにはなかった。やはり魔法に専念していた。

来る日も来る日も魔法の勉強を続ける。美奈子は美奈子で音楽の勉強を続けていた。

「ねえ美奈子」

華奈子は魔法の本を閉じると横の机に座る美奈子に尋ねてきた。

「何？」

「やっぱり毎日勉強しているとよくなるのかなあ」

「ええ、そうよ」

美奈子はそう答えた。

「毎日やっているとね。少しずつよくなっていくわよ」

「そうなんだ」

「実際に魔法かなり上手くなったじゃない」

「えっ、そうかなあ」

姉に言われて何だか照れてしまった。

「けれどまだただだけれど」

「勉強を続けたらいいわ」

妹に対してあらためてそう声をかける。

「ゆっくりとね。そうしたら」

ここでフルートを取り出した。

そして吹きはじめる。甘美な音色が部屋を支配した。

「このフルートだって最初は吹けなかったわ」

「そうだったの」

「けれど練習して吹けるようになった。だから華奈子も」

「そうね、あたしこれからも勉強する」

「うん」

「そしてあいつをやっつけてやるんだから！」

「頑張ってるね」

あいつが誰かは聞かなかった。そのかわり何やら思わしげに微笑む美奈子であった。

第十一話 完

## 第十二話

### 第十二話 使い魔

タロとライゾウは菊地家のペットであると同時に華奈子の使い魔でもある。使い魔は家のペットをそのまま使う場合が多いがこの二匹もそれは同じであった。

タロは犬、ライゾウは猫である。それぞれ仲が悪そうなものであるが案外そうではない。

タロはおっとりとしている。ライゾウは趣味が多い。それぞれ個性が違うのが二匹にとって非常によかった。

「ライゾウ、またビデオかい？」

テレビの前でちょこんと座るライゾウにタロが声をかけてきた。

「最近その番組に夢中だね」

「面白いからね」

ライゾウは振り返ってそう答えた。

「タロも見たらどうだい？面白いよ」

見れば特撮ものであった。五人の戦士達が悪の組織と戦うこの手ものでは定番の一つであった。

「僕はいいよ」

タロはその申し出をやんわりと断った。

「今は昼寝を楽しみたいからね」

「また昼寝かよ」

ライゾウはそれを聞いて呆れたような声を出した。

「旦那はいつもそればかりだね」

「他にすることがあるかい？」

「テレビを観たりゲームをしたり」

「どっちも好きじゃないからね。だったら寝るしかないよ」

「おやおや」

ライゾウは今度はおどけた声と仕草をした。

魔女に乾杯！

「寝てばかりじゃ面白くないじゃないか。短い一生、楽しもうぜ」  
「寝て楽しみたいな」

「しょうがないいな、旦那は。まあいいさ」  
ライゾウはそう言っただけで前に向きなおした。

「おいらはビデオ観とくから。何かあつたら声かけてくれよ」  
「ああ、そうするよ」

タロはそのまま奥の部屋に消えた。そして昼寝をはじめた。ライゾウは相変わらずビデオの前に釘付けであった。

夕方になるとタロは華奈子と一緒に散歩に出る。その時々ライゾウも一緒だったりする。今日は一緒だった。

「ねえタロ」  
華奈子が声をかけてきた。

「何だい？」  
「あんた最近太ってきてない？」

「気のせいだよ」  
「いや、気のせいじゃないよ。だってお腹が」

「見れば肉がついてきていた。」  
「寝すぎなんじゃないの？いつも昼寝してるでしょ」

「……ああ」  
渋々ながらそれを認めた。

「だからよ。寝るのもいいけど程々にね」  
「ほらね」

ライゾウがそれを聞いてタロに得意そうに言った。  
「旦那は寝てばかりだから。ちょっとはおいらみたいに趣味を多く」

「持たなくちゃ」  
「あんたもよ」

「おろ」  
だがここで華奈子のボディブローのような言葉が飛んできた。

「あんたはタロより太ってるじゃない。いつもテレビばかり見るから」

見れば腹はタロより出ている。たるんでいる程だ。

「確かスコツティって太りやすい体質よね」

「ま、まあね」

「ちゃんとダイエットしなさい。さもないとデブ猫になっちゃうわ

よ

「うう、デブ猫」

「いいわね。わかった!？」

「わかりました」

ガクリとうなだれた。さしものライゾウもデブという言葉には弱かった。

第十二話 完

2005・6・6

## 第十三話

### 第十三話 二人のお婆ちゃん

華奈子と美奈子には曾祖母ちゃんがいる。お父さんのお祖母さんでもうかなりの年だ。おっとりした性格の優しい人である。

その曾祖母ちゃんの妹もいる。曾祖母ちゃんより一つ下でこちらは少しせっかちな人だ。

二人は華奈子達の家近くに二人で住んでいる。二人共もう一人身で今は互いに二人で暮らしている。華奈子達は曾祖母ちゃんを大きなおばちゃん、その妹を小さなおばちゃんと呼んでいる。本当は曾祖母ちゃんと呼ばなければいけないのだが子供の頃舌足らずでそう呼んでしまいそれが定着している。

二人はよくこの曾祖母ちゃんの家に行く。いつも優しくしてくれるからだ。

「あ、華奈子だね」

「美奈子も。よく来てくれたね」

「おばちゃん元気？」

「ああ、元気だよ」

日差しのよい部屋で二人並んで座っている。背は華奈子達と同じ位だが顔はもう皺しかない。

それでも凄く優しい顔をしている。そして華奈子達が来るといつも笑ってくれるのだ。

「よく来てくれたね」

「一体何の用だい」

「別に」

華奈子達はそれに答えた。

「ただ顔見せに来ただけだけど」

「それで充分なんだよ」

「私等はあるた達の顔を見ればそれでいいんだからね」

魔女に乾杯！

二人はいつもそう言ってくれる。そしてお小遣いをくれるのだ。だから行くという一面が確かにあるがそれ以上にこの二人のお婆ちゃんが好きだった。華奈子と美奈子にとってはかけがえのない存在でもあった。

けれどそんな二人をとっても怖がるのもいた。

「またあの人達のとこへ行くの？」

「おいらは勘弁したいな」

「何で？とても優しいよ」

華奈子はそんなことを言うタロとライゾウを不思議そうな顔で見た。二匹はこの二人のお婆ちゃんが苦手なのだ。

「あんなに優しいのに。タロやライゾウにも優しいでしょ」

「そりゃそうだけれど」

「何か怖いんだ」

「怖い？」

それが華奈子にはわからなかった。どうしてなのか首を傾げる。だがお父さんがそれに答えてくれた。

「お祖母ちゃん達、華奈子達にとっては曾祖母ちゃん達はね」

「うん」

「昔うちで飼っていた犬や猫のしつけはね。お婆ちゃん達がしていたんだよ」

「そうだったの」

「ペシッと」

頭を叩く仕草をする。

「うん。それが凄くてね。少しでも悪さしたらペシッと叩かれるんだ。それでうちのペットは昔からあの二人には頭が上がらないんだよ」

「へえ」

華奈子はそれを聞いて意外そうな顔をした。

「お婆ちゃん達が」

「だからだろうね。タロやライゾウがお婆ちゃん達を怖がるのは。」

それを本能で察しているんだよ」

「そうだったんだ。ねえタロにライゾウ」

「何」

「やっぱりおばちゃん達が怖い」

「わかったでしょ、それ」

二匹は不機嫌そうに答えた。それが何よりの意思表示であった。

とても優しいおばちゃん達、けれど実は使い魔達ですら怖れるとても凄い人達なのであった。そして華奈子も美奈子もそんな二人が本当に好きだった。そして今日も遊びに言ってお菓子やお小遣いを貰うのであった。

第十三話 完

## 第十四話

### 第十四話 遠足にて

今日は遠足、華奈子達六年生はピクニックに出かけていた。場所は地元にある山である。かなり高い山として知られている。

「ふうっ」

春奈は入口のところでもう溜息をついている。

「こんな山登るの嫌よ」

「何言ってるの、まだ入口よ」

華奈子がそう言って励ます。五人は一組になってパーティーを組んでいた。

「頑張ろうよ、頂上まで」

「高いね」

春奈は上を見上げてそう溜息をついた。

「箒に乗ったらすぐなのに」

「それじゃあ何にもならないよ」

梨花が注意する。

「頂上まで歩いてこそ、だよ。少しずつ歩こう」

「お菓子もあるし」

美樹が言う。

「あたしもいるしね」

「赤音ちゃんはこけないようにね」

「わかってるわよ」

そんなやりとりの後で五人はようやく歩きはじめた。春奈はふうふう言いながら前へ進む。他の四人がそれをフォローする形となっている。

「足下気をつけてね……あつ」

水辺の岩場で赤音が転んでしまった。

「いたたたたた……」

魔女に乾杯！

「言ってる側から」

「赤音ちゃん、大丈夫？」

「うん、何とかね」

幸い怪我はなかった。赤音はこけなれているのか怪我一つなかった。

「けれど、危ないのは事実だからね。春奈ちゃんも気をつけてね」  
「うん」

春奈はゆっくりと足を進めていく。そして何とか岩場を越えた。だが頂上へはまだまだだ。

「まだあるのね」

「もう半分いったよ」

ここで華奈子がそう言った。

「あと半分、頑張ろうね」

「あと半分だけ」

「そう、半分だけ。頑張ろうよ」

「そうね」

春奈はその言葉に頷いた。

「私やってみるわ。そして何とか頂上まで行く」

「そう、そう自分で思わないと駄目なんだよ」

梨花の声も強いものになった。

「春奈ちゃんがそう思ったらやれるよ」

「こけてもね」

赤音もさつきこけたことをあえて自分で言っただけ励ます。

「立ち上がればいいから。それでまた歩きはじめればいいし」

「こけても」

「そうだよ」

「春奈ちゃん」

「美樹ちゃん」

今度は美樹が話し掛けてきた。

「五人で行こうよ、頂上までね」

魔女に乾杯！

「うん」

最後に美樹の言葉に頷いた。そして五人は頂上を目指すのであった。

第十四話

完

2005・6・9

## 第十五話

### 第十五話 頂上へ

華奈子達はそのまま歩いていった。春奈をフォローしながら上へ上へと進んでいく。

「もうちょっとだからね」

華奈子が春奈を励ます。

「だから頑張ろうね、春奈ちゃん」

「うん」

春奈は微笑んで頷く。汗をタオルで拭く。

「もう少しなんだね」

「そうだよ、もう少し」

また励ます。

「だから歩こう。歩けばそれだけ頂上に近づけるよ」

「そうだね」

「頂上に行ったらいいことがあるからね」

美樹も言う。

「いいこと!？」

春奈は美樹に尋ねた。

「そうよ、お弁当。私が今日の為に頑張って作ったお弁当があるのよ」

「美樹ちゃんの!？」

春奈だけではなかった。華奈子達もそれを聞いて目を輝かせた。

美樹は学校で一番の料理の名人と言われているのだ。その腕は家庭科の先生よりも上であった。

「うん。それもサンドイッチ」

「サンドイッチ」

聞いただけで涎が出そうであった。

「そうよ。ハムサンドにタマゴサンド、カツサンドにハンバーグサ

「ンドもあるわよ。あと野菜サンドも」

「凄い……」

「そんなに」

「豪勢ね」

「だから言っただじゃない。腕を振るっただ。早く食べたいでしょ」  
「勿論」

「四人は美樹にかぶりつくようにして頷いた。」

「ここじゃ駄目よね」

「華奈子ちゃん」

「美樹は本当に涎を垂らす華奈子に対して呆れた声を向けた。」

「駄目に決まってるでしょ。全部頂上で」

「そうなの」

「それを聞いて少しガツカリしたような顔になった。」

「けれど頂上に行ったら絶対にあるから。頑張ろうよ」

「そうね」

「赤音が頷く。」

「こけてもね。それにくじけず行きましょ」

「こけるのは赤音ちゃんだけよ」

「大丈夫だって……あつ」

「言っている側から転んでこけてしまった。」

「あたたたたた……」

「言わんこつちやない」

「それを見て他の四人は呆れてしまっていた。けれどそれで春奈はさらにリラックスできた。華奈子の励ましの言葉、美樹のサンドイッチ、そして今の赤音を見て心も元気さを取り戻したのだ。」

「じゃあ行こうか」

「うん！」

「最後に梨花が声をかけて皆頷く。そして頂上へ向けて最後の足を進めた。」

「遂に頂上が手に届くところまで辿り着いた。そして五人はそこに」

魔女に乾杯！

足を踏み入れたのであった。

第十五話 完

2  
0  
0  
5  
・  
6  
・  
1  
0

## 第十六話

第十六話 お弁当

長い長い道のりを経てようやく頂上に辿り着いた五人。ようやく待ちに待った食事の時間である。

「ねえ美樹ちゃん」

華奈子が身を乗り出して美樹にせがむ。

「早く出して、早く」

「ちよつと待つてよ」

美樹はそんな華奈子を子供をあやすようにして止めながらリュックのお弁当を取り出す。

「お弁当は逃げたりしないから。いい？」

「う、うん」

それでも物欲しそうな目であった。まるで獲物を狙うかのようであった。

「華奈子ちゃん」

そんな彼女を梨花が止めた。

「とりあえずは落ち着こ。私はお茶を持って来たよ」

「私はお菓子」

赤音が言った。

「わたしは果物」

「華奈子ちゃんは何？」

「あたしはおにぎり」

「おにぎり」

「うん。入れられるもの何でも入れてきたんだよ。ほら」

そしてリュックから枕の様に巨大な五つのおにぎりを出してきた。それは海苔で真っ黒になっていた。

「それ……おにぎり!？」

「うん、そだよ」

魔女に乾杯！

啞然とする四人に対して素っ気無く返した。

「外見は凄いけどね、美味しいよ」

「美味しいの」

「食べてみたらわかるよ。どう？」

「うっん」

「人数分あるのよね」

「五つあるでしょ。昨日夜遅くまでかかって作ったんだ」

「遅くまで」

「うん。美味しいと思うよ。だから食べて」

「それじゃあ」

サンドイッチと一緒にそのおにぎりも受け取った。そして一口食べる。

「どう？」

「うっん」

まずは味わう。モグモグと食べてみる。

「美味しい？」

「そうね」

四人は華奈子に対して答えた。

「結構ね」

「最初見た時は何かと思ったけれど」

「こうして食べると意外と美味しいね」

「そうでしょ。このおにぎりお母さんから教えてもらったんだ」

「お母さんから？」

「そうだよ。遠足の時にはこんなお弁当が美味しいって。それで昨日教えてもらったんだ」

「そうだったの」

「けれどそれ教えてもらったのは華奈子ちゃんだけ？」

「えっ!？」

「いえ、あのね、もしかして美奈子ちゃんもそうなのかなあ、って思ったんだけど。どうなの、そこんところは」

「うん、美奈子もだよ」

華奈子はそう答えた。

「美奈子も皆と一緒にのもの食べてるよ。ほら」

美奈子を指差した。見れば確かにこの枕のように巨大なおにぎりを食べていた。

「美奈子も一緒に作ったのよ。それで色々入れたんだ」

「確かに色々入ってるわね」

美樹がおにぎりを食べながらそう言った。

「タラコにエビ天、梅干、ソーセイジ」

「ツナに昆布も入ってるわね。あと鮭や若布も。ジャコまで」

「ね、だから美味しいでしょ？」

「そうね。案外こういうのもいいわね」

「私も今度はサンドイッチじゃなくておにぎり作ろうかな」

「ええ、それは止めてよ」

だが華奈子は美樹のその言葉を聞いてあからさまに嫌そうな顔をした。

「どうして？」

「だってこのサンドイッチも凄く美味しいもん。美樹ちゃんのサンドイッチまた食べたいから」

「わかったわ」

美樹はそれを聞いて微笑んでそう答えた。

「じゃあまたここに来ましょう。今度は五人でね」

「今度は魔法使ってね」

「春奈ちゃん、それじゃあ面白くないよ」

「赤音ちゃんだってこけなくてすむよ」

「それはそれ、これはこれよ」

五人はそんなやりとりをしながら朗らかな雰囲気です事を探っていた。空では青い空と白い雲、そして黄金色の太陽がそんな五人を見守っていた。

魔女に乾杯！

第十六話

完

2  
0  
5  
・  
6  
・  
1  
2

## 第十七話

### 第十七話 紫の魔女再び

華奈子達は今日も塾に行っていた。先生を待つ暫しの間であった。「ん!？」

空けている窓から何かが入って来た。一枚の紙飛行機であった。

「紙飛行機!？」

「何だろ」

着地したそれを開く。するとそこには紫の字でこう書かれていた。

『お久し振り。元気にしていたかしら』

「お久し振りって」

華奈子達はそれを聞いておおよその予想がついた。

「まさか」

そう思いながらも読み続ける。

『また貴方達と勝負したいと思っているのだけれど。明日の夜いいかしら』

「明日の夜」

それを見て疑惑はさらに深まった。

『こちらもとっておきの切り札を用意しておくから。楽しみに待っていてね』

そして最後にこう書かれていた。

『紫の魔女より』

「紫の魔女」

それを見た五人の顔が一変した。

「あいつ、また出て来たのね」

「今度は何を考えているのかしら」

華奈子達は顔を見合わせてそう話をはじめた。

「またうちの学校の旗を狙っているんじゃないかしら」

春奈がそう言う。

魔女に乾杯!

「いえ、それはないと思うわ」

しかしそれは梨花によって否定された。

「どうして？」

「ほら、こつした話にはよくあるじゃない」

「よくあること」

「ええ。怪盗つてのはね、一度盗むのに失敗したら次は狙わないものなのよ」

「そういふものなの」

「ええ。だから今回は違うと思うわ」

「じゃあ何かしら」

美樹が尋ねてきた。

「多分私達への直接の挑戦状よ」

「私達に」

「ええ。だから切り札を用意しているなんて言うのよ」

「そうなの」

「問題はその切り札が何かね」

今度は赤音が言った。

「一体何を用意しているやら」

「そこまではわからないけれど」

梨花は考えながらそれに答えた。

「きつとんでもないのを用意していると思うわ。紫の魔女だから」

「そうだね」

華奈子がそれに頷く。

「また皆で力を合わせて戦おう。そうじゃないとあいつには勝てない」

「そうね」

梨花だけではなかった。他の三人もそれに頷く。

「明日の夜、いいわね」

「ええ」

「行きましょう」

魔女に乾杯！

こうして彼女達はまた紫の魔女と激突することになった。その日は大人しく授業を受け次の日の戦いに備えるのであった。

第十七話 完

2005・6・16

## 第十八話

第十八話 切り札

華奈子達はその日の夜まずは塾の前に集まった。皆既に魔女の服に着替えている。

「いい？」

「うん」

華奈子の言葉に頷く。皆もう真剣な顔であった。

「皆さん」

そこへ先生が声をかけてきた。

「先生」

「いつも通りにやれば大丈夫ですからね」

「はい」

先生の言葉にも頷いた。

「ただ怪我には気をつけて。いいですね」

「わかりました」

いささか場違いな感じもしないではないがここは先生の言葉に従った。先生の言葉に従って間違いがあったことはないからである。それを考えても不思議な先生であった。

五人は先生に見送られて夜の街の中を進んだ。そこは華奈子達が住んでいる街の中である。

「何か昼と夜じゃ違うね」

「うん」

五人は寄り添って進んでいる。

「何か出てきそう」

「赤音ちゃん、実際に出るのよ」

美樹がそれに答えた。

「紫の魔女が。だから挑戦状を送ってきたんだから」

「そうだったね」

魔女に乾杯！

赤音はそれに頷いた。

「紫の魔女、一体何処に出て来るんだろう」

今夜は月はなかった。そのかわりに色取り取りの星達が濃紫の空に瞬いていた。華奈子達はそれを見上げながら夜道を進んでいた。少し進んだ。すると何処から笛の音が聴こえてきた。

「あれは」

その音には聴き覚えがあった。あの笛の音であった。

「来たわね」

「紫の魔女」

「ええ」

上の方から声がした。五人の右隣の家の屋根からであった。そこに紫の魔女がいた。彼女は一人屋根の上に立っていた。

「お久し振り」

「会いたくはなかったけれどね」

華奈子が悪態を交えてそう返す。

「一体何の用なの、今度は」

「貴女達に見せたいものがあって」

「あたし達に!？」

「ええ、そうよ」

彼女は答えた。

「貴女達に。是非見せたいものがあって」

「それは何なのかしら」

梨花が問うてきた。

「この前の決着をつける為でしょうけれど。よかったら教えてくれない?」

「わかったわ」

彼女はうつすらと微笑みそれに答えた。

「じゃあ見せてあげるわ。私の切り札」

「切り札」

再び笛の音が鳴った。さっきとは別の曲であった。

魔女に乾杯！

「今度は何！？」

暫くして地響きが聞こえてきた。そして華奈子達の前に何かが出て来た。

「これは……」

それはゴーレムであった。一体の土の巨人が華奈子達を見下ろしていたのであった。

第十八話 完

2005・6・16

## 第十九話

### 第十九話 ゴーレム

巨人が五人の前に立っていた。そして彼女達を見据えていた。

「嘘……」

華奈子達は言葉を失っていた。

「何で貴女がゴーレムなんて」

「不思議かしら」

紫の魔女は華奈子に尋ねてきた。

「私がゴーレムを使えるのが」

「こんな高等な魔法を」

ゴーレムは限られた優秀な魔法使いにしか使えないのである。当然子供に扱えるシロモノなどではない。だからこそ驚いているのである。

「使える人は使えるのよ」

それが紫の魔女の答えであった。

「力があればね」

「じゃあ貴女にはそれがあつていつの!？」

「ええ、勿論」

魔女は涼しげな声でそう答えた。

「だから今ここに居るのじゃないかしら」

「くっ」

「さて、どうするの?」

今度は紫の魔女が問うてきた。

「私のゴーレムと戦う?それとも逃げるのかしら」

「馬鹿にしないで」

華奈子がキツとして言葉を返した。

「あたし達はね、貴女なんかには負けないわよ」

「あら」

魔女に乾杯!

「こんなゴーレムだつて」

今度はゴーレムを見据える。

「絶対に勝つてやるんだから。何さ、こんな人形を」  
言いながら杖を前に構えた。

「燃やしてやるんだから」

そして炎を放った。火の玉がゴーレムに襲い掛かる。しかしそれでも魔女は笑ったままであった。

「燃やすことができたらね」

「えっ!？」

だがそれに気付いたのは遅かった。既に魔法は命中していた。しかしそれでもゴーレムは立っていた。

「そんな、火の玉受けても平気だなんて」

火の玉は空しく消えてしまった。ゴーレムには全く効いてはいなかった。

「そんな火の玉じゃゴーレムは倒せないわよ」

「クッ」

「じゃあ今度は私が」

春奈が前に出た。そしてシャボンの嵐をゴーレムに吹きつける。

「火が駄目ならこれで」

青いシャボンがゴーレムを包む。その中には水がたっぷりと入っているのだ。

しかしそれも効果はなかった。ゴーレムは平然とその場に立っていた。

「水も駄目なんて」

「風ならどう？」

美樹が鎌イ足を放つ。しかしそれも弾き返された。

三人の攻撃は何の効果もなかった。たまりかねて赤音が出ようとしたがそれは梨花が止めた。

「梨花ちゃん、どうして!？」

「駄目よ、どのみち効果がないわ」

彼女はそう言ってそれを止めたのであった。

「あのゴーレムには私達の攻撃は通用しないわ」

「じゃあどうすればいいの!?!」

「わからない」

残念そうに首を横に振った。

「どうすればいいのか。けれど」

声が憐としたものとなった。

「やらなくちゃいけない。そうでしょ、華奈子ちゃん」

「うん」

華奈子はそれに頷いた。そしてあらためてゴーレムを見据えた。

「絶対やつつけられる筈だからね」

「できるかしら、貴女達に」

紫の魔女はまだ笑っていた。そしてその笑みが濃紫の夜の中に無気味に浮かび上がっていた。

第十九話 完

2005・6・17

## 第二十話

### 第二十話 弱点

紫の魔女と彼女が操るゴーレムは華奈子達と対峙し続けていた。だが魔女の方からは一向に動いてはこない。ただ華奈子達が勝手に消耗していくのを待っているだけのようであった。

「やっぱり」

春奈が動かない魔女を見てそう言った。

「どうしたの、春奈ちゃん」

「赤音ちゃん、どうして魔女は動いてこないのだと思う？」

「それは」

問われたが赤音にはそれがわからなかった。首を傾げてしまった。

「何でだろう。御免、わからないや」

「わたし達の消耗を待っているのよ」

「あかし達の！？」

「ええ」

今度は華奈子に対して頷いた。

「魔法を使うと疲れるわよね」

「うん」

この場合は精神的といった意味である。魔法を使うことは精神力を使うことであった。運動で体力を使うのと同じことであった。

「魔女はそれを待っているのよ」

「そうだったの！？」

「さて、どうかしら」

上を見上げて問う華奈子を見下ろしてクスクスと笑っていた。

「もっとも私にとっては貴女達に勝てればそれでいいのだけれどね」

「それでゴーレムを出してきたのね」

「結論から言えばそうね」

梨花にそう返す。

魔女に乾杯！

「苦労したわよ、ゴーレムを作るのは」  
笑いながらそう語った。

「魔力も随分と使ったし。けれど貴女達に勝つ為ならね。どんな苦労でも平気よ」

「それでそのゴーレムは動くのかしら」  
「勿論」

美樹の言葉にくすりと笑った。  
「動かせるわよ、ほら」

そう言っつて笛を吹きはじめた。先程の曲である。するとゴーレムが地響きを立てて動きはじめた。

「な・・・」  
「本当に動かせるなんて」

「そうじゃないとゴーレムを作った意味がないもの」  
魔女は笑っていた。そしてひらりとゴーレムの右肩の上に飛び移ってきた。そして言った。

「ゴーレム、この娘達の相手をしてあげて」  
ゴーレムは答えない。答えるかわりに魔女の笛に反応して動く。

そして五人に迫ってきた。  
「来るわ！」

梨花が叫ぶ。五人は咄嗟に左右に散った。  
「春奈ちゃん！」

華奈子は反応が遅れた春奈を引っ張った。そして道の端に引き寄せた。それで難を避けた。

「あら」  
魔女は五人がゴーレムをかわしたのを見て意外といったような声を漏らした。

「ゴーレムをかわすなんて。やるわね、やっぱり」  
「この程度ならね」

華奈子がキツとした顔で魔女を見据える。  
「あなたのお人形さんの動きはわかるわ」

「そう」

魔女はそれを受けて再び笛を吹きはじめた。

「ならまた行くわよ。今度はどうかした」

「!?!」

そこであることに気付いた娘がいた。彼女はそれを見ていることに気付いたのであった。

第二十話 完

2005・6・20

## 第二十一話

### 第二十一話 攻略開始

「あれね」

「ええ」

五人は魔女を見てヒソヒソと話をしている。

「あれをやればいける筈よ。わかったわね」

梨花が中心になり話をする。そして五人は赤音を扇の要として散った。

「また何かするつもりかしら」

「その通りよ」

赤音が魔女を見上げて答える。

「紫の魔女、覚悟しなさい」

「ええ、わかったわ」

魔女は悠然と微笑んで頷いた。

「私が勝つのをね。違うのかしら」

「そう言ってられるのも今のうちよ」

「そうそう」

華奈子の言葉に美樹が頷く。

「紫の魔女、今度こそやっつけてやるんだから。見てなさいよ」

「一体どうやって私を倒すつもりなのかわからないけれど」

魔女はまだ余裕のある態度であった。

「ゴーレムをやっつけることができるのかしら、貴女達に」

「ゴーレムをやっつける必要はないのよ」

「あら」

「貴女さえ何とかしたらね。行くわよ」

まずは美樹が攻撃を仕掛けてきた。風で魔女を襲う。

しかしそれは魔女が起こした風で相殺された。魔女は笛を奏でて風を作り出したのだ。

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

春奈の水も。シャボンもまた中和された。

「さっきのと変わらないじゃない。これで私を倒すつもりなの？」

「そうね。確かにこれじゃ貴女を倒せないわ」

「わかってるじゃない」

華奈子の言葉に応える。

「じゃあ大人しくやつつけられなさい。痛くはしないから」

「ところがね」

ここで赤音が笑った。

「私がいるのよ！」

「えっ！」

「えーーーーーい！」

赤音は光を放ってきた。それで魔女を狙う。

「皆、今よ！」

「うん」

他の四人もそれに合わせる。そして攻撃を一斉に放った。

「クッ！」

さしもの魔女もそれをかわすことはできなかった。光の魔法を受

け笛を落してしまった。

「あっ！」

だが魔女はその笛を何とか受け取った。しかしその際バランスを

崩し地面に落ちてしまった。

「やった!？」

五人はそれを見て勝ったかと思った。だがそう判断するにはまだ

早かった。

魔女は地面すれすれのところで笛を手にした。そして笛を吹いて

宙に浮いた。

「危ないところだったわ」

「何てしぶとい」

だがゴーレムの動きは止まった。そのまま人形になってしまったかのようにであった。

「動かなくなっちゃったね」  
「うん」

ゴーレムは術者の精神のコントロールで動く。それが一旦途切れるとそれで動かなくなってしまうのである。だからこそ扱いが難しいのだ。

「どうやらゴーレムはもう駄目みたいね」  
それは魔女もわかっていた。

「今回も貴女達の勝ちみたいね、残念だけど」  
「えっへん」

赤音が胸を張って威張る。

「どう、私の光の魔法は」

「大したものよ。どうやら今度は光の魔法も覚えなくちゃいけないみたいね」

「あら」

ヤブヘビだった。赤音はかえって傷口を広げてしまった。

「もう赤音ちゃんたら」

春奈がそれを聞いて困った顔をする。

「しっかりしてよ」

「御免なさい」

「けれどこの戦いは貴女達の勝ちよ」

「潔いじゃない」

「今度があるからね。それじゃ」

魔女はそう言い残すとそのまま何処かへと消えた。こうして五人と紫の魔女の戦いはまたしても五人の勝ちに終わった。しかしそれでも戦いは終わったわけではなかった。ライバルとはそういうものであるから。

魔女に乾杯！

2  
0  
5  
・  
6  
・  
2  
7

## 第二十二話

### 第二十二話 春奈の勉強

紫の魔女との二回目の戦いの後五人はまた魔法の勉強をさらにレベルアップさせることにした。特に春奈はそれに熱心であった。

「ねえ春奈ちゃん」

彼女のペットであり使い魔でもあるカエルのリヤンが話し掛けてきた。今彼女達は春奈の家の裏の池の側にいた。そこにはもう一匹の使い魔であるカメのイーもいた。

「何？」

「最近やけに魔法の練習してない？」

「そうかなあ」

「いや、絶対そうだよ」

イーもそれに答えた。

「この前の紫の魔女との戦いから。前よりもずっと身を入れてるじゃない」

「わたしはそんなつもりないけれど」

「けれど実際にそうだし。やっぱり何か思うところがあったの？」

「ないと答えたらどうなのかなあ」

彼女は首を傾げながらそう答えた。

「イーちゃんもリヤンちゃんも信じる？」

「ちょっと信じられないな」

「今の春奈ちゃん見ると」

「やっぱり」

それには春奈も薄々ながらわかってはいた。だがあえて問うたのである。

「何かね、あの紫の魔女って強くて。このままじゃ今度は勝てないと思うって」

魔女に乾杯！

「そんなに強いのに」

「ってイーちゃん」

リヤンがイーを呆れた顔で見た。

「あんたこの前の学校での戦いの時いたじゃないか」

「そんなの忘れてたよ」

「これだからねえ」

リヤンはそれを聞いて呆れた顔のまま声を漏らした。

「使い魔だつてのに。何か春奈ちゃんの足手まといになってないかな」

「ううん、それはないよ」

しかし春奈は笑顔でそれを否定した。

「イーちゃんもリヤンちゃんも頼りにしてるから。頼むわね」

「そう言ってもらえるとなあ」

「僕達も頑張るか」

「そうよね、三人で頑張ろう。そして何か新しい魔法を身に着けたら」

「それもいいけれどな」

ここで後ろから男の子の声がした。中学生位の声であった。

「あ、お兄ちゃん」

春奈はそれを聞いて笑顔で後ろを振り向いた。するとそこには彼の兄である夏雄がいた。おっとりした外見の妹とは違い

背が高くすらっとした美少年である。黒いジーンズが茶色の髪の毛の細い顔によく似合っていた。

「そろそろおやつにしないか？クッキーあるけど食べるか」

「クッキー！？ひよつとしてお兄ちゃんが焼いてくれたの？」

実は彼女の兄はお菓子作りの名人なのである。春奈は兄の作ったお菓子が大好物である。

「ああ。紅茶も入れたぞ。シナモンティーだ。どうだ、一緒に」

「うん、今行きます」

春奈は魔法の勉強を止め急いで家の中に入って行った。それを見

魔女に乾杯！

てイーとリヤンはいささか呆れた顔を見合わせてこつ  
囁き合った。

「魔法よりもお兄ちゃんみたいだね」

「うん」

流石の魔女もお兄ちゃんには勝てない、いや弱いようである。

第二十二話

完

2005・7・3

## 第二十三話

第二十三話 おやつの後で

夏雄の焼いたクッキーを食べた後でまだ魔法の勉強に戻った。イ  
ーとリヤンを相手に勉強を続ける。

「やっ」

シャボンを出す。それで全身を包みこむ。

「これならどうかしら」

「うっん」

二匹の使い魔が考え込みながらそれに答える。

「ちよつとねえ」

「それじゃあ駄目だと思うよ」

「何で？」

「シャボン玉だよね」

「ええ」

春奈はそれに答えた。

「当たつても痛くないよね。身体を守つたりするのはいいけれど」  
「身体を守るのにも限度があるんじゃないかな、そのシャボンじゃ」  
「そうなの」

それを聞いて少し落ち込んでしまった。

「じゃあシャボンは駄目かな」

「いや、シャボン自体が駄目なんじゃなくてね」

イーがそれに対して言う。

「そのままじゃ駄目なんだろ。シャボン玉って只の泡じゃない」  
「うん」

「それじゃあ何にもならないよ。何か工夫しないと」

「工夫っていつてもどうしたら」

「方法は幾らでもあるよ」

リヤンがそう答えた。

魔女に乾杯！

「あるの？」

「うん。蟹の泡とかあるじゃない」  
「蟹の」

「あれみたいにさ。溶けたりしたらいいと思うよ。そうしたら攻撃にも役に立つし」

「そうかあ、それね」

「そうだよ。まあ試しにやってみたら。実際にそれでシャボンが強くなったらそれでいいじゃない」

「わかったわ。やってみる」

「やってみてよ、見ているから」

「ええ」

こうして春奈はシャボン玉に工夫をしてみた。そして暫くしてシヤボン玉で石を溶かすことができるようになった。シャボンに魔力を入れてみたのである。ものを溶かす魔力である。

「やったね」

「うん」

春奈は二人に対して満足そうに頷く。

「これであの紫の魔女にももっとまともに渡り合えるかしら」  
「結構違ってくると思うよ」

イーが答える。

「だから今までよりは安心していいと思うよ」

「うん」

「あ、春奈」

「ここでまた兄の声がした。」

「何？お兄ちゃん」

「夕食の支度ができたぞ。今日は御前の好きなホワイトシチューだぞ」

「ホワイトシチュー！？」

それを聞いた春奈の目の色が変わった。星が瞬いているようであった。

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「そうだ。早く来い。冷えるぞ」

「うん、待って」

「紫の魔女には勝てても」

「お兄ちゃんとホワイトシチューには勝てないみたいだね」

魔法でも勝つことはできない相手がいるということであった。

第二十三話 完

2005・7・4

## 第二十四話

### 第二十四話 痩せるには

食っちゃ寝、食っちゃ寝で太ってしまったライゾウ、仕方なくダイエットに励むこととなった。

「ダイエットっていつてもなあ」

タロや華奈子と一緒に散歩する。だがそれでも一向に痩せない。

「それでどうして痩せないんだよ」

「だってなあ」

タロの問いに答える。

「運動した後って御飯が美味しいだろ？」

「ああ」

「だからつい食べてしまっただよ。キャットフードが美味しくてな」

「そうだったのか」

「そうなんだ。だからおいら痩せないんだよ」

「それが理由になると思ってるの？」

「あ、華奈子ちゃん」

見れば華奈子が上にいた。そして怒ったような顔で彼を見下ろしていたのだ。

「そんなこと言ってるから痩せないのよ。あんた今の自分の姿鏡で見たことある？」

「きつと美少年なんだおるな。おいらって顔も毛並みもいいし」

「何言ってるのよ。今のあんたってねえ」

「うん」

「まるでツチノコよ。そこまで太っておかしいと思わないの？」

「何、ツチノコ!？」

「そうよ、お腹見てみなさい、お腹」

「うっ……」

見ればその通りであった。ライゾウのお腹はもう脂肪でたるみき

魔女に乾杯！

っていた。本当にツチノコそっくりの体型となっていたのであった。

「こんなになつてたのか、おいらの腹」

「わかつたでしょ？もう少し真面目にやりなさい」

「真面目に つつてもなあ」

けれどライゾウはそれを聞いてもまだ真剣そうではなかった。

「そのうち痩せるからいいじゃない」

「あつきれた」

「華奈子、何言ってるの？」

ここで美奈子が顔を出してきた。

「あ、美奈子」

「さつきからライゾウ達と何か話してるみたいだけれど」

「うん、ちよっとね」

タロもライゾウも使い魔だったら人間の言葉を話せるのである。この世界では動物が人の言葉を話すのもその逆もまあよくあることであつた。

「ライゾウがダイエットを真面目にやなくて。困ってるのよ」

「それだつたらいい考えがあるわよ」

「いい考え？」

「何だろうな」

「嫌な予感がするな」

ライゾウは本能的に何か危険なものを察していた。そして不幸にもそれは的中した。

「おばちゃんのとこに預ければいいのよ」

「おばちゃんのところ！？」

「ゲッ」

それを聞いたライゾウの顔が真っ青になった。

「嘘……」

「嘘じゃないわ。そうでもしないと痩せないでしょ」

「確かにね。おばちゃんならライゾウを躡られるし。いいかも」

「ちよ、ちよっと待ってよ」

ライゾウは慌てて起き上がって二人に対して言う。

「それだけは止めてくれないかな、頼むから」

「じゃあ真面目にダイエットする？」

「うっ……」

「するならおばちゃんに預けないけれど」

「……」

こうして渋々ながらもダイエットに励むライゾウであった。そして何とか体型を元通りにした。ほんの少しの間だけのことであったが。

## 第二十四話

完

2005・7・12

## 第二十五話

### 第二十五話 尻尾

ライゾウもタロも使い魔である。だから人間の言葉も話せるし少しだが魔力もある。この世界では他の動物の寿命も長かったりするので彼等の魔力も大きくなったりするのである。

こうした使い魔は魔力が高くなるにつれて変化がある。その一つとして尻尾が増えたりするので。

「ねえタロ、ライゾウ」

華奈子は二匹に尋ねてきた。

「どうしたの？御主人」

「二人共尻尾は増えたりしないの？」

「尻尾！？」

二匹はそれを聞いて素っ頓狂な声を出した。

「尻尾が増えるって？」

「うん」

華奈子は何気無い顔で頷いた。

「ほら、二人共使い魔だよね」

「うん」

「華奈子のね」

「だったらさ、魔力も持ってるし。やっぱり尻尾とか増えていくの？」

「あれはちよつと法則があつてね」

タロが説明をする。

「魔力が高まるとどっかでそれを現わしたりするんだ。その一つが尻尾なの」

「そうだったの」

「他にも毛や目の色で現わすこともあるよ。魔力が高まると色が変わる場合もあるんだ」

魔女に乾杯！

「そうなの」

「例えばおいらの目の色は今黒だよね」  
「うん」

ライゾウの言葉に頷く。

「けれど魔力が高まればこれも変わるんだ。青くなったり緑になつたり。最高位で金色だったかな」

「じゃあライゾウも何時かは目が金色になるのね」

「偉くなればね」

彼はそう言った。

「もつともおいらはそこまで偉くなるつもりはないけれど」

「そうなんだ」

「僕も今は黒の虎毛だね」

今度はタロが言った。

「うん」

「けれどね、魔力が高くなると変わるんだ。最後は白金色になるんだったかな」

「プラチナブロンドね」

「そうだよ。けれど僕もそこまで偉くなるつもりはないな」

「どうしてなの？ライゾウも」

「御主人と一緒にいたいからね」

タロはこう述べた。

「あたしと？」

「そうだよ。御主人と一緒にゆつくりとしていきたいし」

「華奈子だと楽できるからね、ドジだし」

「もつ」

ライゾウの言葉に一旦は頬を膨らます。

「つまりあたしの側でぐうたらしたいわけね。呆れた」

「まあそういうことだね」

ライゾウは悪びれない。

「下手に魔力が上がったら華奈子も上がらなくちゃいけないし。そ

うなっいたらおいら達も華奈子も大変になるしね」

「コツコツと、ゆっくりやっていけばいいさ。焦らずにね」

「まあそうするか」

「そうそう」

「それが楽だし」

「こら、ライゾウ」

「あ、いけね」

華奈子に叱られて頭を抱え込む。だが華奈子は怒っていないながらも機嫌がよかった。二匹の言葉が嬉しかったからである。

第二十五話 完

2005・7・14

## 第二十六話

### 第二十六話 遊園地で

赤音も紫の魔女との戦いの後修業に入っていた。彼女は何故か遊園地にいた。

「何でこんなところにいるのさ」

「おかしくない」

彼女の使い魔であるウサギのジップとハムスターのハリーが彼女を見上げて訳がわからないといった声をあげる。見れば彼女も訳がわかっていない。

「何でだろうね」

「ちよつと待つてよ赤音ちゃん」

それを聞いたジップがあまりかねて言う。

「赤音ちゃんもわかってないの？」

「うん」

「うんじゃないよ」

ハリーはもう呆れていた。

「そんなので修業になると思ってるの？」

「もう、御主人はこれだから」

「だってお姉ちゃんがここがいいって言ったんだもの」

赤音はキョトンとしたままそう答えた。

「お姉ちゃんが？」

「うん」

彼女の姉は高校生である。ドジな妹と違いしっかり者の美人として知られている。いささか惚れっぽいのがタマに傷でいつも連れてくる彼氏が違う。

「赤音、こつちよ」

遠くから声が聞こえる。見れば黒いロングヘアにTシャツにジーンズ、そしてシューズといった身軽な服装の長身の女の子がいた。

魔女に乾杯！

彼女が赤音の姉である葵だ。年は離れているがれっきとした姉妹である。

「あ、お姉ちゃん」

赤音は葵が呼び掛けた方に顔を向けた。

「そつちで修業するのね」

「そうよ」

そして葵はそれに答えた。

「いこ、ジップ、ハリー」

そして二匹の使い魔を連れてそちらに向かう。彼等は主人の足下をとことこと歩きながら溜息をついていた。

「なあジップ」

ハリーが相方に声をかける。

「何だい？」

「御主人まともに修業できると思う？」

「ここ何処だと思ってる？」

ジップはそれに対して溜息と共に答えた。

「遊園地だよ。修業なんてできる筈ないじゃない」

「やっぱりそう思うか？」

「当然でしょ。遊ぶ場所でどうやって修業なんてするのさ」

「そつだよなあ。じゃあ姉さんはどうしてこんなところに御主人を連れて来たのかな」

「自分が遊びたいからじゃない？」

ジップは素っ気なく答えた。

「まさか」

「あれ見て言える？」

ジップはそう言いながら目の前を右の前足で指し示した。すると葵の横に格好いい男の子がいた。

「あれ、何かわかるよね」

「………うん」

ハリーは力なく答えた。

「彼氏だね。それもおニユーの」

「わかるだろう。どうせデートついでに呼んだんだよ」

「姉さんらしいというか何というか」

「まあ期待しないで付き合おうよ」

「うん」

二人は溜息をついたまま赤音について行った。だが彼等の主人はそんなことは知った由もなくつきつきとして姉のところに向かうのであった。

## 第二十六話

完

2005・7・22

## 第二十七話

### 第二十七話 鏡の部屋

赤音が連れて来られたのはミラーハウスであった。鏡の壁で作られた迷路であった。

「ここで………?」

「そうよ」

葵は答えた。

「ここなら赤音の光の魔法の修業にピッタリでしょ。だから連れて来たの」

「そうだったの」

「じゃあ後で迎えに行くからね。それまで頑張って」

「あ、お姉ちゃん何処行くの?」

「何処つて? 決まってるじゃない」

姉はくすりと笑って妹に答えた。

「デートなのよ。それじゃ」

そう言い残してその場を後にした。自分よりもまだ背の高い彼氏の手を抱き付いてミラーハウスを後にした。

「行っちゃった………」

「何とまあ」

二匹の使い魔はそれを見て呆気にとられていた。

「やっぱりデートだったんだね」

「けれど修業の場所を提供してくれただけでもよしとしますか。御主人」

二匹は赤音を見上げた。

「じゃあ早速はじめましょ。用意はいい?」

「うん」

彼女はそれに頷いた。

「何時でもいいよ」

魔女に乾杯!

「よしてきた」

「じゃあ早速魔法を使っちゃって」

「じゃあ」

彼女はそれに頷き右手にステッキを取り出した。そしてそれを前に向けて出した。

「えいつ！」

光が飛び出た。そしてそれが一直線に鏡に向かう。

「むっ」

二匹は目を瞠った。光はそのまま鏡に反射された。そして所々にぶつかる。

「おっと」

二匹はそれを避ける。避けながら赤音を見る。

「赤音ちゃん、大丈夫？」

「うん、何とかね」

赤音も光を避けながら言う。

「一つだからまだ何とかなるよ」

「一つだから」

それにジップがピンときた。そして赤音に対して言った。

「ねえ赤音ちゃん」

「何？」

「これが二つや三つだったらどう？よけられる？」

「それは……」

ここでドジな赤音は足に当たってしまった。

「うっ」

「大丈夫!？」

「うん、何とかね」

威力は抑えてある。傷もなく何とか無事に済んだ。

「うっん、一個でもやっぱり辛いなあ」

「御主人とろいから」

「こらっ」

からかうハリーをジップが叱る。

「それはないだろうが、それは」

「悪い悪い。けれどこれで答えは出たんじゃないか？」

「答え？」

「そうさ」

ハリーはニヤリと笑った。そして赤音と相棒に対して言った。

## 第二十七話

完

2005・7・22

## 第二十八話

第二十八話 跳ねる光

「赤音ちゃん」

ハリーは赤音にあらためて声をかけてきた。

「何？」

「もう一回魔法を撃ってみて」

「いいの？」

「ああ。是非やって」

ハリーは彼女を急かした。

「何回もね。続けて撃つんだ。けれどそれは床に向けて」

「床に？」

「そうだよ。まとめて撃つんだ。それも広範囲に」

「わかったわ。それじゃ」

赤音はそれを受けてステッキを下に向けた。そして魔法を続けて放った。

「えいっ！」

光が床に撃ちつけられる。それは床を撃つて跳ねた。

そして次に鏡にぶつかった。それはまた跳ねた。

「赤音ちゃん、よけて！」

「いや、よける必要はないよ！」

ジップが叫んだところでハリーがそれを制止した。

「えっ！？」

「光の魔法を自分にかけるんだ！そして光を中和するんだ！」

「うん！」

赤音はそれに頷いた。すぐに光の壁が彼女を包んだ。

「これでいいの？」

「うん」24

ハリーはそれを見て頷いた。

魔女に乾杯！

「そうさ。それで自分の光の魔法は怖くはない。問題はバウンドする魔法なんだ」

「これが一体どうしたんだよ」

ジップはその魔法を避けながらハリーに問うた。

「よけにくいだろ？普通に相手に目掛けて一直線に放つより」

「まあね」

実はハリーも必死に避けていた。

「だからさ。今までの魔法よりもずっと効果があるよ。だからお姉

さんもここに連れて来たんだ」

「そうだったんだ」

赤音もそれを聞いてよくやく理解した。

「今度はお姉ちゃんに感謝しなくちゃね」

「ただ赤音ちゃんの鈍臭さを考えるとね。危険な賭けだったけど」

「けれどそれで光の壁も身に着けたんだしいいんじゃないかな」

「それもそうね」

赤音もそれに頷いた。

「けれど、今回は苦労したわ」

「どうしてだい？」

「だって魔法が跳ねるんだもの。よけられないかと思ったわ」

「そこがいいんじゃない」

「えっ!?!」

「赤音ちゃんがよけにくいってことは相手だってそうなんだよ。だから効果があるんじゃないか」

「そついえばそつか」

「そつかって………。赤音ちゃんって本当に呑気なんだから」

「私は別に呑気じゃないよ。ただドジなのは認めるけれど」

「やれやれ」

「赤音……」

ここで姉の葵の声がミラーハウスの外から聞こえてきた。

「もう帰るつもりだけどいい？」

「あ、お姉ちゃん」

「デートも終わったのかな」

「そうみたいだね」

二匹の使い魔はそれを聞いて囁き合った。

「そろそろ帰らない？そつちの修業次第だけれど」

「うん、こつちはもういいよ」

「じゃあ帰りましょ。アイスクリーム奢ろうか？」

「うん！」

「最後はものでつる、か」

「中々頭のいいお姉さんだね。魔女の姉だけはあるよ」

二匹の囁きはシニカルさを増した。だがそれは二人には聞こえなかった。

## 第二十八話

完

2005・7・31

## 第二十九話

### 第二十九話 葵と赤音

葵は赤音の姉である。高校生であり美人で知られている。高校では男子生徒に人気が高い。一緒にいる男の子がいつも違う程である。「葵ちゃんにも困ったものねえ」

二人の母はのどかな様子で心配そうな声をあげる。赤音は彼女に似たのかおっとりとした声であった。

「ははは、母さんは心配性だな」

それを父親が笑い飛ばす。場違いな程豪快な笑みで口髭を揺らす。父親はどっしりとした感じであり、母親は赤音そっくりの外見であった。いや、この場合は赤音が彼女にそっくりと言うべきか。

「心配どころじゃないんじゃないかな」

「同感」

ジップとハーリーはそれを見て囁き合う。まだ二匹の使い魔の方が危機感があった。

しかし当の本人はそんなことは何処吹く風である。相も変わらず男の子達とデートを重ねていた。

「お姉ちゃんつてもてるのね」

赤音はそれを見てふと呟いた。

「いいなあ、私ももてたいな」

「こら、おませさん」

新しい彼氏と玄関で別れて家に帰ってきた葵がそう呟いていた赤音を叱った。ブレザーにフレアのミニスカート、そして黒いハイソックスというお決まりの格好であった。

「そんなこと言うにはほんの少し早いわよ」

「ほんの少し？」

「そうよ」

葵は答えた。

魔女に乾杯！

「それはね。おっぱいが大きくなってから言うものよ」  
「おっぱいが」

赤音はここで自分と葵の胸を見比べた。結果は言うまでもなかった。

「そうよ、女の子はね、そこと顔で魔法を使うのよ」

「魔法なら私も使えるよ。光の魔法が」

「その魔法とは違うのよ」

葵は悪戯っぽく笑った。

「違うの？」

「ええ」

「どういうことなの？」

「すぐにわかるわ。女の子だけが使える魔法が」

「そうなの」

「普通に顔とおっぱいだけじゃ駄目なのよ。わかるかしら」

「うん」

しかし赤音はそれには首を傾げるばかりであった。

「御免、よくわからないや」

「今はそれでいいわ。けれどね」

葵はまた言った。

「魔法はね、魔術だけじゃないのよ。それは覚えておきなさい」

「うん」

「それじゃあね」

葵はそう言い終えると自分の部屋に入った。そして制服を脱いで私服に着替えた。ラフな白いシャツに青いジーンズのミニスカートである。サングラスまでシャツの胸の部分にかけていた。

「ちよつと出掛けるわね。晩御飯までには戻るから」

「さっきの人とデート？」

「まあね」

「魔法を使うのね？」

「そうよ。あと一つ言っておくわ」

「何？」

「魔法はね」

葵はここでくすりと微笑んだ。

「大事なものは絶対にあげないことが一番大事なのよ。よく覚えておいてね」

「！？」

「これもそのうちわかるわよ。うふふ」

そして葵は家を出て行った。赤音が彼女の言葉の意味を理解出来るようになるのはもう少し先のことであった。

第二十九話

完

## 第三十話

### 第三十話

### もてる条件

ライゾウは猫としてはかなり男前である。スコツティ<sup>II</sup>ホルド特有の垂れた耳がチャームポイントであり、顔立ちもいい。従って雌猫達からの評判もいい。

「この前のデートでさ」

よくタロにそんな自慢話をしている。

「夕焼けを見たんだぜ」

「そうなのか」

「次の日は別の娘とな。川を見に行ったんだ」

「相変わらずもてるみたいだな」

「まあね。旦那はどうなんだい？」

「僕かい？」

「そうさ。旦那ももてるんだろう？」

タロも男前の犬である。顔は風格があり、黒い毛がよく似合っている。しかもそれはやや虎毛でありそれが一層彼の風格を際立たせている。もてないとはとても思えなかった。

「僕はそれ程じゃないよ」

しかし彼はそれを否定した。

「嘘だろ、この前可愛い娘とお話してたじゃないか」

「可愛い娘と？」

「そうさ、ハスキーの」

ライゾウは言った。

「青と緑の二色の目の女の子と。美奈子と一緒に散歩に行った時に話していたの知ってるんだぜ」

「よく見てるんだな」

「当たり前さ、壁に耳あり障子に目あり」

彼は胸を張ってそう答えた。

魔女に乾杯！

「おいらにわからないことはないさ」  
「そうかねえ」

だがタロはそれには冷淡であった。

「何だよ、違つてもいいのかよ」

「御前とは結構長い付き合いだよな」

「ああ」

「お互い子犬と子猫の時にこっちにやつて来て。かれこれ二年か」

「もうそんなになるのか」

「その間僕が女の子と付き合つたのを見たことがあるかい？話をした以外に」

「あるじゃないか」

だがライゾウはそう答えた。

「そのハスキーの娘もそうだし」

「あれは相談受けてたんだよ」

「相談？」

「ああ、彼氏のことだね。どうも上手くいってないみたいだったから」

「そうだったんか」

「それでね、相談に乗ってあげたんだ。仲直りしたみたいだよ」

「それはよかった」

「そうした相談を受けるけれどね。付き合い合ったことはないよ」

「またまたあ」

「いや、本当に。君とは違つさ」

「また林念仁だな」

「何となくね、わずらわしいだけさ」

彼はそう述べた。

「女の子と付き合つのがね。それより一人でいる方が気が楽さ」

「そういうもんかね」

「僕はね、そうさ。だからこれからも女の子とは付き合いつつもりもないよ」

「そういうことか」

「ああ」

だがライゾウは話を聞きながら思った。どうやらタロは他の雌犬達から色々と相談を受けているらしい。嫌いな相手に相談を持ちかけるのはいいない。それを考えるとタロももてるのではないかと。

しかしそれは言わなかった。タロに言ったところで気付くとも思えない。ここは黙っておくことにした。それは友人への気遣いであった。

第三十話 完

2005・8・9

## 第三十一話

第三十一話 美樹の家族

紫の魔女との戦いの後で美樹もまた魔法の勉強をはじめた。彼女の魔法は風の魔法、かなり独特な魔法といえた。

彼女の家は一軒家である。広い家だが人気は少ない。家に両親がいることが少ないのだ。

貿易会社に勤めている父は単身赴任で海外に行っている。美容院を経営している母はいつも社員の女の子達の面倒をみたり教えたりして帰るのが遅い。従って家のことは彼女がすることが多い。料理やその他のことが上手になったのには理由があるのである。

「お姉ちゃん」

小学校二年の弟の信也が彼女に声をかけてきた。見れば美樹は台所で料理を作っている。

「今日の晩御飯何？」

「湯豆腐よ」

彼女はそう答えた。

「あと湯葉。御馳走でしょ」

「湯葉！？あのお豆腐から作る紙みたいなの？」

「お豆腐からは作らないけれどね」

彼女はそう答えた。

「けれども同じよ。お豆さんから作るの」

「そうなんだ」

信也はその大きな目をくりくりと動かしながら言った。髪は美樹と同じ茶色がかかった黒である。それを見ると姉弟だということがわかる。

「信也お豆腐とか好きだったよね。だから今日それにしたの」

「ありがとう」

「もう少ししたら食べましょ。食器出しておいて」

魔女に乾杯！

「はい」

そして二人で夕食を食べた。信也は食べながら美樹に尋ねてきた。

「ねえ」

「何？」

「お父さん今度帰って来るの何時かな」

「そうね」

彼女は壁に掛けられているカレンダーをチラリと見た。それを見ながら答えた。

「今月はもうないわ」

「そうなの」

「けれど来月また帰って来るから。安心して」

「うん。あとお母さん今日も遅いんだね」

「ええ」

美樹はそれに頷いた。

「いつもうちお父さんもお母さんもないんだね」

「けれど寂しい？」

「えっ」

信也は美樹のその問いにはっとした。

「私がいるけれど。それじゃ駄目かしら」

「ううん、それでいい」

信也は首を振ってそう答えた。

「お姉ちゃんがいるから。寂しくはないよ」

「よかった」

「だから僕平気なんだ。安心してね」

「ええ。安心したわ。じゃあ御飯が終わって後片付けが終わったらお風呂に入りましょうね」

「うん！」

美樹は信也をお風呂に入れた。それからすぐに信也を寝かして自分は部屋に帰った。そして宿題と明日に備えての予習、復習や魔法の勉強をするのだった。そして十二時までそうしたことを行った。

それから寝るのが日課であった。

六時になると起きて信也を起こして身支度、食事等をして学校に行く。それが普段の生活。同じ年代の女の子達に比べてきついと言えばきつい。だが彼女はそれでも平気だった。信也の為だからだ。

第三十一話 完

2005・8・10

## 第三十二話

### 第三十二話 風の勉強

信也を寝かした後で美樹の勉強ははじまる。まずは魔法の法衣に着替えて家の庭に出る。使い魔であるジュウシマツのビルガー、インコのファルケンも一緒である。二羽の名前は信也が名付けたものである。

「センスのない名前だよね」

「うん」

二羽は自分達の名前を気に入ってはいなかった。だが主人の弟が名付けたから迂闊には言えない。彼女は弟のこととなるとむきになるからである。

「それじゃはじめるわよ」

「うん」

二羽は美樹の側にいた。そして主の魔法を見守る。綺麗に風の魔法を出した。そして撃っていた。

「どうかしら」

「そうだねえ」

主の魔法を見てビルガーが首を傾げさせた。

「もう少し速くてもいいんじゃないかな」

「速く」

「うん、風の魔法だろ」

ビルガーは言った。

「だったらさ、もうちょっと速い方がいいと思うよ」

「そうかしら」

「いえ、それは違うわ」

だがここでファルケンが反論した。

「確実に一発ずつ撃つべきよ。それはちゃんとしないと」

「けれどスピードも大事だぜ」

魔女に乾杯！

ビルガーも引かなかった。

「御主人は撃つのはしっかりしてるからさ」

「そういう意味じゃなくてね。狙いなものよ」

「狙い!？」

ビルガーではなく美樹がそれに尋ねてきた。

「ええ、はい」

ファルケンが主に答えた。

「狙いです。確実にね」

「けれどビルガーは速さが大事だって言うわね」

「まああたしの考えはそうですけれどね」

彼はそれに頷いた。

「御主人はどう思われますか？」

「そうねえ」

美樹は考えながらそれに答えた。

「私はとりあえずは速さかな」

「ほら」

ビルガーはそれを聞いてファルケンに得意な顔を見せた。

「見たる、スピードだってな」

「けれど狙いも大事よね。ファルケンの言うことも一理あるわ」

「流石御主人」

ファルケンはそれを聞いてビルガーに逆襲の笑みを返した。

「わかってらっしゃる」

「けれどどっちにするかは問題があるわね」

彼女は考えていた。

「どっちも一理あるし。どうしようかしら」

「どうしようって言われても」

「あの竜巻で充分じゃないとしたら」

「考えるわよね」

「ええ」

美樹と二羽はそう言って考え合っていた。だが結論は出なかった。

魔女に乾杯！

あれこれやっているうちに時間だけが過ぎようとしていた。結論は容易に出そうにはなかった。

第三十二話 完

2005・8・15

### 第三十三話

第三十三話

トント

「参ったわね」

ファルケンが溜息をついた。

「何かいい方法はないかしら」

「あつたらとづくに言ってるよ」

ビルガーがそれに合わせるようにして言う。

「けれど何もないから困ってるんだろ」

「そうなのよねえ」

「どうする、御主人」

二羽は美樹に尋ねてきた。

「何かいい考えある？」

「私にもないわ」

美樹は申し訳なさそうにそう答えた。

「あつたら自分で何とかしているんだけれど」

「そうよねえ」

「あつたらとづくにやってるか」

「うん」

「どうしようかねえ、じゃあ」

「とにかく何でもいいからやってみる？」

「それだとかえってロクなことにならないわよ」

ファルケンはそう言って相棒を嗜めた。

「訳のわからない魔法になっちゃったらどうするのよ」

「それもそうだなあ」

「ここは御主人に任せるしかないわね」

「結局そうなるのね」

美樹はそれを聞いて応えた。

「私次第、か。どうしようかなあ」

魔女に乾杯！

「とりあえず魔法を使ってみようよ」  
「ええ」

美樹は二羽の言葉に応えて魔法を使ってみた。風の気が彼女の前に出た。

「これをどうするかだね」

「もう一つ出してみたら？」

「うん」

それに従いもう一つ出してみる。二つになった。

「また出してみたら？」

「ビルガー、あんたねえ」

ここでファルケンが口を挟んできた。

「滅多やたらに出せばいいってもんじゃないでしょうが」

「けれど何かのヒントになる可能性はあるだろ」

「御主人の魔力の無駄使いじゃない。魔法使うのにも色々使うのよ」

「これ位は何でもないけれどね」

「あ、そうなんですか」

それを聞いてファルケンの方が恐縮してしまった。

「けれどねえ、どうしたものかな」

「そうですね、どうするか」

「何とかならないかな」

「お姉ちゃん、魔法のお勉強してるの？」

不意に信也の声が聞こえてきた。見れば美樹の側にまで来ていた。

「信也、起きてたの」

「うん。何か庭でお話するのが聞こえてきたから」

「御免なさい、魔法の勉強してて」

「いいよ。ところで面白いこと思いついたんだけど」

「面白いこと！？」

「うん」

信也は頷いた。そして話はじめた。

魔女に乾杯！

第三十二話

完

2  
0  
0  
5  
・  
8  
・  
1  
8

## 第三十四話

第三十四話 集まった風

「今風さん一杯出してるよね」

「ええ」

美樹は弟の言葉に頷いた。

「それを一つずつ飛ばしてるの？」

「そうだけれど」

「そうじゃなくてね。一度に飛ばしたらどうかな」

「一度に」

「うん。だったら威力があると思うんだけど。どうかなあ」

「一度に、か」

「何で今まで思いつかなかったんだろ」

ビルガーもファルケンも目から鱗であった。二羽は本当に鱗を持っているのであるが。

「ねえ御主人」

ビルガーが見気に対して言った。

「一度試しにやってみたらどうでしょうか」

「そうね」

美樹は彼の言葉にも頷いた。

「ファルケンはどう思う？」

「私ですか？」

「うん。貴女がどう思っているかな、と違って」

「そうですね」

彼女は考え込みながら答えた。

「悪くはないと思いますよ。ものは試しです」

「賛成なのね」

「はい。一度やってみて下さい」

「わかったわ。それじゃあ」

魔女に乾杯！

「ええ」

美樹は魔法を使い風達を出した。それを全て自分の前に持つて来る。

「行くわよ」

「うん」

そしてそれを一斉に前にある的に向けて放った。風は物凄い音を立てて飛ぶ。そして的に次々と命中した。的はそれにより完全に崩れ去ってしまった。

「凄い……」

「まさか成功するなんて……」

「うまくいった？」

「え、ええ」

使い魔達は啞然としていた。そして美樹も同じであったが信也の言葉に使い魔達よりも先に我に返った。

「まさかこれだけの威力だなんて」

「僕の言った通りになったね」

信也はそう言うてにこりと笑った。

「これで少しはお姉ちゃんの役に立てたかな」

「とてもね」

美樹も笑った。

「ありがとう。今回は信也のおかげよ」

「僕はちよつと言っただけだから全部お姉ちゃんの力だよ。ほら、お姉ちゃんいつも言ってるじゃない」

「何て？」

「努力すればそれだけ適うって。お姉ちゃんも努力したから魔法を完成させられたんだよ」

「あっ」

美樹はその言葉にハツとした。

「そ、そうね」

「だからね。僕のおかげじゃないよ。全部お姉ちゃんの力だよ」

「有り難う」

「御礼なんていいよ」

信也はまた笑った。

「お姉ちゃんの力なのに。そんなのいいよ」

「しっかりしてるね」

「流石ご主人様の弟さん」

歳のわりにしっかりした信也に対して感服する二羽の使い魔達であつた。

第三十四話 完

2005・8・22

## 第三十五話

### 第三十五話 先生の秘密

華奈子達の魔法の先生は言うまでもなく今田先生である。おっとりとした優しい先生として知られている。

教え方も上手く華奈子達も見る見る成長していた。ただ、一つ気になる場所があった。

「ねえ、先生の使い魔って見たことある？」

塾の帰り道不意に華奈子がそう言ったのだ。

「先生の使い魔！？」

「うん、ちよつとないよね」

「そういえば」

他の四人はそれを聞いて頷いた。

「魔女って普通使い魔がいるものだけけど」

「魔女だけでなく魔法を使う者の必須条件でもある。使い魔を側に置くことは。」

「先生にはどういうことかいのないのよね」

「わたし達が知らないだけじゃないかしら」

春奈がそう言った。

「先生も魔女だし。きっといる筈よ」

「そうよねえ」

赤音がそれに同意した。

「うちのお姉ちゃんは使い魔がなくても女の子は魔法が使えらって言うってたけれど」

「赤音ちゃん、それ違う魔法よ」

梨花がそう突っ込みを入れる。

「けれど気になることは気になるわね」

「美樹ちゃんの言う通り」

華奈子は我が意を得たとばかりに微笑んだ。

「何かすつごく気になるわよね」

「まあ今回は華奈子ちゃんに賛成さけれどね」

「皆も？」

「そうねえ」

他の三人を代表して梨花が応えた。

「気にならないって言えば嘘になるわよね」

「それじゃあ調べてみる？」

「どうやって？」

春奈が問うた。

「先生のおうちまで行って調べるつもり？」

「それしかないんじゃない？」

華奈子はへこたれるかと思っただが平然とそう答えた。

「見てみるしか」

「けれどいるかなあ」

今度は赤音が首を傾げた。

「若しかすると本当にいないかも」

「そんな筈ないじゃない」

華奈子はそれを否定した。

「魔女には絶対にいるから。大丈夫だって」

「犬や猫だったらいいけれど」

今度は梨花が言った。

「虎とか狼だったらどうする？先生だったら有り得るよ」

「それは……」

「まあそこは鬼が出るか、蛇が出るか」

美樹が遮るように言う。

「行って見てからのお楽しみよ」

「そう美樹ちゃんの言う通り」

援軍を得た華奈子はさらに活気付く。

「ここは勇気出して行くうよー！」

「行く？」

魔女に乾杯！

「仕方ないわね」

他の三人もそれに頷いた。こうして五人は先生の使い魔を確かめにこっそりと先生の家に行くことになったのであった。

第三十五話

完

2005・8・24

## 第三十六話

### 第三十六話 先生の昔

華奈子達は学校が終わるとすぐに町の公園に集合した。皆既に魔法の法衣に着替えている。

「いいわね」

「ええ」

四人は華奈子の言葉に頷いた。そして箒に乗って先生の家に向かった。

先生の家は町ではかなり有名である。資産家であり先生はお嬢様として知られていた。学生時代はそれでかなりもてたという。

しかし先生は別にそんなことを気にはしていない。その頃からおっとりしていたという。今では結婚して子供もいるらしいがとてもそうは見えない。やはりお嬢様然としているのである。

「何が出るかな」

不意に美樹が呟いた。

「何がって？」

「いえ、先生って凄い魔法使うじゃない」

「そうね」

梨花が美樹の言葉に頷いた。確かに先生の魔法はかなり凄い。町どころか県でもかなり有名である。子供の頃全国のコンクールで優勝したこともあるらしい。

「若しかしたらとんでもない使い魔がいたりして」

「とんでもないってどんなのよ」

赤音がそれを聞いて問うてきた。

「お化けでもいるっていうの？」

「そこまではわからないけどさ」

「何かとりあえず凄いものかも知れないじゃない」

「華奈子ちゃんのわんちゃんやにゃんこちゃんよりも？」

「あれ全然凄くないから」

華奈子は春奈の言葉に苦笑した。

「犬や猫なんて使い魔じゃ普通だし。驚くこともないよ」

「そうかなあ」

「あたしから見たら春奈ちゃんの方が使い魔にできるの凄  
いと思うよ。いや、これ本当に」

「わたしの魔法は水の魔法だから」

そう言っつて春奈は謙遜した。

「亀さんや蛙さんは普通に扱えるわよ」

「そんなものかなあ」

「まああまり関係ないかも知れないね。私は風だから鳥を使っ  
てい  
るけれど」

「私は蛇と蜥蜴」

「私は兎とハムスター……。何かバラバラよね」

「そうなのよね。ほら、先生つてどんな魔法でも凄く上手に使える  
じゃない」

「うん」

「だから余計気になるのよ。一体どんな使い魔がいるのかって」

「若しかして二匹とかそんなのじゃないかも」

「有り得るわね」

四人は美樹の言葉に頷いた。

「ドラゴンとかフェニックスとか」

「まさか」

赤音のそれは流石に否定したかった。

「それはないわよ、幾ら先生でも」

「そうそう」

この世界にはドラゴンやフェニックスも存在する。だが使い魔に  
するにはかなり難しいとされている。扱えるのは地球でも数人程だ  
という。これでは先生でも扱えるのは無理だと思われた。

「けれど虎とか狼だったらどうする？」

「ちょっと止めてよ」

「まさか」

「わからないわよ、先生の魔力だと。先生って本当に凄いから」

「そうね」

「覚悟を決めるしかないわね」

五人はうん、と頷き合った。そこで先生の家が見えてきた。和風の大きな屋敷であった。

### 第三十六話

完

2005・8・27

## 第三十七話

第三十七話

先生の家で

「うわあ、凄いねえ」

華奈子は上から先生の家を見てまず驚きの声をあげた。

「こんな大きなおうちそうそうないよ」

「先生のおうちってこの町じゃ有名なお金持ちだからね」  
美樹がそれに頷いた。

「おうちも大きいよね」

「おうちっていうよりお屋敷よね」

春奈が軽く突っ込みを入れた。

「ここまで大きいと」

「そうね」

梨花が同意する。

「こんな大きなのはおうちじゃないわ。お屋敷よ」

「それでこれからどうするの？」

赤音が他の四人に尋ねた。

「どうやって先生のおうちに入るの？」

「さて」

華奈子は首を傾げさせた。

「どうしようか」

「って華奈子ちゃん何も考えてないの？」

「いやあ、来たら何とかなるって思って」

「あっきた」

「まあ華奈子ちゃんらしいって言えばそれまでだけど」

「けれどどうにかしなくちゃいけないのはあるのよね」

梨花が言った。

「さて、どうしようか」

「とりあえずは上からゆっくりと眺めてみる？」

魔女に乾杯！

春奈がここで提案した。

「そうねえ」

「とりあえず筈にも乗ってるし何かあればすぐに動けるからそうしよっか」

「そうね」

四人はそれに同意した。こうしてまとまって動きながら先生の屋敷を上から眺めていた。

「それにしてもホントに大きいよね」

「またしても華奈子の言葉であつた。」

「お池まであるし。すっごい豪勢」

「華奈子ちゃん家つてお池なかつたっけ」

「ないよ。あつたらそこにお魚入れたくなるわよね」

「ええ」

「それをライゾウが狙うから。作りたくても作れないの」

「猫ちゃんのいるおうちは大変ね」

「春奈ちゃんだけか、お池あるのって」

「そうね」

春奈はそれに頷いた。

「私リヤンとチーがいるから」

「ああ、蛙と亀の」

「ええ」

「だから必要なのね」

「二匹共私の側にいることが多いけれどね」

「そういえばそうね」

「あまり必要ないかな、って思うけれどお兄ちゃんがいるって言うて」

「しっかりしてるよね、春奈ちゃんのお兄ちゃん」

「あんなお兄ちゃん欲しいなあ、ホント」

「ありがとう」

そんな話をしながら屋敷を見ていた。そこで何かが見えた。

魔女に乾杯！

「ん、あれ」

「どろしたの？」

皆華奈子が指差した方を見た。そこに何かがあった。

第三十七話

完

2005・8・31

## 第三十八話

### 第三十八話 使い魔

「えっ、嘘……」

そこにいたのは鳥達だった。それに二羽や三羽ではない。それこそ何十羽もいたのである。

「な、何よこれ」

「何か前に見た映画みたい」

春奈はこの時兄が見せてくれた映画を思い出していた。確かヒツチコックとかいう監督の作品であったのを記憶しているが確かではない。

「下も凄いよ、見て」

美樹が指差すとそこにもいた。先生の屋敷の庭に犬や猫、他の動物達も一杯いたのである。庭だけでなく屋敷の屋根にまでいた。

「先生のペット……じゃないよね」

「まさか」

「じゃあこれは」

「そこにいるのは華奈子さん達？」

「あの声は」

見ればそこに先生がいた。普段着らしくいつもの白い法衣ではなかった。ピンクのシャツに白いロングスカートを身に着けている。あっさりとした大人しい服装である。それが先生によく似合っていた。

「どうしたの、そんなところで」

「あ、ちよつと気になったことがあります」

梨花が五人を代表して言った。

「気になること？」

「ええ、実は」

「ちよつと、梨花ちゃん」

魔女に乾杯！

赤音がここで梨花に囁く。

「いいの、言っちゃって」

「いいのよ、別に隠すこともないでしょ」

「そりゃまあそうだけど」

「皆もいいかしら」

「ええ、まあ」

華奈子達三人もそれに頷いた。よく考えればこそそとする必要もない。五人は梨花を先頭にして先生の屋敷の庭に降りた。そしてあらためて挨拶をした。

「お邪魔します」

「はい」

先生はにこやかに挨拶を返した。

「実は今日は先生に御聞きしたいことがあって来ました」

「何でしょうか」

すっかり普段の授業と同じようになってしまっていた。先生のペースに入っていくのがわかる。

「魔女には使い魔がいますね」

「ええ」

先生はまた答えた。

「絶対いるものでしょうか」

「そうですね」

先生はにこやかに笑った後で述べた。

「殆どの魔女にはいますね」

「じゃあ先生にもいるんですか？」

「はい」

答えは異様にあっさりしたものであった。

「勿論ですよ」

「じゃあ今ここにいるんですか？」

「ええ」

先生の不自然にあっさりした答えは続いていた。

魔女に乾杯！

「ほら、ここにいますよ」

「えっ!?!」

華奈子達はその言葉にハツとした。そこには彼等がいた。

第三十八話 完

2005・9・5

## 第三十九話

第三十九話 先生のお友達

見ればさつき鳥や犬、猫達であった。それ等が全て華奈子達を取り囲んでいるのである。

「せ、先生まさかこれって」

「はい。この子達が先生の使い魔です」

先生はやはりにこりと笑ってそう答えた。

「どう、一杯いるでしょ？」

「一杯って……」

「あの、本当にこれ全部なんですか!？」

「ええ」

先生はそれが当然であるかのように答え続けた。

「それがどうかしたのですか？」

「嘘……」

五人はそれを聞いてあらためて絶句した。

「あの、これだけの使い魔を全部使いこなせるなんて」

「あ、それは簡単なんです」

「簡単って……」

五人はもう開いた口が塞がらなかった。

「どうやったらこれだけ」

「私達なんて二匹がやつとなのに」

「心を通わせればいいだけですから」

「心を」

「はい。動物さん達にも心はちゃんとありますよね」

「はい」

実際に彼等と話をしているからこそわかる言葉であった。

「それです。お話して心を通わせればいいのです」

「全部の動物にですか？」

魔女に乾杯!

「はい」

「けれどそれって中々できることじゃ」

「華奈子ちゃん、中々どころじゃないわよ、それって」

「まずは自分の心を開くこと」

先生は穏やかな声でそう述べた。

「それからです」

「それからですか」

「はい。皆は使い魔をどう思っていますか？」

「そりゃあ」

華奈子達は顔を見合わせた後で先生に答えた。

「家族です」

「はい、家族ですよね」

「はい」

「それです。家族には心を開きますよね」

「まあ家族ですから」

「それが最初なのですよ。そしてそれが一番大事です」

「そうなんですか」

「もつと難しいものだと考えていましたか？」

「はい」

「長い時間をかけてじっくりとやっていくものだとばかり」

「そうではないのですよ。魔法も」

先生の言葉はわかり易く、簡単なものであった。

「心を開くこと。そして動物さんを自分の中に受け入れます」

「はい」

「それだけです。それで使い魔を使えるようになります」

「魔法も」

「勿論です」

先生はにこやかに笑っていた。それが先生の答えであった。

魔女に乾杯！

第三十九話

完

2  
0  
0  
5  
・  
9  
・  
6

## 第四十話

第四十話 おしおき

タロとライゾウも動物である。従って全く悪いことをしないというわけではない。生きている限り何かしらの悪いことをするのであるからそれは当然のことであった。

そして悪いことをすればおしおきをされる。タロはひっぱたかれることが殆どであるがライゾウはその時によって違っている。

「こら、ライゾウ」

華奈子がテーブルの上に寝転がっている彼を見つけて叱る。

「そんなとこに寝てちゃ駄目ですよ」

「やべ、見つかった」

悪いことをしているということにはわかっている。だがそれでもしたいものなのである。

「待ちなさい」

逃げようとしたが捕まってしまった。やはり華奈子は動きが速い。

「さあて、お仕置きよ」

「何するつもりだよ」

「この態勢だと決まってるでしょ」

華奈子はニヤリと笑ってそれに答えた。

「まさか」

「そのままかよ」

華奈子はそう言うと言つとライゾウを持ち替えた。そしてその後ろ足を持つ。

「これでどう?」

「参った……」

ライゾウは逆さ吊りが苦手である。これをやられると大抵参ってしまう。今回もそうであった。

「宜しい。じゃあ二度とこんな悪さはしないこと。いいわね」

魔女に乾杯!

「はい……」

流石にこの時ばかりは反省するがすぐにまたやる。そしてまたやられるのがいつものパターンである。こうしたところは人間の子供と変わりはない。

「またやられたみたいだな」

「おかげさまでね」

タロのもとへ行ってそれに答える。

「やっぱり御主人は厳しいよ」

「まあそれは当然だけれどね」

「それでもまあおばちゃん達に比べたらマシか」

「確かに」

華奈子と美奈子のおばちゃん達である。あの二人だけはタロもライゾウもとても太刀打ちできないのである。

「あれおばちゃん直伝だしなあ」

「見られただけで、いや側にいるだけでもう悪さできないもんな」

「そうそう」

二匹は互いに頷き合う。

「あそこまでいくともう神様だよな」

「ペットをしつめるのは得意らしいよ。昔からそうやって犬や猫をしつけていたらしいし」

「あんな人が二人だからなあ。勝てないよ」

「そう、そんなにおばちゃんとポポちゃんが苦手なんだ」

「げ、御主人」

ライゾウはそれを聞いてギクツとした。そこに華奈子が出て来たのである。

「じゃあ二人おうちに呼ぼうかな」

「そ、それだけは」

二匹は慌ててそう答えた。

「御勘弁を」

「僕も。あの二人だけは」

「冗談よ」

華奈子はにこりと笑ってそう言った。

「冗談？」

「そうよ。けれど今度から悪さしたらおばちゃんとかポポちゃん呼ぶからね。覚悟してなさい」

「はい……」

結局この二匹の一番のお仕置きはあの二人のようであった。

第四十話 完

2005・9・7

## 第四十一話

### 第四十一話 土の修業

他の四人がそれぞれの魔法に磨きをかけている間梨花も当然ながら修業を行っていた。彼女も家の庭でいつも修業をしていた。

「ふう」

魔法をひととおりやって一息つく。だが満足してはいなかった。

「難しいわね、やっぱり」

「まあそうだろうね」

「そうね」

彼女の使い魔であるトカゲのピエールとヘビのジュリエッタがそれに頷く。

「けれど少しずつだけどやれてきてるんじゃない？」

「もう少しよ、御主人様」

「いえ」

しかし梨花はその言葉に首を横に振った。

「まだよ、まだまだだわ」

「そうかなあ」

「あまり根詰め過ぎてもどうかと思いますけれど」

「こんなのじゃあの紫の魔女には勝てないわ。あの魔力ピエールもジュリエッタも見たでしょ？」

「はい」

二匹は主の言葉に頷いた。

「あれは確かに」

「半端なものじゃありませんね」

「だからよ。だから華奈子ちゃんも勉強しなおしてるし私も」

「ここで修業してるんですよね」

「ええ」

梨花はピエールの言葉に頷いた。梨花の家の庭はかなり広く草が

魔女に乾杯！

広がっている。彼女はそこで土の魔法を色々を使って修業しているのである。

「土の魔法といえは地震ですけれど」

「あれは効果がないと思うわ」

ジュリエッタにそう答える。

「紫の魔女はいつも高いところにいるから。それに空だって飛べるし」

「そうですね」

「だから地震じゃ駄目。他のじゃないと」

「他のと言われましても」

「その地震だつてかなり高位な魔法ですよ」

「わかってるわ」

そうは言ってもできはしない。梨花は正直手詰まり感も感じはじめていた。

「けれどね」

「何かいいやり方ないですかねえ」

「石とか浮き上がらせてぶつけたらどうでしょうか」

「それはもうやってるし」

「そうですねえ」

「何かいい方法ないかしら」

「そうだっ」

そこでピエールが閃いた。

「御主人様、あれですよ」

「あれって？」

「ゴーレムですよ」

「あれは無理よ」

梨花はそれをすぐに否定した。

「難しいなんてものじゃないから」

「そうですねえ」

「何か他にないかしら」

魔女に乾杯！

「あるよ」

そしてここで梨花と二匹の後ろから声がしたのであった。

第四十一話 完

2005・9・9

## 第四十二話

第四十二話

姉と妹

「利奈」

梨花は自分より二つ下の妹を見てその名を呼んだ。

「起きてたの」

「結構音が大きかったからね」

姉と同じ赤い髪を後ろで編んで束ねている少女はそれに答えた。

「それで起きちゃったの」

見れば青いパジャマを着ている。それだけで彼女が今さっきまで寝ていたことがわかる。

「そうだったの、御免なさい」

「あ、いいのよそれは」

だが彼女は姉の謝罪を微笑んで受け止めた。

「だってお姉ちゃんが頑張ってるんだから。仕方ないわ」

「有り難うね」

「いいつて、そんなこと。それより魔法の方はどうなってるの？」

「生憎ね」

梨花は妹の問いに苦い顔をした。

「思うようにいかないわ。残念だけれど」

「そうなの」

「何をどうしたらいいのかわからないわ。ちょっとわからなくなっちゃってね」

「お姉ちゃんの魔法って土の魔法だったよね」

「ええ」

梨花はそれに頷いた。

「土の魔法だったら石とかそんなのを使うわよね」

「ええ。それがどうかしたの？」

「他には地震とか」

「それはかなり難しいけれどね」

魔女に乾杯！

「お空にいる相手にはあまり効果が期待できないよね」

「そうなのよ。それで困っているのよ」

梨花は困った顔になっていた。

「ピエールやジュリエッタとも色々と相談しているんだけど」

「御免」

「御主人様の御力になれないです」

「そうなんだあ」

「どうしたらいいのかしらね。何か凄い魔法があったらいいのだけれど」

「そうだね」

利奈は首を傾げて考えながらそう応えた。

「凄い魔法かあ」

「何かいい考えないかしらね」

「そうね」

その考える目が大きくなる。まるで月の様になった。

「魔法を一杯使ったらいいんじゃないかな」

「一杯？」

「うん」

利奈はそう言って頷いた。だがそのすぐ下ではピエールとジュリエッタが首を傾げていた。

「一杯って」

「どういうことなのかしら」

二匹にはよくわからなかった。あれこれ考えるがやはりわからなかった。

「あのね、お姉ちゃん」

「うん」

「ちょっと耳を近づけて」

「わかったわ。けれど大きな声は出さないでね」

「わかってるわ」

梨花は屈んで妹に耳を寄せた。利奈はそれを受けて姉にこっそり

魔女に乾杯！

とした感じで話をはじめた。

第四十二話 完

2005・9・12

## 第四十三話

第四十三話

誰のおかげ

「じゃあやってみて」

「うん」

梨花は頷いた。そして利奈と使い魔達を離れた場所にやって構えに入った。すぐに魔法を放つ態勢に入る。

「行くわよ」

魔法を放つ。それは巨大な石であった。三つあった。

「石!？」

「ただの石じゃないわよ」

ピエールとジュリエッタにそう返す。三つの石はそのまま飛び的に向かう。そしてその寸前で散った。

「あっ」

「これが私の新しい魔法よ」

梨花はそう言って会心の笑みを浮かべた。

「これならあの紫の魔女にも効くでしょうね」

「うん」

まずはピエールがそれに頷いた。

「これなら。かなりの威力が期待できますよ」

ジュリエッタも。二匹は正直かなり驚いていた。それ程の威力だったのだ。

「けれどよくこんなの考え付きましたね」

「本当に凄いですよ」

「利奈が教えてくれたのよ」

「利奈様が」

「うん。ほら、一つの石を散らしても簡単に避けられるでしょ」

「ええ、まあ」

「だからよ。それで三つにしてみたらって。それでやってみたのよ。」

魔女に乾杯!

思ったより簡単にいけたわね」

「そうだったのですか」

「さっきの囁きは」

「そうなの。全部利奈のおかげよ」

「それは違うよ」

だが利奈はそれを否定した。

「これやったのはお姉ちゃんだから。私はただこついたらいいんじゃないかって言ったただけだし」

「いえ、それは違うわよ」

だがここで梨花もそれを否定した。

「利奈が言ってくれたから。だからできたのよ」

「だから違うって」

「いえ、違わないわ」

「まあまあ二人共」

言い争いになるうとしたところでピエールとジュリエッタが間に入って来た。

「つまり二人が協力してできたってことですね」

「まあ」

「そういうことになるかなあ」

「じゃあそれでいいじゃないですか。この魔法は御二人の合作」

「御主人様と利奈様の努力とひらめきの結果でございますよ」

「そうか」

「そうですよ」

二匹は頷いた二人にそう言った。

「おわかりになられましたね」

「御二人共」

「うん。じゃあ利奈」

「お姉ちゃん」

二人は互いに顔を見合わせた。

「有り難うね」

魔女に乾杯！

「いちらんそ」

危ういところで仲直りした。二匹の使い魔達はそれを見てほっと胸を撫で下ろすのであった。

「やれやれ」

「危ないところだった」

第四十三話 完

2005・9・14

## 第四十四話

第四十四話 裏山で

五人の小さな魔女達がそれぞれの魔法をレベルアップさせている頃美奈子は学校の裏山で一人音楽の勉強を続けていた。

彼女が得意とするのは歌にピアノ、そしてフルートであった。特にフルートは今までコンクール等で優勝しなかったことがない程であった。

天才とさえ言われていた。だがそれだけでいつも優勝できるわけではない。そこには努力があった。彼女は毎日裏山でフルートの勉強をしていたのだ。

一人裏山の頂上で笛を吹く。その後ろには何千年も生きている樫の木がある。彼女はいつもその木を後ろにして笛を吹いているのである。

今日も笛を吹いていた。ランドセルを足下に置いて笛を吹く。覚えたての曲を何度も何度も練習する。そこに誰かがやって来た。

「今日もここで練習してるのね」

「ええ」

それは双子の姉妹であった。華奈子が頂上にやって来たのだ。

「何かいつもここね」

「ええ」

美奈子は姉妹にそう答えた。

「何かね、ここは凄く落ち着くのよ」

「この木のせいかな」

華奈子はそれに応えて上を見上げた。

「この木？」

「樫の木よ。ほら、樫の木って魔力があるっていうじゃない」

「そうね」

魔法のことは知らない筈だが美奈子はそれに頷いた。華奈子はそ

魔女に乾杯！

れを一瞬だけだが妙に思ったがほんの一瞬だけであった。すぐに忘れてしまった。

「だからじゃないかな。あたしもここにいると落ち着くし」

「ふうん」

「ねえ美奈子」

華奈子は姉妹にあらためて言った。

「お願いがあるんだけど」

「何かしら」

「今吹いてた曲あるよね」

「ええ」

「もう一回吹いてくれない？何か気になって」

「それでいいの？」

「いいのって？」

「他の曲も吹いていいのだけれど」

美奈子にはこりと笑って華奈子にそう言った。

「どうかしら」

「他の曲もあるんだ」

「勉強しているのは一曲じゃないから。何曲も練習してるし」

「じゃあお願いできるかな」

華奈子は頼んだ。

「どの曲がいい？」

「全部」

「それじゃあ一曲ずつ順番でいくわね」

「うん、それでお願い」

「じゃあ」

そして美奈子は笛を構えた。そして吹きはじめ。

「うわあ」

その美しい音色を聴いて華奈子は思わず声をあげた。まるで音楽が二人を包み込む様に流麗に流れているのだ。

「まるで魔法みたい」

魔女に乾杯！

「うふふ」

美奈子はそれを聞いて神秘的な笑みを浮かべていた。それはまるで魔女のそのようであった。

第四十四話

完

2005・9・17

## 第四十五話

第四十五話 大きな木の下で

美奈子は今日も裏山の檜の木の下で笛や歌の勉強をしている。殆ど毎日続けているそれは日課と言っても差し支えない程である。

「ふっ」

練習を一通り終えてとりあえず一息つく。

「今日は音楽の方は調子がいいわね」

そして音楽に関しては満足した。

「けれどももう一つは」

「もう一つがどうかしたのかい？」

「誰!？」

すぐにその声に反応して辺りを見回した。

「誰かいるの？」

身構える様に笛を手を取った。そしてそれを吹こうとする。

「おやおや、笛でどうするつもりなんだ？」

声はそれを見ておかしそうな声を出した。

「何かできるのかい？」

声はもう一つあった。それ等は両方共美奈子に対して向けられていた。美奈子もそれがわかっていているから身構えているのであった。

「来るつもりなの？」

「そつだとしたら？」

皆この問いに対して逆にそつ言葉を返してきた。

「どうするつもりなんだい？」

「私にも考えがあるわ」

「へえ」

二つの声はそれを聞いて面白そうに笑った。

「面白い。何をするつもりなんだか」

「見せてもらおうかな」

「私の笛は見せるものじゃないわ」

毅然としてそう言い返した。

「聴かせるものよ。聴く覚悟はあるかしら」

「覚悟か」

「そうよ。それがあんなら聴かせてあげるわ」

「面白いね」

「ああ。どうやら噂通りだね」

「噂!?!」

美奈子はその言葉を聞いてハツとした。

「それは一体どういふことかしら」

「あんたの噂は聞いてると」

声の一方がそう言った。

「色々だね。これでわかるかな」

「ええ」

二つの声は何を言いたいのがよくわかっていた。

「それで何をしたいのかしら」

「実はね」

声の一つの主が姿を現わした。

「話があるんだ」

そしてもう一方も姿を現わした。茂みから又ツと姿を現わしたのだ。

「話!?! 私によね」

「そうだよ」

「よく聞いてね」

「ええ」

こうして美奈子と二つの声は裏山で話をした。それで何が変わったか。それはまだわからない。だが彼女にとっては実に大きな変化となったのであった。

魔女に乾杯！

第四十五話

完

2  
0  
0  
5  
・  
9  
・  
1  
8

## 第四十六話

### 第四十六話 魔女の僕

近頃なりを顰めていた紫の魔女がまた出て来ているという噂が町で広まっていた。彼女のことはもう町中で噂になる程であったのだ。そこまで有名になっていたのである。

「それで変な話を聞いたのよ」

それは当然ながら華奈子達五人の耳にも入っていた。五人はまだ先生が来ていない塾の教室でそのことについて話をしていた。

「何でもね」

「うん」

梨花が中心になって話をしていた。

「使い魔を連れてくるらしいのよ」

「それって普通のことじゃないの？」

華奈子はそれを聞いて言った。

「魔女なんだから。当たり前でしょ」

「わっかんないかなあ」

梨花はそんな華奈子の言葉を聞いて呆れた声を出した。

「華奈子ちゃん、紫の魔女って今まで一人だったでしょ」

「うん」

「それよ。今までいなかったのが一緒にいるようになったのよ。おかしいと思わないの？」

「単に今までいたけれど連れてなかっただけじゃないの？」

「それはそれで大問題よ」

梨花はそれに対しても言った。

「つまりそれだけ警戒してるってことなんだから」

「それやっぱ私達のことかな」

「多分ね」

今度は美樹の言葉に応えた。

魔女に乾杯！

「私達も新しい魔法身に着けたし。警戒してるのかも」

「どうしたらいいの」

「決まってるじゃない」

心配そうな顔になった春奈に言う。

「やってやるのよ。それしかないわ」

「やるのね」

赤音はそれを聞いて真剣な顔になった。

「向こうがその気ならね」

「じゃあやるってことじゃない」

華奈子が言った。

「どうせ遅かれ早かれ来るんだし。やってやりましょうよ」

「やれやれ、華奈子ちゃんは相変わらずね」

梨花はそれを聞いて苦笑した。しかし彼女も大体同じ考えであった。

「けれどそれでいいわ」

「じゃあ決まりね」

「ええ」

五人は頷き合つ。

「魔女が来たら」

「今度こそ」

「皆さん」

しかしここで先生が教室に入つて来た。

「あ、先生」

「授業ですよ。席に着いて下さい」

「わかりました」

話はこれでとりあえずは中断した。しかしもう五人の考えは決まっ  
つてしまっていた。

「今度こそ」

そう思っていた。そしてその今度が近付こうとしていた。

魔女に乾杯！

第四十六話

完

2  
0  
0  
5  
・  
9  
・  
2  
1

## 第四十七話

### 第四十七話 魔女、現れる

五人の危惧はあつた。彼女達のもとに紫の魔女から手紙が送られて来たのだ。塾の教室に行くと華奈子の机に置いてあつた。薄い紫の紙だつた。

「やっぱり来たわね」

華奈子はそれを見て言った。そしてその手紙を手にとると他の四人に顔を向けた。

「来たわよ」

「やっぱり」

「予想通りね」

他の四人もそれに頷いた。それから五人はその手紙を読みはじめた。

「今夜か」

「場所は学校の裏山。今度はまた別の場所ね」

それぞれ言う。そして手紙をしまった。

それから何事もなかつたように授業を受けて塾を後にする。そしてそのまま学校の裏山に向かつた。

「それにしても何でここなんだろ」

「何かあつたの、華奈子ちゃん」

裏山の暗い夜道を歩いている時にポツリと呟いた華奈子に春奈が尋ねた。

「うん、前にここで美奈子と一緒に色々とお話したから。ちょっと思い入れがあるのよね」

「そうだったの。けれどそんなのは紫の魔女には関係ないよ」

「そうなのよね。何か無粋よね、紫の魔女も」

「無粋じゃないかも知れないわよ」

しかしそれに美樹が疑問を呈した。

魔女に乾杯！

「とうとうと？」

「若しかして華奈子ちゃんのそれを知ってるかもしれないわよ」

「それじゃあ心理作戦!？」

「有り得るわ」

美樹は梨花の問いにも頷いた。

「可能性としてね」

「ううん」

「だとすると危ない相手ね」

「うちのお姉ちゃんが言ってたわ。危ないのは男だけじゃなくて女

もだって」

「それは関係ないんじゃない？」

「そうかなあ」

「赤音ちゃんのお姉ちゃんはまた特別よ。何か付き合ってる男の人いつも違うし」

「お姉ちゃんが言うにはそれも魔法なんだって」

「そうなの？」

「うん。男を惑わせるのも魔法だからって。よくわからないけれど」

「そんなものかしら」

「お姉ちゃんが言ってるから間違いじゃないと思うけれど」

「だったらいいけれど」

そんな話をしていているうちにその裏山の頂上に着いた。しかしそこに紫の魔女はまだいなかった。

「いないのかな」

「そのうち来ると思うよ。彼女焦らすの好きだし」

「ああ、そうかも」

「だったらちよっと待ってみるか」

「その必要はないわ」

だがここであの声がした。

「あら」

「もう来たのね」

魔女に乾杯！

「ええ、今ね」

櫛の木の上に彼女が現われた。その手にあの横笛を持って。まるで風のように現われた。

そして五人を見下ろしていた。まるで女王の様に。

第四十七話 完

2005・9・24

## 第四十八話

### 第四十八話

### 魔女の僕達

「お久し振り」

紫の魔女は五人を見下ろす状況でそう挨拶をしてきた。

「お元気そうで何よりだわ」

「あんたこそね」

早速それに華奈子が言い返す。

「暫く見ないと思つたら。何をしてたのよ」

「ちよつと仲間を探してたのよ」

「仲間!？」

「そうよ」

紫の魔女はそれに答えるとその手に持つ笛を吹きはじめた。それは今まで何処かで聴いたことのあるような懐かしい感じの曲であった。

「これは」

「アルバンベルクの曲よ」

魔女は美樹にそう言葉を返した。

「森の水車。いい曲でしょ」

「確かに」

「何か落ち着く曲ね」

赤音と春奈もそれに頷いた。

「いい曲だけれどこれには何かあるわね」

「何かかしら」

そう言った梨花に顔を向けてきた。

「何かわかつたのかしら」

「わからないわ。けれどね」

それに華奈子が言う。

「何かはわからないけれど何かあるわ。あんたのことだから」

魔女に乾杯!

「また変なこと言うわね」

「今までがそうだったからね。さあ、今度は何なのよ」  
「だから言ったでしょ」

華奈子に笑みを返した。白銀の月の光にその白い顔が浮かぶ。その顔はまるで人形のように整っていた。

「私の仲間よ。これで呼んでいるのよ」

「仲間!？」

「けれど魔女に仲間なんて」

「じゃあ紫の魔女の仲間」

「仲間っていつでも人間とは限らないわよ」

梨花は他の四人に対して言った。

「人間とはね。これでわかるでしょ」

「それってまさか」

「気付いたみたいね」

そこで梨花の問いに答える。

「そのまさかよ。さあ出ておいで」

「!？」

魔女の背中に何かが跳んで来た。そしてそのすぐ下にある木の枝に着く。

「私の友達」

「友達!？」

「あれが」

「うふふ」

紫の魔女は五人の反応を見て笑っていた。それを楽しんでいた。

「どうかしら、これが私の友達よ」

そこには二つの影があった。そして五人を見下ろしていた。

四つの目が暗闇の中に光る。それはまるで人魂の様であった。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
5  
・  
9  
・  
2  
2  
5

## 第四十九話

第四十九話 二匹の獣

「はじめまして」

その目の主達が五人に対して挨拶をしてきた。

「私達は」

「紫の魔女様の使い魔です」

「貴方達が!？」

「はい」

二匹の獣はそれに頷いた。

「私はタミーノ」

一匹が名乗った。その姿が闇の中から浮き上がる。それは見事な毛並みの黄金色の狐であった。

「私はファイガロ」

もう一匹も。やはりその姿が浮き上がる。それは漆黒の立派な毛色の狸であった。

「私達が紫の魔女様をお守りしております」

「そして今回はそちら様方の相手を務めさせていただきます」

「へえ、あたし達とやるつもりなの」

「はい」

二匹は華奈子にそう答えた。

「それで宜しいでしょうか」

「相手をしてくれるんならそれでいいわ」

売り言葉に買い言葉か。華奈子はそう返した。

「やってやるうじやない。そちらこそ覚悟はできているんでしょうね」

「勿論です」

狐のタミーノが答えた。

「貴女さえよければ」

魔女に乾杯!

魔女に乾杯！

「私共に不服なぞありません。これも紫の魔女様の為」

「随分忠誠心が高いみたいね」

「否定はしません」

華奈子にまた答えた。

「私達が認めたのですから」

「それだけの能力はお持ちだということですよ」

「それじゃああんた達もかなりなものだね」

「今から御覧にいれましょう」

フィガロが言った。

「皆様方、いいでしょうか」

「来るのね」

「はい」

二匹は木の下に降りてきた。そして五人と対峙する。

「行きますよ」

「いいわ」

華奈子は二匹に対して言った。

「何時でも。さあ、どっちから来るの？何なら両方でもいいわよ」

「それでは僭越ながら」

まずは狐のタミーノが出て来た。

「私が。行きますよ」

「来なさいな」

「では」

急にタミーノの身体が妖しげな紫色の霧に覆われた。そして

それは五人の周りも取り囲む。

「これは」

「これこそ我等が狐族に伝わる妖術」

彼は言った。

「とくと御覧あれ」

霧は完全に華奈子達を覆った。そしてそれは次第に五人を惑わしはじめたのであった。

魔女に乾杯！

第四十九話

完

2  
0  
5  
・  
9  
・  
2  
8

## 第五十話

### 第五十話 妖しい霧

「これは!？」

「皆気をつけて」

驚きの声を漏らす四人に梨花が言った。

「絶対に何かあるとしか思えないから」

「ふふふふふふふふふ」

霧は次第に濃くなっていく。その中でタミーノの笑い声だけが聞こえる。

「私の術は少し違いますよ」

「どういうこと!？」

「それもすぐにわかることです」

霧は完全に五人を包んだ。彼女達はその中で有り得ないものを見ていた。

「これって……」

彼女達の目の前に紫の魔女が立っていた。それも一人ではない。

何人も。どれだけいるのかわからない。そして彼女はそれぞれ五人を見ていた。ゆっくりとその手をあげる。

「まさか」

そのまさかであった。攻撃を仕掛けようとしていた。五人はそれに対して攻撃を返そうとする。春奈以外は。その春奈が言った。

「待って、皆」

「春奈ちゃん」

「どうしたの？」

「迂闊に攻撃しちゃ駄目」

春奈は他の四人にそう言った。

「えっ、けど」

「これは幻術よ、多分。さっきの紫の霧がそうなのよ」

魔女に乾杯!

魔女に乾杯！

「じゃあ」

「ええ。反撃しても何にもならないわ。そして向こうの攻撃も」  
「幻ってわけね」

「かって反撃しても下手しても何にもならないわね」

「そう思うわ」

春奈はそう答えた。

「それじゃあこっちも考えた方がいいわね」

梨花が言った。

「けれどどうしたら」

「霧なのよね、これって」

「まあそうだけれど」

四人は春奈の言葉に応えた。

「それじゃあ光を使えば」

「私の出番？」

「そして霧を払う為に風も」

「じゃあ私も」

「それじゃあやる？美樹ちゃん」

「うん、赤音ちゃん」

二人は頷き合った。そしてほぼ同時に魔法を放った。

「えいっ！」

光と風がそれぞれ霧、そして紫の魔女に向かった。赤音は魔法を次々に魔女に向けて放つ。美樹は霧に向けてだ。その効果はすぐに  
出た。

魔女の姿は光に照らされて消えていった。まるで影が消えるように。  
そして霧も風により全て払われてしまった。

「上手くいったね」

「やりますね」

タミーノは二人の魔法により自分の術が破られたのを見て素直に  
そう賞賛した。

「折角貴女達を消耗させて頂こうとしたのに」

「そうはいかないわよ」

「そうそう、残念だったわね」

それに対して赤音と美樹がそれぞれ言う。これでタミーノの術は破れた。

だがそれで終わりではなかった。今度は狸のフィガロが出て来た。

「それでは今度は私が」

彼も術を放ってきた。それは次第に姿を現わしてきた。

第五十話 完

2005・9・28

## 第五十一話

### 第五十一話

### 木の葉が舞い

「よくぞ我が盟友の術を破りました」

フィガロは五人に対して言った。

「お見事です」

「褒めてくれるのかしら」

「はい」

フィガロは華奈子の言葉に頷いた。

「ですが私の術はどうでしょうか」

「ごたくはいいから早く見せなさいよ」

華奈子はふふん、と笑った状態でそう言った。

「どつちにしろ破つてあげるから。来なさい」

「気の強いお方です」

フィガロはそれを聞いてそう呟いた。

「まことによく似て……」

「フィガロ」

だがここで上にいる紫の魔女から声がした。

「あ、これは御主人様」

フィガロは声をかけられ主が何を言いたいのか気付いた。

「申し訳ありません。失言でした」

「わかつてくれればいいわ」

「はい。それでは我が術、あの方々にお見せ致します」

「ええ、いいわ」

フィガロは主の言葉に従うようにして前に出た。そしてその動きを止めた。

「いきますよ」

その周りに散っていた木の葉が浮き上がった。そしてそれは五人の周りがある木の葉も同じであった。

魔女に乾杯！

「葉っぱが！？」

「これこそ我が術」

「ファイガ口は言った。

「とくと御覧あれ」

「一体何なのよ、これ」

「華奈子ちゃん、気をつけて」

「春奈がまた言った。」

「この木の葉、普通の木の葉とは違っわ」

「どう違っのよ」

「どうやらおわかりになられたようですね」

「ファイガ口は春奈の言葉を聞いてその目を光らせた。

「その通りです。私の木の葉は普通の木の葉ではありません」

「何ですって」

「華奈子ちゃん、前に出たら駄目」

「えっ！？」

その瞬間一枚の葉が華奈子の赤い法衣をかすめた。するとそのかすめられた部分が切れてしまったのだ。

「えっ……」

「華奈子はそれを見て呆然とした。

「まるでカミソリみたいに」

「そう、カミソリです」

「ファイガ口は彼女に答えた。

「私の木の葉は切れるのです」

「何ですってえ」

「だから迂闊に動いちゃ駄目よ」

「クッ……」

華奈子は春奈に止められて動けなかった。その間にファイガ口の葉は次第に五人に迫ってきていた。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
5  
・  
9  
・  
3  
3  
0

## 第五十二話

第五十二話 火と水

木の葉が迫る。だが五人はそれに対してどうしようもできそうになかった。戸惑っている間にもその木の葉が迫ってきているのだ。

「どうしよう」

赤音が困った声を出した。

「このままじゃ私達」

「いえ、大丈夫よ」

だがそんな彼女に春奈が言った。

「木の葉が相手だから。華奈子ちゃん」

「何？」

「わかってるわよね」

「………って何が？」

「もう、何言ってるのよ」

春奈はとぼけた様子の華奈子に対して呆れた声を返した。

「華奈子ちゃんは火の魔法使えるでしょ。だから木の葉を燃やせるじゃない」

「あ、そうか」

華奈子は言われてようやくそれがわかった。

「それじゃあやるね」

「ええ、お願い」

華奈子はそれに従い火を放つ。それで木の葉を次々に燃やしていった。だがそれで終わりではなかった。

「今度はわたしも」

春奈も動いた。そしてステッキを振ってシャボンを出す。

「えい！」

それを木の葉に向かって放つ。すると木の葉はシャボン玉に当たって溶けていった。こうしてフィガ口の木は瞬間になくなっ

魔女に乾杯！

てしまった。

「私の木の葉も」

「甘いよ、あんた達は」

華奈子は二匹の使い魔達にそう言った。

「この程度じゃ。あたし達に何もできないわよ」

「ムムム」

「もういいわ、タミーノ、フィガロ」

上からまた紫の魔女の声がした。

「御主人様」

「凄いわね。タミーノとフィガロの術をこんなに簡単に」

「春奈ちゃんがいなかったらどうしたらいいかわからなかったけれ

どね」

華奈子がそう言い返す。

「けれど何とか上手くいったわ。どう？」

「お見事」

魔女はくすりと笑ってそう言った。

「けれどこれで終わりじゃないわよ」

「今度はあんたね」

「ええ」

頷いた。そして前に出た。

「なっ」

箒もなしに宙にいた。そのままの態勢で宙に立っている。浮遊の術だった。

立ったままゆっくりと降りてきた。そして五人の前に降り立った。

檜の木の前に紫の法衣に身を包んだ少女がやって来た。

「今度は私よ。いいかしら」

「拒む理由はないわ」

華奈子は言った。

「さあ来なさいよ」

「待って」

魔女に乾杯！

だがそこで別の声が出た。そして前に出て来た。

第五十二話 完

2005・9・30

## 第五十三話

第五十三話 土の魔女

「私にやらせて、華奈子ちゃん」

「梨花ちゃん」

梨花が前に出て来たのであった。

「私今回あまり出番ないから。お願いね」

「けど」

「いいから」

そう言つて華奈子を下げさせようとする。

「何かあつた時はそれこそ頼むから。それでいいわね」

「そこまで言うのなら」

華奈子もそれ程強く断るつもりはなかった。それに頷くことにした。

「いいわ。じゃあ頑張つてね」

「有り難う。それじゃ」

梨花は華奈子に声を返した後で顔を正面に戻した。そして紫の魔女を見据えた。

「ということよ。いいかしら」

「私は別に構わないけれど」

紫の魔女は余裕の笑いを含んだ声で応えてきた。

「いいのね、本当に」

「ええ」

梨花は頷いた。

「土の魔女の誇りにかけて」

「それじゃあ私は」

言いながらフルートを構える。

「紫の魔女の名にかけて。行くわよ」

「ええ、いいわ」

魔女に乾杯！

こうして二人の戦いがはじまった。紫の魔女の笛から音楽が聴こえてきた。

それは幻想的で現実離れた曲であった。それが梨花を包んでいた。

「この曲、何!？」

「幻想交響曲ね」

「幻想交響曲」

春奈が華奈子に答えた。

「フランスのベルリオーズって人の作曲した曲よ。これはその一番夢、情熱ね」

「夢、情熱」

「この曲は確かに幻想的な曲だけれど彼女は何をするつもりなのかしら」

春奈は紫の魔女から目を離せなくなっていた。

「すぐにわかると思うわよ」

「梨花ちゃん」

そんな彼女に当の対峙している本人から言葉が返ってきた。

「だからゆっくりと見ていてね、そこで」

「いいの、それで」

「いいのよ」

今度はにこりと笑った。だが顔は紫の魔女から離しはしない。

「ベルリオーズの音楽がどんな力を持つてるか、確かめさせてもらうわ」

「いい心掛けね」

紫の魔女がそれを聞いて笑った。

「それじゃあ教えてあげるわ。幻想交響曲の力をね」

「どんなのかしら」

「それは」

魔女は梨花のその問いに答えた。

「これよ」

魔女に乾杯！

「梨花ちゃん！」

「これは……どういふことなの!?!」

何か梨花を襲った。そして華奈子達四人の叫びが木霊した。

第五十三話

完

2005・10・4

## 第五十四話

### 第五十四話

### 幻想の世界

「これって一体……」

「うふふふふふ」

紫の魔女は笛を吹きながら笑っていた。

「どうかしら、私の今度の魔法は」

「な、何なのよこれ」

華奈子が戸惑いの声をあげた。

「まるで夢の世界にいるみたい」

「それも悪夢ね」

梨花がそれに合わせるようにして言った。五人の周りに得体の知れない者達が蠢いていたのである。

「この曲はね、幻想といっても綺麗なものじゃないのよ」

「どうということなの？」

「ベルリオーズはね、自殺しようとしたの」

魔女は語った。

「その時の意識が朦朧とする中で見た夢を音楽にしたのがこれなのよ。だから不気味なのよ」

「そういうことだったの」

「ええ」

今度は梨花に対して答えた。

「そしてね、これだけじゃないわよ」

「梨花ちゃん、気をつけて」

「わかってるわ」

華奈子に言葉を返した。

「何をしてきても。油断はしないから」

「立派な心掛けね」

魔女はそれを聞いてまた笑った。

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「けれどそれだけじゃこの魔法には勝てないわよ」  
「それはどうだか」

梨花は魔女に対しても負けてはいなかった。

「私だつて修業してきたんだから。あんたに勝つ為にな」

「それじゃあ見せて御覧なさい」

魔女は言つた。

「私に勝つことをね」

「見せてあげるわよ、今ね」

「そうなの。じゃあ私も見せてあげるわ」

魔女の笛の音色が変わつた。

「!?!」

「とつておきの悪夢をね」

「とつておきの悪夢」

「それつて一体」

「どつちにしる碌なものじゃなさそうね」

「美樹ちゃん」

美樹が華奈子と赤音に対してそう言つた。

「どんなのかまではわからないけれどね」

「梨花ちゃん、気をつけてね」

「春奈ちゃん」

「何かあつたらすぐに私達が行くから」

「その時は貴女達も相手してあげるわ」

魔女は四人のその言葉を聞いてもやはり余裕であつた。

「その時を楽しみにしておいてね。じゃあ行くわよ」

「むっ」

「幻想交響曲。ギロチン台への行進」

「ギロチン台!?!」

「まさか」

ギロチンと聞いて五人の背に寒気が走つた。そしてそこに死が迫つて来た。

魔女に乾杯！

第五十四話

完

2  
0  
0  
5  
・  
1  
0  
・  
1  
1  
1

## 第五十五話

### 第五十五話 死の鎌

突如として空中に鎌が姿を現わした。そしてそれは一つではなかつた。

無数の鎌が宙に漂っていた。そして紫の魔女の周りを覆っていたのだ。

「鎌!？」

「まさかそれが」

「ええ。そのまさかよ」

紫の魔女は子供とは思えない程の凄みのある笑みを五人に返した。

「さあ梨花さん、行くわよ」

「その鎌で来るのね」

「そうよ」

魔女は頷いた。

「この鎌はそう簡単にはかわせないわよ。覚悟しなさい」

鎌が飛んで来た。そして梨花に襲い掛かって来た。

「くっ!」

梨花はそれを持ち前の運動神経でかわした。五人の中では華奈子が最も運動神経は優れているが梨花のそれもかなりのものであったのだ。

何とか鎌をかわしていた。だがそれも限度がある。紫の魔女は笛を吹いて鎌を操っていればいいだけであるが梨花は身体全体を使わなくてはならないのだ。次第に疲弊が見えてきていた。

「さあ、何時までかわせるかしら」

「くっ」

「私の鎌は何時までも貴女を狙うわよ。そんな激しい動きが何時までもできる筈はないわよね」

その通りであった。梨花の息が次第に乱れてきていた。

魔女に乾杯!

「時間が経てば貴女は動けなくなってくる。私はそれを待てばいいのよ」

「梨花ちゃん」

「駄目よ、華奈子ちゃん」

行こうとする華奈子を美樹が制止した。

「けど」

「梨花ちゃんならやれるわ、絶対に」

「そうね」

春奈がそれに頷いた。

「まだ私達が行っていい時じゃないわ、まだ」

「そうなの」

「まだ梨花ちゃんは動けているから」

美樹は今度は赤音に対して言った。

「私達も動く必要はないわ」

「わかったわ、それじゃあ」

「まだ動かない」

「有り難う、四人共」

梨花は鎌から目を離しはしなかった。だが四人の話を聞き鎌を見据えたままその声を送った。

「私は絶対やるから。安心してて」

「うん」

「いいお友達を持ったわね」

魔女はそれを聞いて梨花にその声をかけてきた。

「けれど。貴女が動けなくなるのはもうすぐね」

「それはどうかしら」

梨花は言い返した。

「わかったわ、貴女の鎌を壊すやり方は」

「何ですって」

一瞬だけがそれを聞いて魔女の色の色が変わった。  
「どうやるつもりなのかしら」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「御覧なさい」

梨花はまずは間合いをとった。

「これが私のやり方よ」

そして魔法を放つ態勢に入った。梨花の周りが動いた。

第五十五話

完

2005・10・11

## 第五十六話

### 第五十六話 鎌砕き

石が浮かんだ。そして梨花の周りを囲む。

「見ていなさい」

「どうするつもりなのかしら」

紫の魔女は石が浮かんだのを見ても冷静なままであった。

「それで私の鎌を撃ち落すつもりなのかしら」

「そうしようとも思っただけだね」

梨花は笑いながらそれに応じてきた。

「けれどそれじゃあまり面白くないからね」

「あら」

魔女もそれを聞いて笑った。

「それじゃあどうするつもりなのかしら、一体」

「それは来てみたらわかるわ」

梨花はこう返した。

「どう？来てみる？」

「そうね」

魔女も乗ってきた。

「じゃあ行くわよ」

そう言うのと再び口に笛をあててきた。そしてまたあの曲を奏でる。

「来るわよ、梨花ちゃん」

「わかってるわ」

梨花は四人の言葉に頷いた。

「だから。安心してて」

「うん」

四人は梨花を信頼することにした。見守った。そこに鎌が一斉に襲い掛かってきた。

「さあ、どうするのかしら」

魔女に乾杯！

「決まってるじゃない」

梨花は不敵に笑ってこう言い返した。

「こうするのよ」

「なっ!？」

何と梨花の周りで石を旋回させた。それで襲い掛かって来る鎌を全て撃ち落したのであった。

「どうかしら、これで」

「やるわね」

紫の魔女はそれを見て笑みを消した顔でこう言った。

「流石にね。もうあなたの魔法にもそろそろ慣れてきたわ」

「それはどうかしら」

だが魔女はそれでも不敵なままであった。

「私はね、まだまだ曲を知っているのよ。曲の分だけ魔法があるの」

どうやら彼女の魔法の源は音楽であるらしい。笛を吹くのはこの為か。

「じゃあそれを見せてくれないかしら」

「そうね」

魔女は相変わらず余裕の笑みを浮かべたままであった。だがここは退いた。

「生憎だけれど今は止めておくわ」

「あら」

「今回はどうも貴女達にしてやられてばかりだったし。素直に負けを認めるわ」

「いいのかしら、そんなに素直で」

「今度は勝つ自信があるから」

自信に満ちた声であった。

「今は退くわ。それじゃあ」

クルミとマリモを連れだした。そして天に舞い上がり何処かへと消えて行ってしまった。

「いつちやったね」

魔女に乾杯！

「ええ。けど」  
今回は勝つことができたが紫の魔女の力はまだまだわからなかった。そして使い魔達もいた。五人はまだまだ魔女に適わないと思わざるを得なかった。

第五十六話 完

005・10・20

2

## 第五十七話

### 第五十七話 使い魔の謎

とりあえずはまたしても紫の魔女を退けた五人であるがこれからのことを考えるとやはり心配なことがあった。それは魔女自身にあるのではなく彼女が連れてきている使い魔達であった。

「何なのかしらね、あれ」

五人は学校で華奈子の教室に集まっていた。そして話をしていた。狐と狸のことね」

「そう、それ」

華奈子は赤音の言葉に頷いた。

「あんなのを使い魔にしてくるとは思わなかったわ」

「ましてや今まで一人だったし」

「それもあるのよ」

華奈子は梨花の言葉にも頷いた。

「急に出て来たでしょ、それも不思議なのよ」

「そりゃ魔女だから使い魔の一匹や二匹いてもおかしくはないけれど」

「急にだからね」

「そうそう」

美樹は華奈子の言葉に相槌を打っていた。

「問題はそこなのよ」

「絶対何かあるわよね」

「何処で知り合ったのかも気になるし」

「そこを突き止めれば紫の魔女のこともわかるんじゃないかしら」

「魔女のこと」

それまで黙っていた春奈がふと呟いた。

「そういえば紫の魔女のことって今までよく考えたこともなかったわよね」

魔女に乾杯！

「あっ」

他の四人はその言葉にハツとして顔を見合わせた。

「そういえば」

「紫の魔女の正体って何なんだろう」

「私達と同じ年頃なのは間違いないだろうけれど」

「じゃあ小学校高学年よね」

春奈は続けて言った。

「それもこの近くで魔法を使える」

「すつごく限られてくる筈よね」

「誰なんだろう、本当に」

「まず狐と狸の使い魔よ」

春奈はさらに言う。

「そこに秘密があると思うわ」

「普通にいる生き物じゃないしね」

「ましてや街中でなんて滅多に見ないし」

五人は考え込んだ。

「誰なんだろう、一体」

「狐や狸がいる場所ってこの辺りにあつたっけ」

「あるよ」

華奈子が言った。

「華奈子ちゃん、それ何処？」

「動物園と」

「そこはちよつとないんじゃないかなあ」

「幾ら何でもね。抜け出すことなんてできないだろうし」

「あと山とか」

「山!？」

「そうよ。例えば」

華奈子はそう言いながらある場所を指差した。四人はそこに注目した。

魔女に乾杯！

第五十七話

完

2  
0  
5  
・  
1  
0  
・  
2  
2

## 第五十八話

### 第五十八話 裏山の秘密

そこは学校の裏山であった。華奈子は丁度学校の裏手を指差していたのである。

「あそこに!？」

「うん」

華奈子はにつこりと頷いた。

「前あそこに行った時に見たのよ、狐と狸を」

「そうなんだ」

「あそこなら餌も一杯あるし。いると思うよ」

「そうね」

四人はそれを聞いてまた考え込んだ。

「可能性としては高いわよね」

「そう。いるとしたらあそこかも」

「それじゃあ調べてみる？」

「そうね」

五人はあらためて頷き合った。

「思い立ったが吉日。行く？」

「そうしましょう」

「それじゃあ五人で」

「うん」

こうして五人は放課後学校の裏山に行くことになった。五人は魔法の法衣に着替えてそこにやって来た。

「ここかあ」

「何か暫くぶりに来るわ」

「あれっ、そうなの？」

華奈子は春奈の言葉にきよんとした。

「あたしはいつも来てるわよ」

魔女に乾杯!

「そうなの」

「美奈子と一緒にね。美奈子よくここで笛や歌の練習するから」  
「ふうん」

「美奈子ちゃんって努力家なんだ」

「そうね。あたしと違って。音楽のことなら時間を見つけて練習したり勉強したりしてるわよ」

「華奈子ちゃんは体育が得意だけれどね。美奈子ちゃんは音楽が」  
「ふたごだけれどね。そういうところははっきり分かれてるのよ。顔は同じなのに」

「髪の毛の色の違いかしら」

「そうかも」

そう言われるとそんな気もした。

「何かね、本当に昔から外見以外は全然違っって言われてるのよ」

「美奈子ちゃん大人しいしね」

「ううん、他にもね。何かと違っって言われるし」

「そうなんだ」

「そうなの。まあ慣れたけれどね」

華奈子達はそんな話をしながら裏山を登って行く。そして頂上に辿り着いた。

「ここが頂上なのよね」

「久し振りに来るわね」

「よく美奈子と二人でここにいるんだけれどね。その時に見たのよ」  
「ふうん」

四人は華奈子の話を聞きながら辺りを見回していた。だがさしあたって何も見当たらなかった。

「ここにいるのよね」

「そうなんだけれど」

だが今は何も見えない。何もいないように見えた。

「いないのかなあ、今は」

「どうなんだろ」

魔女に乾杯！

五人は探してみた。だが狐も狸も見当たらなかった。諦めようとした。その時だった。

第五十八話 完

2005・10・22

## 第五十九話

第五十九話

消えた影

「!？」

「どうしたの、華奈子ちゃん」

四人は華奈子が急に立ち止まったのを見て顔を彼女に向けた。

「あそこに」

「あそこ!？」

華奈子は茂みを指差した。四人はそこに注目した。

「何かいたのよ」

「まさかそれって」

「そのまさかかも」

華奈子はそれに答えた。

「あそこにいたのよ。それも二匹いるみたい」

「それじゃあ間違いないわね」

「探そう」

「うん」

こうして五人はまた探しはじめた。だが結局何も見つかりはしなかった。そしてそうこうしている間に時間だけが過ぎていった。五人は仕方なく諦めることにした。

「おかしいなあ、さっき確かに見たのに」

華奈子は悔しそうにこう言った。

「見間違いかな、そんな筈はないけれど」

「まあ今日は諦めましょう」

皆を代表して梨花がこう言った。

「また来ればいいから」

「そうね」

そんなことを言いながら五人は裏山から帰った。だがその後ろ姿を見送る影があった。

魔女に乾杯！

「危ないところでしたな」  
「全く」

その茂みからひよっこりと影が出て来た。紫の魔女の使い魔タミーノとファイガロであった。

「意外と勘がいい。流石はあの方の……」

「タミーノ殿」

ファイガロがこう言って彼を宥めた。

「あまり迂闊なことは」

「おっと、これは失敬」

タミーノはそれに気付き言葉を引つ込めた。

「何処で誰が聞いているかわかりませんからな」

「そうそう。御気をつけなされ」

彼等はその話をしながら五人を見ていた。だが五人はそれには気付いていない。

「今は大事な時ですからな」

「左様でしたな」

二匹はそう言い合って頷き合った。それからまた言った。

「して紫の魔女様の今後は」

「また何か考えておられるようです」

ファイガロはこう答えた。

「今度は何か。楽しみですな」

「我等も何かと腕の振るいがあるというもの」

「ええ。あの方はまさしく天才」

「その天才をどう使われていくのか」

「楽しみにしておきましょう」

「それではその時に備えて」

「こちらも腕を磨いておきましょう」

「はい」

そう言いながら二人は何処かに姿を消した。だが気配は残っていた。それは何かを企む気配であった。

魔女に乾杯！

第五十九話

完

2  
0  
0  
5  
・  
1  
0  
・  
2  
7

## 第六十話

### 第六十話

### ライゾウの催促

最近ライゾウはとみに食べまくっている。それまでは二食だったのが三食食べるようになっていいる。朝夕だけでなく夜食も食べているのである。

「何かお腹が空いちゃってねえ」

そう言いながらガツガツ食べる。キャットフードはすぐになくなってしまつてしまう。

「あんた最近食べ過ぎよ」

華奈子がそう注意する。だがそれでもライゾウは食べるのを止めない。

「まあいいじゃない。よく食べられるのは健康の証」

そしてまた食べる。遂にその腹は蜂のようになってしまった。

「太ってもいいの？」

「平気平気」

華奈子の言葉になぞ耳を貸さない。そしてまた食べ続ける。

いい加減食べ過ぎたので身体の動きが鈍くなってくるかと思えばそうではなかった。動き自体は全然変わりはしなかった。

「そんな体格で変ねえ」

「秘密を知りたい？」

ライゾウは華奈子にこう声をかけてきた。

「よかったら教えてやるよ」

「使い魔なのに本当に偉そうね。まあいいわ」

それでも華奈子は納得した。

「教えて。どうしてなの？」

「これも魔法なんだ」

ライゾウは答えた。

「魔法」

魔女に乾杯！

「そう。魔法でね、身体の動きを早くしているんだ」  
彼は答えた。見れば脚の色が今までと違っていた。肉球の部分が少し黒いのである。

「ここにね、魔法をかけたんだ」

ライゾウは自分の肉球を見せながらこう言った。

「わかった？」

「そうだったの」

華奈子はとりあえずはそれに頷いた。

「だからね。幾ら食べても安心なの」

今度はこう言って自己弁護をする。

「それはどうかしら」

「というと？」

だが華奈子はそれをよしとはしなかった。そう言いながらライゾウを見やる。

「幾ら何でもそのツチノコみたいなお腹はないんじゃない？」

「ツチノコ！？」

見れば確かにそうであった。ライゾウはまるでツチノコのように太っている。その姿を見ただけで彼がもう完全に太り過ぎなのがわかる。

「痩せなさい、術でいつも誤魔化せるとでも思ってるの？」

「大丈夫だって」

しかしライゾウは取り合おうとはしない。

「魔法でどうとでもなるから」

「ふうん、いつも魔法が使えると思ってるの！？」

「ギクツ」

そんな筈がないのも少し考えればわかることであった。ライゾウはそれを聞いて顔をギクツとさせた。つまり単なる詭弁だったのである。

「それは……」

「じゃあ痩せなさい。食べたならその分動く」

「はい」

「そうじゃなかったら食べない。わかったわね」

「わかりました」

こうしてライゾウはまたもやダイエットに励まされることになった。夜食の分は運動することになった。

使い魔とはいえ楽はできない、彼はそれを身を以って味あわせられたのであった。

第六十話

完

2005・10・28

## 第六十一話

### 第六十一話 タロの直感

ライゾウと二匹で華奈子の使い魔を務めるタロであるが彼は相方に比べてどうにも大人しいとよく言われている。ライゾウがとにかくよく食べ、趣味も多彩であるのに対して彼は少食で趣味は寝ることだけということにもそれがよく表われていた。

「何か同じ使い魔でもこうも違うのね」  
「仕方がないよ」

タロはこう華奈子に対して答えた。

「犬と猫の違いなんだから。当然だと思っよ」  
「それでもこうまで対象的だと」

華奈子としても戸惑うことがあるようである。

「かえってあれなのよ」  
「あれって」

「対応にね、困るのよ」

「そうかなあ、楽だと思っけれど」  
「全然」

華奈子は首を横に振ってそれを否定した。

「あんたが寝てたらライゾウが起きてる、ライゾウが寝てたらあんたが起きてる、だもの。あたしとしては休む暇もない程なのよ」  
「気にしなくていいよ」

「そうはいかないわよ」

流石にそれは主人としてできなかつた。

「せめて一緒に動いてくれればいいんだけど」

「御免ね。まあ御主人が大変な時は一緒に動くから」

「頼むわよ」  
「うん」

そんな話を玄関でしていた。そこに美奈子が帰って来た。

魔女に乾杯！

「おかえり、美奈子」

「うん」

華奈子は美奈子に顔を向けて挨拶をする。美奈子も微笑んでそれに応えてきた。

「どうだった、今日は」

「まあまあね」

美奈子は音楽のレッスンがない時でもいつも練習をしているのである。晴れの日は学校の裏山で、雨の日は家で。今日は晴だったので学校の裏山で練習をしていたのだ。

「歌の練習をしていたけれど」

「ふうん」

「やっぱり歌い込んでいるとね。上手くなってきたって実感があるわよね」

「まあ何でもそうだよね」

華奈子はそれに無邪気に頷いた。

「あたしも。魔法だって練習すればできるようになったし」

「勉強だってそうよ」

「あれは勘弁」

それを聞いたただけであからさまに嫌な顔になる。

「学校の勉強だけは駄目なのよ。じんましんが出るわ」

「そんなに」

「だからね。どうしても駄目」

「まあだったら仕方ないけれど」

美奈子はそう言いながら玄関を上がった。そして二人の部屋に向かう。

「先に部屋に行ってるわね」

「うん」

ここでタロの前を横切る。その時タロの鼻に何か別の香りが入った。美奈子の香りとは全く別の香りだ。

「!？」

だがそれは一瞬であつた。すぐに消えた。

しかしそれであることに気付いた。この香りが美奈子のものではないということに。タロの頭の中にある疑惑が浮かんだ。だがそれはすぐに消えた。有り得ないと思つたからだ。

(馬鹿馬鹿しい)

それにその匂いは一瞬のおおであつた。間違いかも知れない。むしろ間違いの方が可能性が高いと思つた。

そして忘れた。だがこれは当たっていた。後に彼はこれを思い知らされることとなつた。

第六十一話 完

2005・11・3

## 第六十二話

### 第六十二話 運動会の前に

華奈子達の学校でも運動会がある。何処の学校でもあるものだが華奈子達の学校でも当然のようにある。

「また運動会がはじまるね」

「うん」

上機嫌な華奈子に対して春奈はあまり機嫌がよくなかった。力なく応える。

「何かあったの？」

「私体育苦手だから」

彼女は小さな声でこう言った。

「あまり嬉しくないのよね」

「そうだったの」

「華奈子ちゃんは嬉しいだろうけれど」

「あたしはね、そりゃ」

華奈子は運動神経がいいことで知られている。従ってこうした大会では幾つもの競技に出て欲しいと言われて引っ張りだこなのである。

「頑張りどころだから」

「いいよね、そういう場面があつて」

「春奈ちゃんだってあるじゃない」

「私に？」

「うん」

華奈子はこう言って頷いた。

「お勉強とか。春奈ちゃん得意でしょ？」

「けどあれは」

「他にもあるじゃない。応援とか」

「応援」

魔女に乾杯！

「そうだよ。今度チアガールやるんだよね」  
「うん、クラスのね」

この学校ではクラス対抗で運動会を行うのである。春奈はクラスの応援団のチアガールの一人となったのである。

「それじゃあそれ頑張ればいいと思うよ。人間頑張るところで頑張ればいいから」

「華奈子ちゃん」

春奈はそれを聞いてじんときた。華奈子のそうした言葉が嬉しかったのだ。

「そつちでも対抗ね」

「えっ!？」

「あたしもやるのよ」

華奈子にはこやかに笑ってこう言った。

「チアガール。美奈子もやるらしいよ」

「美奈子ちゃんも」

「赤音ちゃんや美樹ちゃん、梨花ちゃんもやるんだよ。運動会じゃ敵味方に分かれるね」

「そついえばそうね」

おつとりとした春奈もここで気付いた。クラス対抗ならば当然そうなるのだ。五人も美奈子もそれぞれ全く違うクラスにいるんだから。

「いい、春奈ちゃん」

「負けないわ、って言うのよね」

「あつ、わかる?」

「わかるわよ」

くすりと笑って言った。

「だって華奈子ちゃんの口癖だもの」

「あつ」

「それじゃあこつちも応援負けないわよ」

「うん」

魔女に乾杯！

「お互い徹底的にやりましょうね」

「そうこなくっちゃ」

こうして二人は今度は敵と味方に分かれて競うことになった。運動会はもうすぐはじまるうとしていた。

第六十二話 完

2005・11・4

## 第六十三話

### 第六十三話 徒競走

運動会当日となった。開会式の後華奈子達はそれぞれのクラスに別れた。そして競い合うこととなった。

「うちのクラスは安心だよな」

華奈子のクラスでは皆そう囁き合っていた。

「華奈子ちゃん、頼むよ」

「任せといて」

体操服に半ズボンの華奈子が胸を張ってそれに答える。この学校の体操服は男の子も女の子も半ズボンであった。それが華奈子によく似合っていた。

「どんな競技でも。一番になってみせるから」

「頼むよ」

「梨花ちゃんや美樹ちゃんに負けないでね」

「運動で負けるわけにはいかないわよ」

華奈子は笑ってこつ言った。

「運動なら。誰にも負けないわよ」

「期待してるわよ」

「それじゃあね」

「うん」

華奈子は頷いた。そして早速一〇〇メートル走に出た。これには梨花が出ていた。

「負けないわよ、華奈子ちゃん」

「こつこそ」

二人は火花を散らし合った。そして構えに入る。

ピストルが鳴った。そして同時に飛び出た。二人の速さはほぼ互角であった。

しかし華奈子の方がほんの僅かだが速かった。そしてその差が走

る程如実に表われてきた。

一〇〇メートルが終わった時にゴールにいたのは華奈子だった。彼女は予想もできない程の速さでそこにいたのであった。勝負は一瞬のことではあったがそこにははつきりとした力の差があった。

「負けたわ」

一瞬であつたがはつきりと分かれた形で梨花がゴールに入つて来た。そして華奈子に対して言う。

「また速くなつたわね」

「ええ。努力してたから」

華奈子にはこりと笑つてこう返した。

「それでも毎日走つてるのよ」

「そうだったの」

「だからね。誰にだって負けないんだから」

「強気ね」

「当たり前よ。スポーツなら誰にも負けないわよ」

「それじゃあ他の競技も勝てるのね」

「勿論よ」

華奈子は新しく出て来た声にも応えた。その声の主は美樹であつた。

「じゃあ次は私とね」

美樹は不敵に笑つてこう言った。

「二〇〇メートル障害物競走。勝てるかしら」

見れば美樹の脚はかなり長かつた。半ズボンから出ているその脚は長く、それでいてスラリとしていた。その脚を見ただけで彼女もまた運動がかなり得意であるのがわかつた。

「勿論よ」

だが華奈子は臆することなく言い返した。

「どんな競技でも。勝つてみせるわ」

生来の負けん気が出て来た。華奈子は燃えていた。

「美樹ちゃん、勝つてみせるわ」

魔女に乾杯！

「じゃあこつちも」

美樹も引くつもりはなかった。不敵に笑った。

「勝つのは私よ」

「負けないからね」

一つの勝負が終わってすぐに新しい勝負がはじまるうとしていた。今少女達は火花を散らしていた。

第六十三話 完

2005・11・10

## 第六十四話

### 第六十四話 障害物競走

障害物競走の準備が整った。華奈子と美樹はそれぞれのクラスの列にいた。そしてそこから互いに睨み合っていた。

「負けないから」

二人は同じことを思っていた。絶対に負けたくない、その思いは同じだった。そして競技に挑んだのであった。

いよいよはじまる。二人は同じレースになった。それがさらに対決を深めた。

「位置について」

先生の声が響く。二人はそれを受けて構えに入る。

「用意」

脚に力を込める。待つ一瞬の時間が永遠に感じられた。

銃が鳴った。そして飛び出す。まずは美樹が出て来た。

「脚の速さなら華奈子ちゃんにも負けないわよ」

美樹は走りながら思った。走っていて今日は調子がいいことに気付いた。これならいける、その時は確かにそう思った。確信していた。

その速さが続いていた。美樹はそれを頼りに進む。しかし彼女は自分のことだけを見ていた。華奈子のことを見てはいなかったのだ。華奈子も速かった。そして彼女はそれだけではなかった。美樹以上の跳躍力を見せてハードルを跳び越えていた。それは美樹の跳躍よりも遙かに上であった。

「なっ……」

美樹は華奈子はその跳躍を見て絶句した。上にも、前にも自分のそれなぞ比較にもならない程見事なものであった。彼女はそれを見て思わず息を飲んだ。

だが動きにそれは影響させまいとした。そしてそれは成功した。

魔女に乾杯！

美樹はその速さを維持して前に進む。だが跳躍力の差は如何ともし難いものがあつた。

結局ゴールに先に到達したのは華奈子の方だった。彼女はその茶色の髪をたなびかせてテープを突っ切つた。彼女はまたしても勝利を収めたのであつた。

「負けたわ」

二番目に入つて来たのは美樹であつた。彼女はゴールに入ると隣にいる華奈子に対してこう言つた。

「まさかあんなにジャンプ力があるなんて」

「あたしバネも凄いんだから」

華奈子は胸を張つてこう言つた。

「それには気付かなかつたみたいね」

「脚の長さでいけると思つただけど」

美樹は自分の長い脚を見ながら口惜しそつに言つ。

「背だつて私の方が高いし。それなのに」

「スポーツは体格じゃないよ」

それに対する華奈子の返答はこうであつた。

「運動神経なんだから」

「そつだね」

残念だがその通りであつた。美樹は華奈子のその抜群の運動神経の前に敗れたのであつた。

「さてと、次は」

華奈子は自分のクラスの席に戻つた。そして次に自分が出る競技について調べた。

「仮装競争？また変なのだね」

「うちのクラスはお姫様の格好よ」

クラスメイトの一人がこう言つた。

「お姫様」

「そつ。だから頑張つてね、華奈子ちゃん」

「うん」

何か今一つ訳がわからないがそれに頷いた。

「で、次の相手は誰かなあ」

「私を」

「貴女は」

華奈子はその声に振り向いた。そこにはまた新しい相手がいたの  
であつた。

第六十四話

完

2005・11・13

## 第六十五話

### 第六十五話 仮装競争

それは赤音であった。彼女は不敵な笑みを浮かべながら華奈子の前に立っていたのであった。

「仮装競争には私が出るの」

赤音は得意気にこう言ってきた。

「赤音ちゃんか？」

だがどういわけか華奈子の声は拍子抜けしたものであった。

「あれ、驚かないの？」

「だって」

華奈子はその訳を述べた。

「赤音ちゃんどん臭いんだもん。そんなので大丈夫なの？」

「任せなさい」

しかし彼女は根拠のない自信をここで見せてきた。

「今回は負けないんだから」

「そうなの」

「華奈子ちゃんこそ覚悟してなさいよ。今度こそ負けるんだから」

「うん」

だが華奈子は自分のことより赤音の方が心配であった。彼女がこけはしないかと思っていたのだ。そうこう考えているうちにレースがはじまった。

華奈子は十二単であった。シンデレラのような格好を予想していただけにこれは意外であった。

「えっ、何かかぐや姫みたい」

「みたいじゃなくてそのものよ」

クラスメイトはしれっとしてそう答えた。

「お姫様だから。じゃあ何だと思ってたの？」

「何と言われても」

「こう言われるとかえって返答に苦しむ。

「これじゃあ。動きにくくない？幾ら何でも」

「仮装競争ってそういうもんじゃないの？」

「そういうものなの？」

「だって。普通に走れたって面白くないじゃない」

「それはそうだけど」

「まあ頑張つてよ。期待してるから」

そう無責任な発言で終わらせた。そんなこんなで位置についた。

見れば赤音もお姫様の格好であった。だがそちらはシンデレラの様な格好であった。

「やっぱり負けるかな、こりゃ」

流石にそう思わざるを得なかった。だが勝負とあらば全力を尽くす、華奈子は意を決して構えた。

銃が鳴った。それを受けてスタートを切る。走るとなれば一目散だ。

赤音も順調に走っていた。今回は転びそうにもない。

「いけるかな、これは」

赤音自身もそう思った。流石に十二単とドレスでは差がある。実は面と向かって勝利宣言をしてもかなり不安であったのだ。正直華奈子に勝てるとは思っていなかった。

「私が華奈子ちゃんに勝つたはじめての人なのかなあ」

考えが飛躍してこうも思いはじめていた。学校で今まで華奈子にスポーツで勝てた者はいなかった。華奈子の運動神経はそこまで凄いものだった。

「勝つたら自慢しよつと」

無邪気な考えであった。しかしそれはすぐに打ち砕かれてしまった。

「えっ……」

目の前を驚くべき速さで十二単の華奈子が走り去ってしまったのだ。そしてテープを切った。

「嘘……」

やはり華奈子は華奈子であった。何を着けていてもその足を止めることはできなかった。彼女は体力も突出したものであったのだ。

「信じられない」

だがこれは現実だった。結局華奈子の体力勝ちであった。見事三連勝を収めた彼女は次の運動会のイベントに向かうのであった。

第六十五話 完

2005・11・17

## 第六十六話

### 第六十六話 応援

三人との勝負は全て午前中のことであつた。午後はそれとは別に勝負があつた。

応援である。これには五人だけでなく美奈子まで参加していた。

六人はそれぞれチアガールの服を着て応援合戦をすることになった。

「これでも負けないからね」

華奈子はそう言いながら他の五人のチームを見据えていた。

「皆、やるわよ」

そして今度はクラスメイトに顔を向けてきた。

「応援でも勝つて、一気に得点をあげるわよ」

「華奈子ちゃん、それはいいけれど」

「何？」

「服装違つよ」

「あつ」

見れば華奈子は詰襟であつた。だが実は色々な事情があつてこのクラスでは女子は両方することになつていたのであつた。華奈子達はチアガール担当であつたのだ。

「御免御免」

「気をつけてよね」

クラスメイト達はそんな彼女を注意する。

「こつからが肝心なんだから」

「言いだしつぺは華奈子ちゃんなんだし」

「そうだったね」

そう言いながら照れ臭そうに頭をかく。

「こつちの切り札なんだから。今は見せちゃ駄目」

「うん」

「こごぞという時に派手にいかないかね」

「そうね」

どうやら彼女達は彼女達で何か考えているようである。そして遂に応援がはじまった。

梨花のチームは梨花のバトンテクニクで見せた。美樹のクラスは彼女の卓越した跳躍力を使って派手な演技を披露する。

赤音のクラスは先の二つのクラスとは違って赤音のバントマイムを使った。その見事さから彼女は姉から指南を受けたのだとすぐにわかった。

「お姉ちゃんのおかげか」

華奈子はそれを見て呟いた。どうやら運動神経はあまりなくとも赤音は演技力はあるらしい。見事なバントマイムであった。

そして美奈子のクラスは美奈子が音楽を奏でる。笛の音色に合わせて詰襟の男子もチアガールの女子も見事な動きを見せる。

「美奈子の奴」

それを見て華奈子は危険を感じた。

「音楽を使うなんて。やってくれるじゃない」

「けれど綺麗よね」

「本当。他の三つのクラスも。こりゃうちも負けてられないわよ」

「ええ」

華奈子はクラスメイト達の言葉に頷いた。

「やってやるんだから」

「あっちも凄いしね」

今度は春奈のクラスに顔を向ける。

「うっ」

そこに目をやりまたしても華奈子の対抗心が燃え上がった。

「やるじゃない、春奈ちゃん」

俄然やる気が出て来た。それを見ただけで燃え上がる。

「まさかそれをやるなんて」

「凄いわね」

「本当に」

魔女に乾杯！

クラスメイト達もうなっていた。それだけのものがあった。春奈もまた切り札を出していたのであった。

第六十六話 完

2005・11・17

## 第六十七話

第六十七話 春奈の切り札

春奈は魔法を使っていた。何と自分達の周りに色とりどりのシャボン玉を浮かせていたのだ。

それはふわふわと春奈達の周りを漂う。そして場を華やかなものにしていった。

「春奈ちゃん、やるわね」

華奈子はそれを見て闘志を燃やした。

「そうこなくっちゃ。あたしもやりがいがあるわ」

「やりがいがあるって」

クラスメイトはそんな彼女を見て心配になってきた。

「どうするのよ」

「流石に魔法まで使われたら勝ち目はないわよ」

「何言ってるのよ」

華奈子はそんなクラスメイト達に対して言い返した。

「それならあたしだってやってやるわよ」

「やってやるって」

「あんだ別の魔法でしょ」

「まあ見てなさいって」

そう言つとステッキを取り出した。

「これをこうやって」

魔法を唱える。そして火を取り出した。

「これで。やってやるわよ」

それは無数の炎の輪であった。それを激しい動きで華奈子達の周りに回転させる。

「これでどうかしら」

「うわ」

クラスメイト達は激しい動きで跳ね回る炎の車輪を見て驚きの声

魔女に乾杯！

をあげた。

「また派手な」

「どう、これなら負けないでしょ」

「それはどうかしら」

「何かあるの？」

「あれを見て」

見れば他の三人も魔法を使っていた。

赤音は光を所々に跳ね回らせていた。美樹は風でポンポンを宙に回している。そしてその他の華やかなものをありったけ舞わしている。

そして梨花は大地を動かした。それで段差を作りクラスメイト達をそこで激しく動かしているのだ。当然その中には梨花自身も含まれていた。

「やるわね、皆」

だがそれを見ても華奈子はまだ笑っていた。春奈にしる今度は水芸まで見せている。

「そうこなくっちゃ」

「ということはまだ何か考えがあるのね」

「うん」

華奈子は頷いた。

「このポンポンをこっやって」

それに火を点ける。

「こっするのよ。これならどうかしら」

「できるのはあんたしかいないけれど」

クラスメイト達がクレームをつける。

「それでもいいというのならやったら？」

「わかったわ」

何とそれに乗ってきた。

「それじゃあやるわね」

「ええ、頼むわ」

魔女に乾杯！

「魔法となったらうちにクラスにはあんたしかいないんだから」  
「よし」

華奈子に気合が入った。そして炎のポンポンを自在に操りながら動き回る。応援はそれぞれ魔法まで使った派手なものとなっていた。だがそれを苦々しい目で見える少女がいた。

第六十七話 完

2005・11・24

## 第六十八話

### 第六十八話

### 美奈子の苦悩

「くっ」

美奈子はそんな他のクラスを見て口惜しそうな表情を浮かべていた。彼女のクラスには魔法を使える者が一人もいないのである。

「これは仕方ないわよ」

美奈子のクラスメイト達が出た。

「うちのクラス魔法使える人いないから」

「これは諦めるしかないわね」

「魔法、ね」

美奈子はそれを聞いて呟いた。

(使えたらよかったのに)

心の中でも呟いた。そして歯噛みする。

(でもここじゃ)

「美奈子ちゃん」

一人心中で呟く彼女にクラスメイト達が声をかけてきた。

「何？」

「私達は私達で頑張りましょう」

「私達で」

「魔法なんか使わなくてもね」

「そうそう。こっちには魔法がなくてもそれと同じ位凄いのがあるし」

「それって何？」

「音楽よ」

彼女達は言った。

「美奈子ちゃんの音楽よ」

「頼りにしてるわよ、それで頑張って」

「うん」

魔女に乾杯！

美奈子はそれに頷いた。そしてフルートを手にとった。

「それじゃあいくね」

「お願いね」

クラスメイト達は身構えた。そして美奈子は笛を奏ではじめた。

美奈子のクラスはそれに乗り動きはじめた。その動きはそれまでに比して見違える程華麗になつていた。

「うわ、凄い動き」

それは華奈子のクラスからも見えた。皆それを見て驚きを隠せない。

「これは勝てないかもよ」

「うん。それに音楽もいいし」

「そうね。この曲」

華奈子は曲を聴きながら呟いた。

「何て曲だろ」

「こうもりの序曲よ」

「こうもりの」

クラスメイトの一人が言った。

「確かオペレッタの最初の曲だったわよね」

「あ、この前教科書に載ってたね。作曲者はシュトラウス」

「そうだったの」

「そうだったのって」

あまりと言えばあまりな華奈子の言葉に流石に呆れてしまった。

「華奈子ちゃんって本当に勉強は駄目なんだから」

「自分のお姉さんのことでもあるでしょ。もっとしっかりしてよ」

「いやあ、御免御免」

そうは言ってもやはり勉強には頭が回らない華奈子であった。

そのかわり応援には力が入っていた。彼女だけでなく他の四人、そして美奈子も動きを激しさと躍動感、そして華麗さを増していく。応援は激しくなる一方であった。

応援合戦が終わった。そして判定となった。得点が今発表されよ

魔女に乾杯！

うとしている。華奈子達は息を飲んだ。

第六十八話 完

2005・11・24

## 第六十九話

### 第六十九話 結果

得点が出て来る。華奈子だけでなく他の四人、そして美奈子までもその結果を見守る。換えられていく得点の掲示板を見ながら六人は固唾を飲んでいた。

「誰が」

「どのクラスが」

「勝つの!？」

全ての関心はそこにあつた。六人は得点から目を離さない。そして遂にその結果が出た。

結果は六つのクラスいずれもが同じ得点であつた。結局勝敗はここではつかかなかつた。

「ちえっ」

華奈子はそれを見て口惜しそうに首を傾げた。

「勝てると思つただけどなあ」

「仕方がないわよ」

そんな彼女をクラスメート達が宥める。

「他のクラスだって頑張つただから」

「そうよ。それでも負けなかつたってことの方が大きいわよ」

「そうかなあ」

だが華奈子はそれでも不満であつた。

「折角勝てると思つたのに」

「まあまあ」

「その分は他の競技でとりかえしましょう」

「そうね」

根が単純なだけあつてすぐにそれに頷いた。

「じゃあ次の競技で勝ちましょう」

「そうね。じゃあ次は」

魔女に乾杯!

「あたしが出るのはある？」

「華奈子ちゃんの出る競技は午前中で全部終わってるわよ」  
「何だ」

それを聞いて残念そうに溜息をつく。

「じゃあ何にもならないじゃない」

「ちよつと待って」

だがここでクラスメイト達はそんな彼女を呼び止めた。

「団体競技があるわよ」

「団体競技」

「まずは女子リレーと」

「ふん」

見れば華奈子がアンカーであった。

「女子障害リレー。これも出てるわね」

「よく見たらあたし大抵の競技に出てるね」

「だって華奈子ちゃんがうちのポイントゲッターだもの」

「期待してるんだから。頑張ってよ」

「いやあ、照れるな」

そう言いながらもまんざらではない。

「障害もアンカーだから。頑張ってね」

「うん」

「そして後は」

プログラムを見ていく。そして最後の競技がそこにあった。

「騎馬戦ね」

「騎馬戦」

それを聞いた華奈子の顔が引き締まった。

「今年もやるのね」

「ええ」

見れば他のクラスメイト達もであった。彼等もまた燃えていた。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
5  
・  
1  
2  
・  
1

## 第七十話

### 第七十話 決戦の前に

「華奈子ちゃん」

クラスメイト達は華奈子にまた視線を集めてきた。

「本当に今回はですっぱりで悪いけれど」

「いいわよ」

華奈子にはこやかに笑ってそれに返した。

「騎馬戦もよね。わかってるわ」

「お願いできるかしら」

「身体を動かすことなら任せて」

「そしてにこやかな笑みのまま言う。」

「承知のうえでやってるんだし」

「悪いわね」

「だからそんなのいいって」

また笑った。

「こうして競技に勝つのが心から楽しいんだし。あたし美奈子と違って勉強は全然だしね。せめてこういうところでもいいところ見せないと」

「けど華奈子ちゃんには魔法があるじゃない」

「魔法っていつても不器用なものよ」

「相変わらず飾り気のない返答であった。」

「火の魔法ばかりだけれどそれだってまだまだ下手だし」

「そうなの」

「だからこういうので頑張らないとね。これでも張り切ってるんだから」

「それじゃあ頼りにしてもいいね」

「勿論」

ドンと胸を叩く。残念ながらその胸はまだまだ小さい。

魔女に乾杯！

「任せておいてよ。騎馬戦でもどんどんやっちゃっから」

「けど無理はしないでね」

「焦ったら駄目よ」

「何だ、信頼ないのね」

「いや、そうじゃなくて」

「華奈子ちゃん無鉄砲なところもあるし」

「ちえっ」

クラスメイト達の言葉にむくれた顔を作った。

「どうであたしは。無鉄砲ですよーだ」

「わかってるなら注意する」

「……はい」

別のしっかり者で知られるクラスメイトに言われてうなだれる。

「華奈子ちゃんが頼りなのは事実なんだから。しっかりしてよ」

「わかりました。それじゃ」

「健闘を期待するわ」

「ええ」

そしてリレーと障害物リレーに参加した。こちらは何なくトップになった。やはり華奈子はアンカーとして活躍し無事クラスに勝利をもたらしたのであった。

「リレーはこれでいいわね」

「うん」

そしてクラスメイト達と話す。

「それじゃあ次は」

「いよいよね」

「そうね」

最後の決戦に目を向ける。泣いても笑ってもそれが最後である。

「いいかな」

「いいよ」

そしてグラウンドに入場する。こうして最後の戦いの幕が開こうとしていた。

魔女に乾杯！

第七十話

完

2  
0  
5  
・  
1  
2  
・  
1

## 第七十一話

### 第七十一話 騎馬戦

それぞれのクラスが入るとグラウンドに緊張が走った。各クラス互いに対峙し合う。

「いよいよだけれどいい？」

「うん」

女子が騎手になり、男子が三人で馬を作っている。当然それでは女子の数が少なくなる為メンバーを選びすぐっている。

それだけに精鋭揃いであった。

「皆、頼むわね」

「わかってるよ」

華奈子の下にいる男子達が頷く。皆気合が入っていた。

「そのかわり華奈子ちゃんも頑張ってるね」

「うん」

華奈子も応えた。そしてそれぞれ睨み合う。

「任せて。絶対勝つからね」

「頼むよ」

勝負の開始が告げられるのを待っていた。そして息をこらして待つ。

ピストルが鳴った。そして遂に六つのクラスが一斉に動きはじめた。

「行くわよ！」

「こっちこそ！」

華奈子のクラスも当然動いていた。そしてその先頭には当然ながら華奈子がいた。彼女はまるで炎の嵐の様な速さで進んでいた。

華奈子はまず梨花のクラスに向かった。そして素早い動きで鉢巻を次々と奪っていく。

そして梨花と対峙した。彼女も騎馬戦に参加していたのである。

魔女に乾杯！

「応援凄かったじゃない」

「梨花ちゃんもね」

二人は互いに言葉を返す。

「まさか互角だったなんてね。意外だったわ」

「あたしもよ」

華奈子はニヤリと笑って言葉を返す。

「けれど。騎馬戦ではそうはいかないわよ」

「それはこっちの台詞よ」

梨花も返す。

「午前の借り、返すからね」

「いいわ。こっちも受けて立つわ」

華奈子も言った。

「面白そうだからね」

「そうね、本当に」

梨花も華奈子もニヤリと笑った。

「それじゃあはじめましょう」

「ええ」

二人の身体をオーラが包んだ。

一方は赤、もう一方は黄色のオーラが。まるで炎の様に包み込んでいた。

「行くわよ!」

「こっちこそ!」

両者は同時に動いた。双方の腕が煌いた。

そして交差した。だがそれでは勝負は終わらなかった。

「クッ!」

二人は同時に後ろを見た。そしてまた睨み合う。

今度は時計回りに動く。それから狙いを定めにかかる。

「今度は負けないんだから」

「今度も勝つてやるんだから」

そしてまた睨み合う。戦いは激しさを増してきた。

魔女に乾杯！

第七十一話

完

2  
0  
5  
・  
1  
2  
・  
1  
0

## 第七十二話

第七十二話 五つ巴

華奈子と梨花は対峙する。だがそこに思わぬアクシデントがやって来た。

「あ、そこにいたのね」

「その声は」

「うふふ」

二人が顔を向けた先には美樹がいた。彼女はにこやかに笑って二人を見ていた。

「やっと見つけたわよ、二人共」

「やっとして」

「私達を探していたの？」

「ええ」

美樹は頷いた。

「折角だからね。勝負したいから」

「いいわ」

二人はそれを聞いて頷いた。

「二人より三人の方がいいし」

「やってみたいわよね。是非」

「わかったわ。それじゃあ」

美樹も笑った。そしてゆっくりと二人の方へ進んでいく。だがここでまた新たな騎手が姿を現わした。

「ここに皆いたんだ」

「赤音ちゃんまで」

今度は赤音もやって来た。

「折角だからね。私もって」

「って赤音ちゃん運動神経は」

「そんなの関係ないわよ。私は歩いたり走ったりするのは苦手でも

華奈子ちゃん達とやりたいから」

「それで来たの」

「そういうこと。いいでしょ」

「これで四人、か」

「何か訳がわからなくなってきた」

「けれどこれで終わりにはならないような気が」

「うん、そうなの」

「あっ、やっぱり」

四人は新たな声が聞こえてきてこう呟いた。そして当然のように春奈もやって来た。

「私は。クラスの参謀で出ていたの」

「成程ね」

「それならわかるわ」

四人は春奈のその言葉に頷いた。

「来るのよね」

「うん」

春奈は華奈子の問いに頷いた。

「そのつもりでここまで来たから」

「わかったわ。じゃあ来て」

華奈子はそれを聞いて頬笑みを浮かべた。

「五人で。最後までやりましょう」

「誰が勝っても恨みっこなし」

「最後に勝った人には皆でおめでとう」

「それでいいわよね」

「うん」

春奈は華奈子、赤音、美樹、そして梨花の言葉に頷いた。

「だから。やりましょう」

「ええ」

こうして五人の小さな魔女、いや騎士達が対峙した。そして新たな戦いの幕が上がるうとしていたのであった。

魔女に乾杯！

第七十二話

完

2  
0  
0  
5  
・  
1  
2  
・  
1  
0

## 第七十三話

### 第七十三話 五人の戦い

五人は睨み合う。しかし互いに隙は見出せなかった。ただ睨み合うだけであった。

「参ったわね」

華奈子は心の中でこう呟いた。

「皆思ったよりやるわ。これじゃあ」

手が出せなかった。これは彼女だけでなく他の四人もであった。迂闊に手を出せばこちらがやられる、それがわかっているからこそ手出しがでなかつた。五人は睨み合いを続けた。

しかしそのままでは何もならないこともわかつていた。何とかしなければならぬ。だがどうすればいいのか。それがわからないまま睨み合うしかなかつた。

ここで華奈子は賭けに出た。無鉄砲な彼女らしいと言えばそれまでだが動いた。待っていられなくなつたのだ。

「こつなつたら」

彼女はその右手を煌かせた。

「美樹ちゃん、頂いたわ！」

「しまった！」

美樹はこの時一瞬だが赤音だけを見ていた。彼女の間を窺っていたのだ。しかしそれで華奈子に対して隙を作ってしまった。華奈子はそれに乗つたのであった。

「もらったわ！」

「くっ！」

この時美樹の手も咄嗟に動いていた。攻められる直前に攻めていた。だがそれは華奈子に対してではない。赤音に対してであった。

「今なら」

この時春奈も動いていた。右隣にいた華奈子のガードが空いたの

を見逃さなかつたのだ。ゆっくりとだがその小さな手を走らせる。

だがここで春奈もまた華奈子と同じミスを犯してしまっていた。ガードを忘れたのだ。そこに梨花の腕が走る。そして梨花もまた同じであった。ガードが甘くなってしまうたのだ。

「しめたわ」

赤音がその手をあげた。そのまま梨花の頭を狙う。何と五人はほぼ同時に同じ動作をしていたのだ。その結果は驚くべきものとなった。

「こんなことが」

一瞬であつた。その一瞬が終わつた時五人はそれぞれの顔を見合わせ呆然としていた。

五人の手にはそれぞれ鉢巻があつた。そして頭にはそれがなかつた。彼女達は皆一人の鉢巻を取ると同時に自分の鉢巻を取られてしまつていたので。これでは話にもならなかつた。

「負けね、皆」

「そうね」

皆梨花の言葉に応える。

「これも引き分けつてところかしら」

「まさかこんなことになるなんてね」

そう言い合つて苦笑いを浮かべる。

「馬鹿みたい」

「けれど。何か納得できるわね」

「悔しい気持ちもあるけれどね」

「そうね。けれどまあこれでいいわ」

腑に落ちないところもあるが納得した。そして競技を終えた。結局ここでも引き分けであつた。五人はそれぞれの勝負はともかく五人それぞれの勝負では結局その優劣がつかなくつたのであつた。

これで全ての競技が終わつた。後は最終結果だけであつた。果たして勝つのはどのクラスなのか。

「うちよ」

「うちに決まってるわ」

五人だけでなく全てのクラスの者達がそう言い合っていた。今回はどのクラスも実力が伯仲しておりそうおいそれとどのクラスがいいのかわからなかったのだ。華奈子一人の活躍ではどうにもならないところがあったのだ。

そして採点結果が出された。勝つのはどのクラスか。皆固唾を飲んで見守った。

第七十三話

完

2005・12・16

## 第七十四話

### 第七十四話 戦い終わって

結果は意外なものであった。何と勝ったのは美奈子のクラスであったのだ。

「嘘」

「特にポイントゲッターもいなかったのに」

皆その結果を聞いてまずは驚きの声をあげた。

「総合力ってやつじゃないかしら」

「総合力」

「ええ」

梨花は他の四人の言葉に応えた。

「例えば華奈子ちゃんのクラスは華奈子ちゃんが飛び抜けていたわよね」

「うん」

「けれど他の皆には差があった。けれど美奈子ちゃんのクラスは」

「言うなら皆が二番や三番だったと」

「ええ」

今度は美樹の言葉に応えた。

「平均がよかったから。それで」

「学校のテストと同じね」

春奈はテストに例えてきた。

「平均点がよかったですらそれで上になるから」

「成程」

「それで優勝したのね」

最後に赤音が言った。

「そっかあ。そういうやり方もあったんだ」

華奈子は感心したように言った。

「これには気付かなかったわ。結局皆がよくないと駄目なのね」

魔女に乾杯！

「それは私達にも言えるわよね」

「あたし達にも」

「ええ」

梨花はここで魔女に戻った。そして四人に対して言った。

「紫の魔女に対抗するのは一人では無理だから。皆が頑張らないと」

「だからこの前は苦しかったけれど何とかやれたわね」

「そう。けれどまだまだよ。皆頑張らないと」

「そうね」

「そうじゃないと。負けるのはこっちだから」

「相手も手強いし」

「そう。魔女はまた強くなるかも知れないわ。それを考えると」

「やるしかないわね」

「ええ」

五人は頷き合った。そして魔女に戻っていた。

美奈子はそんな五人を離れた場所から見ている。自分のクラスが優勝したというのに微笑み一つ見せずクールな顔で五人を見ていた。

「またやる気になったわね」

彼女はポツリと一言言った。

「私も。本当にうかうかしてられないわね。特に」

そう言いながら双子の妹を見る。

「華奈子。貴女には絶対に負けたくはないわ」

「あつ、美奈子ちゃん」

ここでクラスメイト達に声をかけられた。

「何かしら」

「優勝したし。これから乾杯しない。ジュースで」

「ええ」

美奈子はそれに頷いた。そして華奈子達から目を離してクラスメイト達と一緒にその場を後にした。

運動会は終わった。だがそれはまた新たな戦いのはじまりであると言えた。華奈子達はまた紫の魔女に出会うことになるのだから。

魔女に乾杯！

1  
6

第七十四話

完

2  
0  
0  
5  
・  
1  
2  
・

## 第七十五話

### 第七十五話 優しい兄

春奈の兄夏雄は彼女にとって自慢の兄である。美男子で優しく、おまけに頭もいいしスポーツも万能である。彼女にとって非の打ち所のない兄である。

だが人間というものは必ず何かしらの欠点があるものである。当然この夏雄にも欠点はあった。

「それ本当!？」

華奈子達はそれを聞いて思わず耳を疑った。

「うん、凄いの」

春奈は塾で困った顔をして華奈子達に語っていた。

「お兄ちゃん、物凄く甘いのが好きで。いっつもなのよ」

「よくそれで太らないわね」

「体質らしくて」

「糖尿病は？」

「それも体質らしくて。けれど毎日食べる量が凄いのよ」

「どれだけ？」

「御飯の後に絶対果物かお菓子食べて。その後も食べて。お茶や」

「ヒーにも角砂糖十個入れたりするのよ」

「十個」

「それはまた凄いわね」

四人もそれを聞いて流石に呆れた。

「聞いているだけで虫歯になりそう」

「本当」

「時には一ダース入れるのよ。クリームもドバって入れるし」

「うわあ、もうベタベタしてきた」

「それは確かに凄いわね」

「そうでしょ？それでお兄ちゃんクラスの女の子達にも引かれてる

らしいのよ」

春奈は困った顔をして述べた。

「妹として何とかしたいけれど。どうしたらいいかな」

「そうね」

まずは梨花が考えた。

「徐々にお砂糖とかを少なくしていったらどうかかな」

「けど入れるのはお兄ちゃんよ。ホットケーキだってシロップでビシヤビシヤにしちゃうし」

「聞いてて気分が悪くなりそう」

「私はもう慣れてきたけれど。このままじゃ」

「それじゃあ別の考えがあるわ」

「別の考え？」

「ええ」

梨花はここにこやかに答えた。どうやら策があるらしい。

「それは何なの」

「まずはね」

梨花は春奈だけでなく他の四人にも語りはじめた。それが終わっ

てから五人はにこりと笑って顔を見合わせた。

「それでどうかしら」

「いいと思うわ」

料理上手の美樹がまず笑って返した。

「それじゃあそれで」

「料理とはちよつと言えないかも知れないけどね」

「あら、切ったり盛り付けたりしたらそれでもう立派な料理よ」

美樹は笑って言った赤音にそう返した。

「サラダだってそうだし」

「言われてみればそうね」

「じゃあ明日春奈ちゃんのお家で」

「たまには魔法を使わずに女の子らしく」

「華奈子ちゃんには向いてないかも知れないけれど」

魔女に乾杯！

「放つといてよ」

最後に華奈子の言葉が締めとなった。こうして五人は夏雄の甘党をなおすべく動きはじめたのであった。

第七十五話 完

2005・12・22

## 第七十六話

### 第七十六話 甘さ

かくして春奈と四人は春奈の家に集まった。そして玄関で夏雄を出迎えたのであった。

「あつ、来てたの。只今」

学校から帰って来た夏雄はさわやかな顔で五人に挨拶をした。その笑顔を見ても春奈が自慢するだけはあった。

「はい、お帰りなさい」

五人はにこやかに笑って夏雄に挨拶をした。

「西瓜がありますよ」

「西瓜」

それを聞いた夏雄の目の色が変わった。

「秋なのに？ああ、今は冬でも売ってるね」

「はい」

五人は頷いた。

「僕は西瓜が大好きなんだ」

夏雄は靴を脱ぎながら上機嫌で語りはじめた。

「あの甘さがね」

「どの果物や野菜でも好きなのよ、甘ければ」

春奈がここで他の四人にそつと囁く。

「やっぱり」

「マンゴーでもライチでもパイナップルでも苺でも同じこと言っ  
て食べるのよ。そこにシロップや砂糖をたっぷりかけてね」

「果物にまで」

「チョコレートにもかけるわよ。パウダーをね」

「止めて」

「何か胸焼けがしてきたわ」

「それでその西瓜だけねど」

魔女に乾杯！

靴を脱ぎ終えた夏雄は家上がり五人に尋ねてきた。当然五人のヒソヒソ話は聞こえてはいない。

「何処にあるのかな」

「台所です」

梨花がにこやかに笑って答えた。

「もう切っておいてますよ」

「えっ、用意がいいね」

夏雄はそれを聞いて顔をさらに明るくさせた。

「それじゃあ悪いけれど早速」

「はい」

こうして五人は夏雄について台所に入った。そしてテーブルに座りその上に置かれていている西瓜をそれぞれ手に取った。

「それじゃあまず」

夏雄は砂糖に手を向けようとした。

「あっ、待って下さい」

だがそれを美樹が制止する。

「?どうしたの」

「もう砂糖はかけてあります」

「そうなの」

「はい。切った時に。かけていますから」

「だったらもういいね」

赤音も言った。夏雄はそれを聞いて納得した。

「はい」

「それじゃあ」

そして砂糖を元の場所に戻した。

「頂きます」

「頂きます」

「ねえ」

春奈がまた四人に囁いた。

「本当にあれでいいの？」

魔女に乾杯！

「うん。いいと思うよ」

四人を代表して華奈子が答えた。

「だから。安心して見ていて」

「わかったわ。それじゃあ」

夏雄は西瓜に口を近付けた。そしてその赤い身を口に入れるのであった。

第七十六話 完

2005・12・22

## 第七十七話

### 第七十七話

### 甘さの秘密

夏雄は西瓜を口に入れた。そして味わう。華奈子達はそれをしっかりと見ていた。

「お兄ちゃん」

一口食べ終わったのを見計らって春奈が声をかけてきた。

「何だい？」

「どう、今日の西瓜は」

そしてこう尋ねてきた。

「いいね、よく冷えてて」

「うわ」

「いきなり外してきたわね」

華奈子達はそれを聞いてヒソヒソと囁き合った。

「いや、そうじゃなくてね」

だが慣れているのか春奈の態度は違っていた。彼女は動じることなく兄に再び問うた。

「甘さは。どうかなあ」

「そうだね」

夏雄は舌に残っている甘みを感じながら答えた。

「いつもに比べて。甘いね」

「そう」

春奈はそれを聞いて満面に笑みを浮かべた。

「いつもより甘いのね」

「うん。けれどそれがどうかしたの？」

「今日の西瓜はね、特別な」

彼女は兄に対してこう言った。

「特別」

「そう。ほら、いつもはお砂糖をたっぷりかけてるでしょ」

「うん」

夏雄は頷いた。

「今日はね、かけてないの」

「そうだったんだ。それじゃあこの甘みは」

「お塩よ」

春奈は答えた。

「お塩」

「うん。お砂糖をたっぷりかけるよりね、お塩を少しかけた方が甘くなるのよ」

「そうだったんだ」

「お兄ちゃんいつもお砂糖やシロップをたっぷりとかけるから。それで考えてみたのよ」

「僕の為だったんだ」

「うん。気に入ってもらえたかな」

「そうだね」

夏雄はそれに頷いた。

「美味しいよ。それに西瓜自体の甘さも感じられるし」

「よかった、じゃあ気に入ってくれたのね」

「うん。これからはそのまま食べることにするよ」

彼は言った。

「どうもそっちの方が美味しいかも知れないしね」

「よかった、わかってくれたのね」

「案外ものわがりのいいお兄さんなのね」

「うん。もつともめるかと思っただけれど」

華奈子達は嬉しそうに囁いていた。

「それじゃあ西瓜どんどん切って」

「えっ!？」

華奈子達はそれを聞いて目をキョトンとさせた。

「何か無闇に甘いものよりこうしたすっきいした方がよく食べられるや。だからどんどん頂戴」

「わかったわ。それじゃあ」

「うん、お願いするね」

「やっぱり上手くないかね」

「かえって私達の仕事は増えるのね」

「けれど。お兄ちゃんの甘党がましになって何よりよ」

「そうね」

朗らかな顔の春奈に対して他の四人は沈んだ顔であった。そしてうなだれたまま西瓜を切るのであった。

第七十七話 完

2005・12・31

## 第七十八話

第七十八話 分け合う

美奈子は魔法塾には通ってはいない。ピアノやヴァイオリンのレッスンを受けてはいるがそちらは何も知らない。ここが華奈子と違うところであった。

「あたし楽器は苦手だからね」

華奈子はそれに対して笑いながらこう答える。活発な彼女は楽器よりも踊りの方が得意なのだ。歌は二人共得意にしている。どんな歌でも見事に歌ってみせることで知られている。

「将来双子でアイドルになったらどう？」

友達にはよくこう言われてからかわれる。

「キヤラクターも全く違うし受けるかもよ」

「おてんばな華奈子ちゃんとおしとやかな美奈子ちゃんでね」

「何であたしだけそう言われるかなあ」

華奈子はそれを聞いてつむじを曲げた顔を作る。

「あたしだっておしとやかな一面があるのよ」

「何処が」

それを言うといつもこう突込みが帰ってくる。

「華奈子ちゃんがおしとやかだったら女の子は皆おしとやかよ」

「そうそう。本当に姉妹で全然違うんだから。同じなのは顔だけね」

「そっいえば」

それを言われると二人はいつも顔を見合わせる。

「あたし達って顔は同じよね」

「うん」

美奈子もそれに合わせて頷く。

「けれど。何か全然違うね」

「それは仕方ないわ」

苦笑いを浮かべる華奈子を宥めるようにして言うのが常であった。

魔女に乾杯！

「だって。全部同じだったらかえって怖いじゃない」

「それはそうだけれど」

「双子でもね。違う場所が一杯あるのは当然よ」

「けれど。羨ましいなあ」

「羨ましい？」

「うん。美奈子が」

華奈子はこう言った。

「おしとやかだし楽器も上手いし勉強も出来るし。あたしみたいな

おてんばとは全然違うしね」

「けれど私は貴女のそうしたところが羨ましいのよ」

「そうなの？」

「ええ。元気があって踊りが上手くてスポーツ万能だし。私そっちは全然駄目だから」

「何か。二人でいいところ分けあってるみたいね」

「そうね」

二人はここにこりと笑みを浮かべ合った。

「だからあたし達双子なのかな」

「そうかもね」

笑い合いながら言う。

「同じ顔だけれど得意なものは全然違う」

「けれど同じところがあるかも」

「それは？」

「さあ、何かしら」

だが美奈子はここは誤魔化した。

「けれどそれがあつたら華奈子には絶対に負けないわよ」

「あたしだって」

華奈子も言い返す。

「同じものがあつたら。美奈子だってライバルよ」

「その言葉、忘れないでよ」

「勿論よ」

魔女に乾杯！

二人は言い合った。だがここに一つ秘密があることを華奈子は知らなかった。美奈子だけが知っていることであった。

第七十八話 完

2005・12・31

## 第七十九話

### 第七十九話 美奈子と先生

美奈子は魔法は習ってはいない。塾に通っていないからそういうことになっている。華奈子は魔法を使えるのでそこが二人の大きな違いの一つとなっていた。

「じゃあ行って来るね」

「うん」

今日は華奈子の塾の日だった。学校から帰ってすぐに塾に向かう。今日は美奈子は一日家にいる。だが彼女はすぐに家を後にしたのだった。

「私も行って来ます」

「あら、お友達のところ？」

「うん」

母にそう応えて家を後にする。そしてそのまま何処かへ行ってしまった。

それから暫く経った。華奈子達の塾の講義も終わり先生は家を出た。そして歩いて商店街に向かった。その時であった。

「あら」

美奈子に気付いたのだ。一人で商店街にいる彼女に声をかけようとした。だがそれより前に美奈子の方から声をかけてきた。

「今日は、先生」

「はい、今日は」

先に声をかけられて少し戸惑いを覚えたがそれに返した。そして二人は側に行つて話をはじめた。

「華奈子ちゃんのお姉さんですよね」

「はい」

美奈子にはこりと笑って言葉を返した。

「美奈子っていいいます。宜しくお願ひします」

魔女に乾杯！

「はい、宜しく願います」

先生もにこりと笑って返した。

「華奈子ちゃんの塾の先生の今田です」

「今田先生ですね。お話は聞いてます」

美奈子は先生の顔を見上げながら言った。

「とても優しくて素敵なお先生だつて。いつも華奈子が言ってますよ」

「あらやだ、華奈子ちゃんたら」

先生はそれを聞いて頬を赤らめさせた。

「そんなこと言ってたなんて。恥ずかしいわ」

「けど華奈子はいつも言ってますよ」

「そうなの」

立ち話も何なので二人は場所を変えた。喫茶店に入り話を再開したのである。

「ところで華奈子ですけど」

「はい」

美奈子は紅茶を、先生はオレンジジュースを飲みながらの話となつた。どういうわけか美奈子の方が大人っぽいものを口にしていた。

「どうですか、真面目にやってますか？」

「華奈子ちゃんはいいい娘ですよ」

先生はやはりにこやかな顔で応えた。

「そうですね。それはよかったです」

「真面目で熱心で。魔法は凄くお上手ですよ」

「勉強はあまり好きじゃないんですけどね」

「華奈子ちゃんはそのよりも魔法の方が好きみたいだから」 4 4

先生は述べた。

「けれど頭はいいんですよ。だから魔法もすぐ覚えてくれます」

「そうですね」

「特に火を使った魔法がね。得意なんですよ」

「ふんふん」

美奈子は興味深げに話を聞いていた。そして彼女は先生から魔女

魔女に乾杯！

としての華奈子について詳しく聞くのであった。

第七十九話 完

2006・1・6

## 第八十話

第八十話

華奈子の評判

「華奈子ちゃんは頭は凄くいいんですよ」

「それはわかります」

これは美奈子も同意であった。

「利発ですし。おまけに運動神経もいいですし」

「手先も器用ですしね」

「美奈子さんも手先は器用だそうですね」

「華奈子から聞いたんですか？」

「ええ」

どうやらその通りだったらしい。先生は頷いた。

「色々な楽器を使えるって。特に笛とバイオリンが得意なんですよ  
ね」

「はい、まあ」

そこまで聞いていては隠すこともなかった。美奈子は素直にそれを認めた。

「どっちも好きですし。他にはピアノなんかも」

「いいですよ、ピアノも」

「音楽はどれも好きなんです。ギターも弾けますよ」

「ギターもですか」

「歌は華奈子の方が上手だと思えますけれど。あとダンスも」

「華奈子ちゃんリズム感ありますからね」

「そうなんです。あれは本当に才能だと思います」

素直にそう述べた。美奈子は華奈子のそうしたところが内心羨ましいのだ。

「それに魔法も」

「美奈子さんも魔法の素質はありますよ」

「えっ」

魔女に乾杯！

それを言われてどういうわけかギクツとした顔になった。

「そうでしょうか」

そしてそれに気付いて慌てて取り繕う。

「はい。華奈子ちゃんがあれだけ凄いですからきつと美奈子さんも」

「けれど私は」

「大丈夫ですよ。美奈子さんも利発ですし」

「はあ」

「きつといい魔女になれると思いますよ」

「けれど私には音楽がありますから」

そう言って拒む。

「魔女になるつもりは。すいません」

「そうですか」

こうして話は終わった。二人は別れ先生は買い物に、美奈子は家に帰ることになった。

家の帰り道である。一人夕暮れの道を歩く美奈子の側に二つの影がやって来た。

「貴方達ね」

「はい」

その二つの影は美奈子の言葉に頷いてきた。

「危ないところでしたな」

「まさかあそこで華奈子様の先生に御会いするとは」

「気をつけてね。先生はちょっと気付いているかも知れないわよ」

「美奈子様のことを」

「ええ。だから魔法のことを口にしたのだわ」

美奈子はそれまで誰にも見せたことのないような警戒する顔で影達に対して語っていた。

「左様ですか」

「華奈子達には言わないと思うけれどね。けれど先生には注意しておいて」

魔女に乾杯！

「はい」

「わかりました」

影達は頷いた。そして何処かへと姿を消した。

「こればかりは華奈子にも負けられないんだから」

最後にこう呟いた。そして美奈子は一人華奈子の待つ家へと帰るのであった。

第八十話

完

2006・1・6

## 第八十一話

第八十一話      タロのダイエット!?

デブといえはライゾウであるが最近このぐうたら猫もあんまり言われるせいかあまり食べなくなった。その結果それなりに痩せてきた。

「どうだい、見事なもんだろ」

「普段からそうしてなさい」

威張るライゾウに対して華奈子は相変わらずきつかった。今までが今までであっただけにこれは仕方のないことではあったがそれでもライゾウには不満であった。

「ちえっ、痩せたからいいじゃないかよ」

「少しだけじゃないのかい？」

そんな彼にタロが声をかけてきた。

「見たところあまり変わりはないみたいだけれど」

「そうかなあ」

「うん。お饅頭から団子になった位かな」

「団子って」

「色が白くて黒もかかっているからね。そう見えるよ」

「そんなこと言われるとまた何か食べたくなくなってきたよ」

「だからそれが駄目なんだろ」

「おいらはグルメなんだよ。そういう旦那だって結構味には五月蠅いじゃないか」

「僕はそんなに食べ物には五月蠅くないよ」

だがタロはそれを否定した。

「食べられればいいから」

「そうかね」

「何、何か言いたそうだけれど」

「ちよっとね。最近旦那も」

魔女に乾杯!

「僕も？」

「太ってきたんじゃないかな」

「僕が！？まさか」

そう言われたタロはまず驚きの言葉をあげた。

「太ってるかな」

「最近ね。お腹がちよつと」

「うつむ」

気になってチラリと腹をしてみる。言われてみれば確かに少し出ている。

「そうかなあ」

「旦那もダイエットはじめた方がいいんじゃないかい」

そしてライゾウは相手に対してこう囁いてきた。

「さもないと御主人に何かと言われるよ」

「御主人様に」

「そうだ。御主人はとにかく太ってるのがお嫌いみたいだから」

「困ったな、それは」

「そういう時にこそあれをするんだよ」

「ダイエットだね」

「そうさ」

ライゾウはここでニンマリと笑った。

「どうだい？やるかい？」

「どっちにしろやらなくちゃいけないんだろ」

タロは仕方ないといった顔と声でこう言った。

「じゃあお願いするよ。宜しくね」

「よし、任せとけ」

ライゾウは後ろ足で立ち胸をドンと叩いて言った。

「こう見えてもおいらはダイエットのベテランなんだからな」

「つまりそれだけ御主人様に怒られてきたってことだね」

「う……」

それには何も言い返せなかった。だが何はともあれタロのダイエ

魔女に乾杯！

ットがはじまった。

第八十一話 完

2  
0  
0  
6  
・  
1  
・  
1  
4

## 第八十二話

第八十二話 走る

かくしてライゾウのコーチの下タロのダイエットがはじまった。まずは身体を動かすことからだった。

「じゃあいいかな」

「うん」

タロはライゾウを前にして頷いた。

「まずは第一に身体を動かすことだ」

「トレーニングだね」

「そう、それでカロリーを消費する」

「御主人様みたいにだね」

「何だ、わかっているじゃないか」

「いつも見ているからね。じゃあはじめるか」

「あいよ」

詳しく教えることができなくていささか不満であったがライゾウはコーチをはじめた。まずはタロの背中に乗った。まるで馬に乗る騎手の様であった。

「それじゃあしゅっぱあーっ」

「了解」

こうしてまずはランニングからはじまった。タロはライゾウを背に乗せたまま駆け足を開始した。

「中々いいじゃないか」

ライゾウは風を身体に受けながら言った。

「いいスピードで……ん!?」

だがここで異変に気付いた。

タロの駆け足があまりにも速いのである。ライゾウはそれを受けてまともに座ってはいられなくなった。

「う、うわ」

魔女に乾杯!

慌ててしゃがみ込む。そしてタロの背中に倒れ込む様な態勢になった。

「ん、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないよ」

ライゾウはたまりかねた声で答えた。

「速過ぎるよ、旦那」

「そうかな。いつもと変わらないけれど」

「犬にはよくても猫にはちょっと辛いよ。少しスピードを落としてくれよ」

「仕方ないな。それじゃ」

タロは速度を少し緩めた。すると何とか乗っついていられる速さになった。

「そう、これ位なら」

ライゾウは安心した声で言った。

「大丈夫だよ。こんな調子でね」

「了解」

そしてこのまま駆け足を続けた。一時間程でそれを終えた。

「中々いいじゃないかい」

「いい運動になったね」

二匹は家に帰ってこう言い合った。見れば二匹共舌と足の肉球から汗をかいていた。犬は舌、そして猫は肉球からしか汗をかかないのである。

「次はな」

「うん」

二匹は餌のところに着かれておられる水を飲みながら次の打ち合わせをしていた。

「反復横飛びでもするか」

「反復横飛び？」

「そうさ。これはおいらの得意技の一つだね」

ライゾウは誇らしげに言いはじめた。

魔女に乾杯！

「まずは手本を見せるから。楽しみにしておいてくれ」  
「あまり期待しないで楽しみにしておくよ」  
「ちえっ」

そんないつものやり取りの後で二匹は庭に出た。そして次のメニューに取り組みはじめた。

第八十二話 完

2006・1・14

## 第八十三話

第八十三話      フットワーク

「次はな」

ライゾウが次のメニューについて話しはじめた。

「反復横飛びをしようぜ」

「反復横飛び」

「そう。左右にパツパツて飛ぶあれだよ。あれも凄いダイエットにいいからな」

「それなら知ってるけど」

だがタロはあまりいい顔をしてはいなかった。

「やるの？」

「勿論」

ライゾウは大きく頷いて答えた。

「そうかあ」

「どうしたんだい、旦那」

タロの表情にライゾウも気付いた。

「あまり嬉しそうじゃないけど」

「実はね、あまり得意じゃないんだ」

タロは浮かない顔のまま言った。

「けれど。ダイエットにはいいんだよね」

「そうだよ」

「それじゃあやるか。仕方ないけど」

「それでこそ旦那だよ。それじゃあはじめるぜ」

「うん」

タロは頷いた。そして二匹は縦に並んで準備をはじめた。そしてまずは右に飛ぶ。次は左に。そして交互に跳んで動くのであった。

「どうかな、旦那」

魔女に乾杯！

ライゾウは四本足で左右に跳びながらタロに声をかけてきた。

「あまり得意でないそうだけれど」

「うん」

タロは答えた。だが見てみればライゾウに完全に動きを合わせていた。

「やっぱり。あまりキレがよくないね」

「嘘だろ」

ライゾウはタロが自分に完全に動きを合わせているのを見てこう返した。

「全然凄じじゃないか。それで得意じゃないって？」

「そうだけど」

「冗談言っちゃいけないぜ旦那。それだけ動けりゃ得意な方だよ」

「そうかな」

「猫の方が小回り利くのにその猫に合わせられるんだ。大丈夫だって」

「そう」

「ああ、心配はいらないよ。そのうち分身でも何でもできるようになるさ」

「何か忍犬みたいだね」

「旦那だったらなれるかもな、それだけの動きじゃ」

「まさか」

タロは笑っていたがライゾウは半分本気だった。とにかくタロの動きはそこまでよかったのである。

三十分程跳んだ後で反復横飛びを止めた。そしてまた次のメニューに備えるのだった。

「次は犬にとつちや難しいかな」

「何をするんだい」

「あれさ」

そう言っ上を見上げた。

「あれをかい」

魔女に乾杯！

「どうだ？できるかい？」  
「やってみる」

タロも上を見上げていた。そして強い声でこう答えたのであった。

第八十三話 完

2006・1・19

## 第八十四話

第八十四話 木登り

「いいんだな、旦那」

ライゾウの声も強いものになっていた。

「ああ」

「おいら達だったら何ともないけれど犬にはしんどいと思うけれどな」

「それでもやってみるよ」

タロの声は強いままであった。

「ダイエットの為だからね」

「それじゃあやるか」

「よし、じゃあまず」

そう言って身体を屈める。

「力を溜めて」

上を見上げながら言う。

「えいつ」

そして飛び上がった。そのまま上の木の枝を目指す。

だがそれは僅かに届かなかった。ライゾウは仕方なく着地した。

「ちえっ、届かなかったか」

「犬はそうやって登るんだな」

「ああ。猫みたいにはできないからね」

タロはこう答えた。

「爪がね。木登りには使えないから」

「そういやそうだったな。だからこれはしんどいか」

「けれどやり方はあるから。先に言っというて」

「了解」

ライゾウはそれに頷いて木登りをはじめた。

「こうして登るのも確かに運動にいいな」

魔女に乾杯！

登りながらこう呟く。確かにこれは彼にとっても非常にいい運動になっていた。

「旦那」

ライゾウは木のとっぺんからタロに対して声をかけた。 28

「こつちまで来れるかい？」

「やってみるよ」

そう答えながら考えに入った。

「そうだなあ」

「どうするんだよ」

「ちよつと考えがあるんだけどね。そこでじつとして掴まってるね」

「!?!?こうかい？」

「うん、そんな感じで」

ライゾウはしゃがみ込んで木にしがみついた。タロはそれを見てまた頷いた。

「揺れるからね。気をつけて」

「ああ」

タロは跳んだ。そしてまずは木の幹を蹴った。

「おっと」

木全体を衝撃が襲ったがライゾウはそれを耐えた。そしてタロの動きを見守った。

木の幹を蹴ったタロはそのままあがった。そして今度は枝を蹴ってまた上にあがる。そしてそうした蹴ってあがる動作を続けてライゾウのところまで近付いていく。彼のところまで来たのはあつという間であった。

「どうかな」

「いや、凄いよ」

ライゾウはそれを見て素直に賞賛の言葉を述べた。

「おいらなんかよりずっと凄いじゃないか」

「そうかな」

魔女に乾杯！

「何か自信なくすなあ。身体動かすことじゃ旦那には勝てそうにないよ」

「まあ犬と猫の差はあるけれどね」

「いや、それでも」

そんな話をしながらまた休憩に入った。二匹は木の上から街を眺めていた。

第八十四話 完

2006・1・19

## 第八十五話

第八十五話　　そして次には

運動はこうして順調に進んでいた。だが身体を動かすだけでは単純にはダイエットと言えないのである。やるべきことはまだあるのだ。

「今度は食べ物だよ」

「食べ物」

「そうそう。旦那っていつもカロリーの高いものを食べてるだろ。それがよくないんだよ」

「カロリーが高いと言ってもねえ」

だがタロはライゾウのその言葉に少し不満げであった。

「どうかしたの？」

「犬と猫じゃ食べるものがそもそも違うよ」

「い、いやそれでも」

痛いところを突かれながらもまだ言う。

「食べ物を工夫するのは大事なんだよ」

「それはわかってるけれどね」

「それじゃあ」

ライゾウは本題に入った。

「旦那は牛肉とか食べてるよな」

「うん」

「それがよくないんだよ」

「じゃあどうすればいいんだい？」

「ここはヘルシーだね。鶏肉とか魚とか」

「そもそもドッグフード自体がそうなんだけれど」

「いや、それでも」

タロの言う通りそもそも犬と猫では食べるものが違うのだ。ライゾウはそれが今一つわかっていなかった。だから話も少しチグハグ

魔女に乾杯！

であった。

「そこを改善してね」

「それなら食べる量を減らせばいいんじゃないの？」

夕口は言った。

「えっ!？」

「だからさ、食べる量を。それならカロリーも減るし」

「そういえば」

「まさかわからなかったの？」

「ま、まさか」

慌ててそれを否定する。だがその様子からそれが真実だとわかる。

「当然わかっていたよ」

「そうなの」

白々しい言葉だったがそれ以上は詮索しなかった。そして何事もなかったかのように話に戻る。

「それじゃあ食べ物量を減らそう」

「うん」

「これで効果があるかな」

「おいらを信じなさいって」

ライゾウは後ろ足で立ち、右の前足で自分の胸をドンと叩いて言った。

「大丈夫だから」

「それじゃあ信じるよ」

「うん。ついでにおいらもダイエットしているから」

「そういえばそうだったかな」

「忘れてたのか？」

「いや、自分のことで精一杯で」

「もう、しっかりして欲しいな」

「ははは、御免御免」

こうして今度は食事制限に入った。当然運動は続けている。そして遂に結果が出る時がやって来た。

魔女に乾杯！

第八十五話

完

2  
0  
0  
6  
・  
1  
・  
2  
8

## 第八十六話

第八十六話 努力の結果

一月後彼等は体重計の前にいた。そしてそれをじっと見下ろす。「まずはおいらからだな」

「うん」

最初にライゾウが登る。すると五百グラム減っていた。

「あまり減っていないような」

「猫だとかかり減っているんだよ」

ライゾウはムツとして反論する。

「だから犬と猫じゃ大きさが違うじゃないか」

「それもそうだったね」

「何かダイエツトしてからこんな話ばかりしてるなあ」

ライゾウはムツとしたまま言う。そして今度は肝心のタロであった。

「次は僕だね」

「早く登りな」

「うん、それじゃあ」

タロは体重計に登った。デジタルが音もなく動く。その結果はすぐにわかった。

「減ってるな」

「うん」

タロは出て来た数値を見て満足気に頷いた。

「二キロも」

「かなり減ったな」

「頑張ったかいがあったね」

「確かななあ。旦那、おいらから見てもかなり動いてたし」

「うん」

「食べる量も減らしてたし。頑張ってたと思うよ」

魔女に乾杯！

「その結果が出たということだね」

「そうだな。よく頑張ったよ」

「ライゾウもね」

「いやいや、おいらなんか」

だがそれには謙遜してみせた。

「あんまり。旦那と比べたら」

「それでも痩せたじゃないか」

「まあ一応は。じゃあそれでよしとするか」

「そうそう」

二匹はそう言い合って笑った。これで結果は出た。

華奈子は二匹を見てふと気付いた。そして言った。

「痩せたわね」

「そうかな」

ライゾウが得意気なのを隠して顔を向ける。

「うん、タロが」

「あらら」

自分ではなくタロに注目されてずっとこけてしまった。

「かなり痩せたわね。ダイエットしたの？」

「いや、まあ」

「隠さなくたっていいって。見ればわかるから」

華奈子はにこりと笑って使い魔にそう返す。

「頑張ったわね、お疲れさん」

華奈子はタロを褒めた。そして次にライゾウに顔を向けて言った。

「あんたも頑張りなさいよ」

「おいらも痩せたんだけどなあ」

今一つ腑に落ちないライゾウであった。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
6  
・  
1  
・  
2  
8

## 第八十七話

第八十七話 遊び人

赤音の姉である葵は遊び人だ。いつも学校から帰ってはラフな服に着替え遊びに行く。勉強なんかはそっちのけで遊んでばかりいる。けれど両親が五月蠅くないので特に問題にはなっていない。

「けれどねえ」

それでも妹としては問題であった。

「お姉ちゃん大丈夫なのかな、あれで」

時々そう思う。

「遊んでばかりで。危なくないかなあ」

「心配なの？」

使い魔である兎のジップが尋ねる。

「まあね。やっぱりほら」

「妹だからってわけだね」

「そういうこと。やっぱりわかる？」

もう一匹の使い魔であるハムスターのハリーにも答えた。

「どんな人と遊んでるのか。危なくないかって」

「それが心配なんだね」

「そうなのよ。何時かえらいことになるんじゃないかって思ってるのよ」

姉を心配する顔で言う。

「お姉ちゃん魔法も使えないし。何かあったら」

「それじゃあ一回見てみたら？」

「見てみるって？」

ジップの言葉に反応して顔を向ける。

「そう、どんな遊びしてるか調べてみるのよ」

ジップはそう主に対して述べた。

「どうかな。それだと何してるのかわかって安心できるよね」

「確かに」

「御主人も安心できるしお姉ちゃんにも何かあったら対処できる。悪いことはないね」

ハリーもそれに賛成した。

「それじゃあ決まりね」

「うん」

主より先に使い魔達が頷き合った。

「一度葵さんの遊びをつけてみようよ」

「つけるの？それはねえ」

だが赤音はそれにはあまり乗り気ではなかった。人をつけるという行為に抵抗があったのだ。

「ちょっと…….…….と思っけど」

「じゃあどうすればいいのさ」

ハリーが顔を見上げて問う。

「それしかないよ」

「けど」

「御主人様、ハリーの言う通りよ」

ジップも言ってきた。

「ここはやっぱり後を付けるしか」

「ないのね、やっぱり」

「うん。覚悟を決めて」

「行くしかないよ」

「わかったわ。それじゃあそれで行くわ」

赤音も仕方なしながら頷いた。

「明日お姉ちゃんが帰って来たら」

「うん」

「行きましよう」

こうして明日赤音と二匹の使い魔達は葵の遊びについて調べるようになった。とりあえずこの日はそれへの準備で終わったのである。

魔女に乾杯！

「どっつなるのかな」

第八十七話 完

2  
0  
6  
6  
・  
2  
・  
6

## 第八十八話

第八十八話 追跡開始

そしてすぐに次の日になった。葵が学校から帰ってすぐに家を出ると赤音達もすぐに家を出た。

「行くわよ」

「うん」

「了解」

赤音は学校にいた時のままのジーンズと白いフード付きジャケットに鞆を持って家を出た。フードにはハリーが、鞆にはジップが入っていた。

「ねえ御主人」

ハリーがフードの中から囁く。

「何？」

「気をつけてね。何かあったらこっちでフォローするけれど」

「わかったわ。その時はお願いね」

「うん」

こうして赤音達は家を出た。葵は赤い上着の黒のズボンでありかなり目立つ格好であった。今時と言えばそれまでだが傍目から見てもかなり目立つ格好であった。

「こうして見るとさあ」

赤音は何も知らず一人歩く姉を見て使い魔達に言った。

「お姉ちゃんってプロポーションいいよね」

見れば足はスラリとしていて胸も腰もよく出ている。そしてウエストはよく締まっていた。

「モデルみたい。私なんかとは大違いよね」

「大丈夫だよ、御主人様」

へこみかける彼女をジップが慰めた。

「御主人様葵さんにもよく似てるから。そのうちああなるよ」

魔女に乾杯！

「そうかなあ」

「きつとなるって。それに今だって発育いいし」

見ればその通りであった。赤音は歳の割には結構胸があったのだ。そろそろブラが必要な程であった。

「うっん」

だが赤音にはそれがまだ信じられなかった。

「そうなるのかなあ」

「きつとなるよ」

ジップは自信を持って太鼓判を押してくれた。

「そうだね、御主人は絶対綺麗になるよ」

ハリーも言ってきた。

「華奈子さん達もだけれど。五人共将来が楽しみだよ」

「あんた達はその頃になったら尻尾が二本になってたりしてね」

「兎やハムスターの尻尾が二本になってもねえ」

「あまり怖くないかもね」

「うふふ、そうかも」

赤音は次第に明るくなってきていた。

「それじゃあ二本の尻尾で御主人様を見守ろうかな」

「それもいいかもね」

「その頃には私は美人の魔法使いになってるのかな」

「きつとね」

「楽しみにしてるよ」

「そうね。それじゃあ気合を入れ直して」

「行こうか」

「うん」

彼女達はこうしてこっそりと姉の追跡を再開した。暫くつけていると葵が誰かと会っていた。見れば同じ年頃の女の子達であった。服装も似たようなものであった。

「クラスメートかな」

「多分ね」

魔女に乾杯！

そして物陰でヒソヒソと囁き合つ。見れば葵はその女の子達と一緒に歩いていた。

「行ったわ」

「私達も」

ついて行った。そして彼女達も向かうのであった。

第八十八話

完

2006・2・6

## 第八十九話

第八十九話 遊び人

葵はそのまま友人達と街へ出て行く。そしてまずは喫茶店に入った。

「あそこで男と待ち合わせかしら」

「その可能性はあるね」

「うん」

ジップとハリーがそれに頷く。赤音達は帽子や鞆で身を隠してそのまま店に入った。

「子供一人」

「はい」

少し怪しい様子であったが店員は彼女達を通した。赤音は葵の向かいの席に座ろうとした。だがそれはジップに止められてしまった。

「ちよつと御主人様」

「何？」

小声で鞆から囁くジップに尋ねる。

「そんな近くじゃ危ないじゃないの。ばれるわよ」

「そうかなあ」

「そうかなあ、じゃないわよ。ばれたらどうするのよ」

「それは困るけれど」

赤音は呑気に返す。

「そうでしょ？だから離れなさい」

「離れるの？」

「離れてもちゃんと見えるから」

「そうだよ、御主人」

ハリーも話に入って来た。

「ここは少し離れた場所から見た方がいいよ。それでもわかるから」  
「ハリーまでそう言うのなら」

赤音はそれに従うことにした。そして彼女と二匹の使い魔は席に座った。そしてそこで葵を見るのであった。

「それで昨日ね」

「うんうん」

葵は赤音達には気付かずそのまま友達とお喋りに興じていた。お茶やケーキを食べながら楽しく談笑している。

「今のところは何もないみたいね」

「うん」

赤音達は人参のケーキを食べながら話し合う。ジップは人参を、そしてハリーはケーキについている胡桃を食べていた。そして赤音がケーキを食べていた。

暫くして葵は友人達と一緒に店を出た。それを見て赤音も店を出ようとする。だがここでハリーが言った。

「お金持つてる？」

「大丈夫よ」

赤音はにこりと笑ってそれに答えた。

「お母さんから貰ったお小遣いがあるから」

「それならいいけれど」

「お金だけはしっかりしてなさいって言われてるからね」

赤音はニコリと笑って言う。

「それは心配しないで」

「それなら」

「まあ大丈夫かな」

二匹は主人がドジなことを知っている。だが今回は本当にお金を持っていた。とりあえずそれには胸を撫で下ろした。

「てつきり木の葉でお金を作つのかと心配してたよ」

「私まだそんな魔法覚えてないし。それに木の葉じゃ美樹ちゃんの方が相応しくない？」

「それもそうだけれど」

「まあそんなことは置いておいて行きましょう。早くしないとお姉

魔女に乾杯！

「ちゃん見失っちゃうよ」

「わかってるよ」

そして赤音達はまた葵の追跡をはじめた。そのまま後ろをつかずに離れずついて行く。

第八十九話 完

2006・2・14

## 第九十話

第九十話      カラオケ

次に葵が入ったのはカラオケであった。そのままお喋りをしながらボックスに入って行く。

「今度はカラオケかあ」

「勿論行くんでしょ？」

「うん」

ジップ達の問いに頷く。

赤音達は葵達のいるボックスの隣に案内された。これはラッキーなことであった。

「それじゃあ今度は僕達が」

ハリーが言う。

「見ているから。御主人はここにいて」

「いいの？それで」

赤音は使い魔達に対して問う。

「私はここにいただけなんて」

「大丈夫よ、御主人様」

ジップが言う。

「今度は覗くわけにはいかないから」

「こつやつて姿を消してね」

ハリーがそう言うのと二匹の姿が消えた。

「見て来るから。それじゃ」

「うん」

「御主人はカラオケでもやってて」

「わかったわ」

こつして赤音はカラオケに熱中し、二匹が葵を見ることになった。扉のところではじつと見ている。

だが結局何も変わったところはなかった。相変わらず友達と騒い

魔女に乾杯！

でいるだけであつた。酒等も飲んではいない。

「案外真面目みたいだね」

「嫌、これからどうなるかわからないわよ」

二匹はそんな話をしながら監視を続けた。だが結局何もなかった。葵達は気の済むまで歌うとそのままボツクスを出たのであつた。

「御主人」

「あれっ、もう終わりなの？」

見れば赤音はまだ歌っていた。マイクから手を離しはしない。

「うん、今出て行つたよ」

「ちえっ、お姉ちゃんつてせつかちなんから」

口を尖らせてこう言う。

「やっに乗ってきたところなのに」

「かなり歌ってるんじゃないの？」

ハリーがそんな彼女に尋ねる。

「一人だつたし。とにかくもうすぐ店を出ちゃつよ」

「早くして、早く」

「まだ曲が残ってるのに」

「そんなのいいから」

「また今度」

不満そうな主を引つ張る様にして店を出る。カウンターに来た時にはもう葵達は店を出ていた。

「ほらもう」

「急いで」

「待つてよ、割引チケットもらつてから」

「もう」

「御主人がこんなにカラオケ好きだつたなんて」

「えへへ」

「えへへじゃないよ」

反省していない主を嗜める。そして追跡を再開した。

魔女に乾杯！

第九十話

完

2  
0  
0  
6  
・  
2  
・  
1  
4

## 第九十一話

第九十一話 見知らぬ相手

姉への追跡を続けているうちにやがてあることに気付いた。葵は何かと友人達に細かく気を使っているのだ。

「わりかし細かいね」

「うん」

赤音達は物陰に隠れて頷き合った。

「おうちでもそういうところあるし」

「あれっ、そうだったっけ」

「そうだったっけて、御主人」

ハリーはそれを聞いてまたしても呆れた声を漏らした。

「御主人僕達よりずっと葵姉さんという時間長かつたんでしょ」

「まあそうだけど」

「それでそうだったっけて。それはないんじゃない？」

「いやあ、一緒にいると案外気付かないものなのよ」

「あっきた。よくそんなので魔女なんてやっていられるわ」

「本当。何か御主人様って五人の間じゃ一番とろいし」

「大丈夫なのかな、これで」

「先生は大丈夫だって言ってくれてるよ」

けれど赤音はへこたれてはいない。

「魔法のセンスは充分にあるからって」

「確かに光の魔法は上手いかもね」

「うん」

二匹の使い魔はそれを聞いて頷き合った。

「箒で飛ぶのも上手だし」

「運動オンチなのね」

「飛べればいいのよ、飛べれば」

「けれど今回の追跡にはちょっとね」

魔女に乾杯！

「そうしたこととか鋭いものとか身に付けて欲しいな」

「まあそのうち」

「やれやれ」

二匹は溜息をつきながらも尾行を続けた。結局今のところは何も怪しいところはなかった。だがふと赤音の足が止まった。

「どうしたの？御主人」

「隠れて」

「う、うん」

二匹はそれに従い赤音のフードの中に隠れた。赤音も物陰に隠れている。

「何かあったの？」

「見て」

そして姉を指差して言う。そこには葵と友人達、そして新しい女の子達が向かい合っていた。

「何、あれ」

「わからない。とりあえずは仲いいみたいだけれど」

見れば楽しそうに話をしている。喧嘩やそういったものではないようだ。

「けれど何かおかしいね」

「うんうん」

ジップとハリーは顔を見合わせて頷き合った。

「何かありそう」

「何か」

赤音はそれを聞いて言った。

「待ち合わせしていたみたいだけれどね」

「問題は何の為よ」

二匹は主の耳元で言う。

「気を着けてね、御主人様」

そして赤音にも言う。

「遂に、かもよ」

魔女に乾杯！

「ええ」

赤音はその言葉に頷いた。そしてじつと姉を見ていた。

第九十一話 完

2006・2・21

## 第九十二話

第九十二話 葵の秘密

「いよいよ怪しくなってきた。赤音は姉から目を離さない。」

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

彼女は言った。

「ここまで来たら。覚悟してよね」

「蛇は魔法でどうにかなるけれど鬼はね」

「勘弁してもらいたいよね」

「冗談言ってる場合じゃないわよ」

赤音の言葉は何時になく真面目で鋭いものとなっていた。

「どうやらあの人達が何かありそうなんだから」

「了解」

「それじゃあ気合入れて行きましょう」

見れば葵達は繁華街へ向かって行く。赤音達の学校ではあまり行くのはよくないとされている場所である。

それでも行かないわけにはいかなかった。知っている人がいないのを確かめてから先に進む。見れば姉達はそのままさらにいかがわしい場所へと向かっていった。

そこにはやけに派手な高い建物が並んでいた。看板が異様に目立つ。

「何かな、これ」

「さあ」

使い魔達に聞いてもわからない。赤音の歳の娘が知るにはもうちよつと先のものである。

そのよくわからない派手なビルの中を通って姉達を追い続ける。

見れば今度は細い道に入っていた。

「大丈夫かな」

「嫌な予感がするよね」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「その時こそ魔法を使うわ」

赤音はもう決めていた。

「あんた達も、いいわね」

「うん」

主の決意に押された。そしてその細い道に彼女達も入った。

そこに入るともう姉達は道の出口に差し掛かろうとしていた。曲がった時に目に入らないようにさっと身を隠してからまた先に進む。

「右ね」

見れば姉達は右に曲がっていた。それを確かめてその細い道を進む。そして右に出た。

そこには神社があつた。葵達はそこに入っていく。それを見て訳がわからなくなつてしまつた。

「こんなところに神社が」

「神社は何処にでもあるわよ」

それにジップが答える。

「問題は何をしに行ったのかよ」

「お参りかな」

「それだつたら家の近くの神社に行くよね」

「それもそうね」

ハリーの言葉に頷いた。

「それだつたら何かな」

「何か悪いことしてるんじゃないかな」

「悪いこと」

「煙草とかシンナーとか。もしそうだつたら大変よ」

赤音の考える悪いことと言えばまだこの程度のものだった。彼女もまだまだ子供であった。

「何とかしなくちゃ」

「まずは神社へ行って確かめないと」

「ええ」

赤音は頷いた。そして前に出た。

魔女に乾杯！

「行くわよ」

「勿論」

ジップとハリーもそれについて行く。そして彼女達も神社の中へこっそりと入るのであった。

第九十二話

完

2006・2・21

## 第九十三話

第九十三話 神社の中で

赤音達は神社の中へこっそりと入って行った。そして葵達が何処にいるかまず探した。

「いたよ、御主人」

ハリーが赤音の側まで来て言う。

「どこ？」

「ほら、あそこ」

前へ顔を向ける。するとそこに葵と友人達がいた。見れば箒を手に何かをしていた。

「お掃除かな」

「多分ね」

ジップが応える。

「てっきりここで遊んでると思ったけど」

「うん」

だが違っていた。姉達はせっせと神社の掃除に励んでいたのだった。だがそれが赤音にとっては凄く不思議なことであったのだ。

「あのお姉ちゃんが」

葵は家事はあまりしない。やればできるのだがものぐさでしようとしれないのだ。料理も作れるし、掃除もする。だが必要な時以外はしようとはしない。とにかくズボラなのである。

それは妹である赤音自身が最もよく知っている。だから彼女は今姉が掃除をしているのが不自然に思えて仕方がなかったのである。

だがそれでもこれは現実だった。赤音は掃除をしている。それも自ら進んで。

「これ一体どういうことなんだろ」

「さあ」

使い魔達もこれに伝えることができなかった。

魔女に乾杯！

「私達も不自然だと思っけれど」  
ジップが言った。

「それでも実際にお掃除しているしね」  
「きつと何か見返りがあるんだよ」  
「だろうね」

赤音はハリーのその言葉に頷いた。そうでなければ納得出来なかつたからだ。

「さもなければここで悪いことしたか」

「そのわりには進んでやってるね」

「だったらやっぱり見返りが欲しくて、かな」

「アルバイトでね」

掃除はすぐに終わった。葵達は掃除を終えると箒をなおした。そしてそのまま神社の後ろへ向かった。

「行く？」

「勿論」

赤音は頷いた。そして木の陰に隠れてついて行った。

「行かなきゃわからないからね」

「了解」

「じゃあ行くか」

「うん。けれど」

「けれど。どうしたの？」

二匹の使い魔は主に尋ねた。

「何かあったの？」

「やっぱりね。引っ掛かるよね」

赤音は曇った顔でこう言った。

「お姉ちゃん、こんなところで何をしているのだった」

「まあね」

神社の周りはどう見てもいい場所ではない。そんなところで何をしているか。妹でなくても心配になるところであった。

「お掃除はしてるけど。悪いことしてなきゃいいけど」

魔女に乾杯！

「まあそれは確かめてからね」

ジップが主を宥めるように言った。

「いいわね」

「うん」

赤音はそれに頷いた。そして姉の後を追うのであった。

第九十三話 完

2006・2・28

## 第九十四話

### 第九十四話 意外な素顔

そして姉について行った。見れば葵達は年老いた一人の老人と話をしていた。

「お掃除終わりました」

「そうか、いつも済まないねえ」

その老人はそれを聞いて有り難そうに礼を述べていた。

「いつも？」

「何か今回だけじゃないみたいだね」

木の陰から見ている赤音達はそれを見て囁き合った。

「おかげでこの神社も綺麗になったよ」

「御礼なんていいのよ、神主さん」

だが葵はここでこう言った。

「いいのか」

「ええ。だって私達好きでやってるんだし」

「そうおす、だから気にしなくていいのよ」

「ボランティアみたいだね」

「嘘みたい」

赤音達にとつては信じられないことであった。

「また来るから。その時宜しくね」

「こないない娘達がおるとはのう」

神主さんは感嘆を込めて言った。

「まだまだ世の中捨てたもんじゃないわい」

「………行こうか」

赤音はそこまで見て使い魔達に対して言った。

「何があつたのかわかったし」

「もついいの？」

「いいの」

魔女に乾杯！

彼女は言った。

「わかったから」

「そう」

こうして彼女と二匹の使い魔は神社を後にした。そして小声で話しながら家へと帰って行った。

「意外って言えば意外だったね」

「そうだね」

二匹はフードにいた。その中から赤音に話し掛けていた。

「お姉ちゃんがあんなことしてたなんて」

「てつきりアルバイトか何かだと思ってた？」

「それが悪いことしたか。どっちかだと思ってたのよ」

赤音は言う。

「けれど。両方共違ったから」

「それがね。意外だったよね」

「うん。けれどいい意外だったわ」

「いい意外？」

「だってお姉ちゃんの別の顔が見られたんだもの」

赤音は朗らかな顔になっていた。

「よくお姉ちゃんに言われてるんだ。女には色々な顔があるんだって」

「そつえばそうだね」

「それってこういうことだったんだね。お姉ちゃんもやる時にはやるんだ」

「少し違つかも知れないね」

「うん」

ジップとハリーにはそれが違うということが少しわかっていた。だがそれはあえて言わなかった。

「まあいいか」

「御主人が御機嫌だし」

赤音はそのまま歩いて行く。そして家へと帰るのであった。

魔女に乾杯！

第九十四話

完

2  
0  
6  
・  
2  
・  
2  
8

## 第九十五話

第九十五話　　はじめてのお料理

梨花の妹利奈は大人しい女の子である。しっかりとした姉に隠れてひっそりとしているがそれでも姉を見習っているのか自分で何でもしようとするところがある。

裁縫も家事もよく手伝う。そして姉を助けていた。

「それでね」

ある日妹は姉に対して言った。

「今度はじめて料理作ってみようと思うんだ」

「料理を？」

「うん、いいかな」

妹は首を傾げて姉に尋ねた。

「もうそろそろいいかな、って思うんだけど」

「そうね」

姉は暫し考えた後でそれに答えた。

「悪くないと思うわね」

「それじゃあ」

「ええ。けれど気をつけてよ」

梨花はここであえて厳しい顔をした。

「お料理といっても。火を使ったりするから」

「うん」

「危ないってことだけは覚えておいてね」

「わかったわ。それじゃあ」

はじめての料理はカレーになった。今度の日曜日の午後作る。両親はやはり仕事でいない。梨花がはじめての料理を食べる人となった。

「大丈夫かしら」

梨花の使い魔である蛇のジュリエッタが心配そうな顔で呟く。

魔女に乾杯！

「利奈ちゃんだけで」

「大丈夫なんじゃないかな」

そんな彼女に同じく使い魔のトカゲのピエールが言った。

「御主人様だつて利奈ちゃんと同じ頃にはじめてカレー作ったけれど美味しかったじゃない」

「御主人様は別よ」

ジュリエッタはそう反論する。

「何でもできちゃんだから。魔女達の間でもリーダーでしょ」

「そりゃまあそうだけれど」

「利奈ちゃんって頼りないところがあるから。心配なのよ」

「うっん」

「まあまあ二匹共」

だがここで梨花が二匹に対して言った。

「今からそんなこと言っても何にもならないからさ」

「御主人」

「ここは温かく見守りましょう。いいわね」

「御主人がそう仰るなら」40

「僕達には反論はありませんけれど」

「利奈ならやるって。私にはわかるわ」

「うっん」

「それじゃあここは見守ることにします」

「ええ、お願いね」

梨花はあらためて言った。だがその心の中では違うことを思っていた。

（何かあったら）

心の中で呟く。

（その時はあれを使おうかしら）

その心の中では別のことを考えていた。だがそれは今の時点では誰にも言うことがなかった。こうして利奈のはじめての料理がはじまるのであった。

魔女に乾杯！

第九十五話

完

2  
0  
6  
・  
3  
・  
7

## 第九十六話

第九十六話 包丁

その日曜日になった。利奈は朝から支度にかかっていた。

「お姉ちゃん」

「何？」

梨花は妹の言葉に応えて顔を向けた。もう台所のテーブルに座っている。

「チキンカレーでいいよね」

「ええ、いいわよ」

彼女は答えた。

「それでお野菜をたっぷり入れてね」

「玉葱切る時は目が痛くなるから前もって水に漬けておくといいわよ」

「わかってるわ」

「どうやら事前に勉強しているらしい。用意のいいことであった。」

「とりあえず今のところは大丈夫みたいね」

「うん」

ジュリエッタとピエールは梨花がいるテーブルの下で囁き合っていた。

「それでお姉ちゃん」

「今度は何かしら」

「人参はお星様の形でいいかな」

「いいわよ、そんなの」

梨花は妹のその言葉に思わず苦笑してしまった。

「別にどんな形でも」

「いいの？」

「ハートでも何でもね。好きなのにして」

「了解」

魔女に乾杯！

どうやら包丁は問題ないようであった。傍目で見ても満足に切っていた。

「包丁は問題ないか」

「こっちはいいみたいだね」

使い魔達はまた囁き合う。

「じゃあ安心していいかな」

「さあ、それはどうかしら」

だが梨花はここで使い魔達に対して言った。

「御主人様」

「料理は包丁だけじゃないから」

彼女は言う。

「まだまだわからないわよ」

「それはそうだけれど」

「とりあえず危ないのは、ってところかな」

ジャガイモの皮は剥かれ鶏肉も切られた。こうしてとりあえず切るのは終わった。

「ルーは何がいいかな」

「甘口かな」

梨花は答えた。

「林檎もすっぺいていれるといいわよ。あとは牛乳かしら」

「もうすっぺおいたわ」

「何かやけに用意がいいわね」

「姉似かな」

「それはどうかしら」

梨花はまた笑って言った。

「まだまだこれからだから」

そしてその笑みのまま言う。

「わからないわよ」

林檎も牛乳も入れられて甘口のルーが入られる。こうしてカレー作りは進むのであった。

魔女に乾杯！

第九十六話

完

2  
0  
6  
・  
3  
・  
7

## 第九十七話

第九十七話 煮てみて

カレー作りはとりあえずは順調にいつているように見えた。今は野菜も鶏肉も入れて林檎や牛乳も入った。ルーも入れられておりとりあえずは安心なように見えた。

「順調じゃない」

「そうだよ」

ピエールとジュリエッタはそれを見て囁き合う。

「これなら大丈夫だよ」

「うん」

「さつきも言ったけれどわからないわよ」

けれどそれでも梨花は油断大敵と言っていた。

「問題はこれからなんだから」

「何か今日の御主人様って用心深いよね」

「そうだね。何でだろ」

「料理はね、作るだけじゃないのよ」

梨花は使い魔達にそう答えた。

「最後の最後まで料理なんだから」

「最後の最後までねえ」

「そうよ、作って食べてそれで終わりじゃないの」

そして言う。

「わかったかしら」

「わかる？」

「いいや、ちよっと」

しかし使い魔達はそう言われてもまだわからなかった。

「食べたなら終わりじゃないかな」

「そうだよ」

「貴方達はまだ料理ってのがわかっていないわね」

魔女に乾杯！

梨花はそれを聞いてくすりと笑った。

「そんなのじやいいシェフにはなれないわよ」

「私達使い魔だし」

「へびやトカゲがシェフになってもねえ」

「まあ見ていなさいよ」

梨花はそんな二匹に対してまた言った。

「山場はまだあるから」

「山場って言ったって」

ピエールがそれに反論する。

「もうすぐカレーできちゃうよ」

「結局何も起こりそうにないわよ」

ジュリエッタもであった。見れば利奈はつつがなく料理をしていた。丁度御飯を炊けた。

「今できたし」

「それでもまだあるの？」

「だから見ていなさいって」

彼女はまた言った。

「これからなんだから」

「これからこれからって」

「何も起こりそうにないじゃない」

そんな話をしているうちに利奈はお皿の上に御飯とルーを盛っていく。そして梨花のところにもカレーを運んで来た。

「どうぞ、お姉ちゃん」

「有り難う」

そこに運ばれて来たのは見事なチキンカレーであった。美味しそうな香りと湯気が漂っている。

「どうぞ召し上がれ」

「うん」

こうして二人はいただきますの挨拶の後で食べはじめた。それを見て二匹の使い魔達は囁いていた。

魔女に乾杯！

「これでもまだ心配っていうのかな」  
「さてね」

それは梨花にだけわかっていることであった。そう、料理はまだ終わっていないのだから。

第九十七話 完

2006・3・13

## 第九十八話

第九十八話 食べた後も

食事も程なく終わった。後は後片付けだけである。

「結局何もなかったじゃない」

ピエールが後片付けをはじめ利奈を後ろから見ながら言った。

「カレーも美味しかったみたいだし」

二匹はカレーを食べることはできない。だからこれは見ているだけであった。

「それでもまだ何かあるの？」

「言ったでしょ、料理は作って食べるだけじゃないって」

それでも梨花はまだこんなことを言っていた。

「それからの後片付けもあるのよ」

「後片付けて言っても」

使い魔達は言う。

「お皿とか洗うだけじゃない。それでも何かあるの？」

「そうそう。皿洗いなら利奈ちゃんいつもやってるし。問題ないわよ」

「だから言ってるでしょ。油断大敵って」

梨花はまた言った。

「見ていなさって。用心してね」

「うっん」

「そこまで言うのなら」

二匹は利奈を見ることにした。しかしやはり何事も無いようである。

利奈は鼻歌混じりに後片付けをしている。お皿を洗い終わり鍋も洗っている。ここまででも何事もなかった。

「やっぱり無事終わりそうだね」

「無事で何より」

魔女に乾杯！

ピエールとジュリエッタが囁き合う。その鍋も洗ってしまう。これで全部終わる筈だった。

だがここでトラブルが起こった。鍋の水を完全に拭いていなかったのだ。そして上になおそうとしたところで利奈の手がその水で滑った。

「あつ」

鍋はそのまま利奈の頭の上に落ちていく。このままいけば鍋は利奈の頭に当たって怪我をしてしまう。それを見た梨花はすぐに動いた。

「えいつ」

魔法で鍋の動きを止めた。そして鍋はゆっくりと利奈の側に降った。間一髪といったところであった。

「有り難うお姉ちゃん」

「危ないところだったわね」

姉は妹に対して言った。

「気をつけなさいよ。料理は最後のスプーンをしまうまでが料理なんだから」

「最後のスプーンをしまうまで」

「そういうこと。後片付けも料理なの。だから気を抜かないでね」

「え、ええ」

妹は姉の言葉に頷いた。

「さつきみたいなことにならないように」

「成程、そういうことだったのか」

使い魔達は先程の梨花の行動を見て大いに頷いていた。

「最後の後片付けが終わるまで料理は終わっていない」

「やっぱり御主人様は違いますね」

「あら、疑っていたのは何処の誰よ」

しかし梨花の態度は手厳しい。

「さつきまであんなに疑ってかかっていたのに」

「それはそれで」

「御許し下さいな」

「まあいいわ」

けれど梨花はそれをよしとした。

「利奈が怪我しなかったしね。一件落着よ」

こうして利奈のはじめでの料理は成功に終わった。最後の最後まで料理は終わらないという教訓も含めて。

第九十八話

完

2006・3・13

## 第九十九話

第九十九話

二人のピクニック

「ねえお姉ちゃん」

信也が美樹に声をかけてきた。

「何？」

彼女はそれに気付き今まで行っていた食器洗いを止めて弟に顔を向けてきた。

「今度の土曜何処に行かない？」

「何処かって何処に？」

彼女は弟に問い返した。

「ピクニックにでも。一緒に行かない？」

「ピクニックね」

美樹はそれを聞いて考える顔をした。

「悪くはないわね」

「それじゃあ一緒に行こうよ」

信也はそれを聞いて明るい声を出した。

「山の公園にでもさ」

「山の公園？」

「うん」

信也は頷いた。

「二人で。どうかな」

「土曜日よね」

美樹はここで壁にかけられているカレンダーを見た。

「丁度私も暇だし、その日は」

「じゃあ丁度いいね」

「いえ、待つて」

だが美樹はここで弟を一旦制止した。

「何かあるの？」

魔女に乾杯！

「準備があるから」  
「準備」

「お弁当は。何がいいかしら」  
「何でもいいよ」

無邪気に姉に対して言う。

「どんなのもいいから」

「そういうわけにはいかないのよ」

だが彼女はそれをよしとはしなかった。

「大事なのよ、外で食べるものだから」

「そうなんだ」

「まあ任せて。腕によりをかけて美味しいものを作るからね」

「大丈夫だって、それは」

信也はまた無邪気な声で応えた。

「お姉ちゃんの作ったものはどれでも美味しいから」

「あら、お世辞？」

「お世辞じゃないよ。本当のことだよ」

朗らかな声で言う。

「だって。いつも食べているからわかるから」

「そう」

ここまで言われて悪い気はしなかった。姉としての優しい笑みを浮かべながら応えた。

「言ってくれるわね。じゃあ楽しみにしててね」

「うん、土曜日楽しみにしているから」

「期待していて」

「うん」

こうして土曜日二人でピクニックに行くことになった。姉と弟、二人はそれぞれその日が来るのを楽しみにしていた。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
6  
・  
3  
・  
2  
1

## 第百話

第百話

お買い物

「ねえ御主人」

土曜日に持つて行くお弁当の準備に食材を買いに行く美樹に彼女の使い魔であるビルガーとファルケンが声をかけてきた。

「何？」

「何か楽しそうですね」

「当たり前じゃない」

美樹は何時になく楽しそうな声で使い魔達に返す。

「だって久しぶりに信也と一緒に遊びに行くのよ。楽しみじゃない筈じゃないじゃない」

「いや、それでも」

「二羽は言った。」

「何時になく楽しそうだから」

「他に何か理由があるのかなって」

「理由ね」

美樹はそれを聞いて不思議な表情を作った。笑っているのだがそこに何かを隠しているようであった。

「やっぱり楽しみだってことかしら」

「それだけ？」

「ええ、それだけよ」

「ホントかなあ」

ファルケンはそれを聞いて空中で首を傾げさせた。

「それだけだなんて思えないんだけど」

「あら、疑り深いのね」

「別にそうじゃないけど」

言葉が今一つキレが悪い。

「ぢよっとね」

魔女に乾杯！

「隠し事も何も無いわよ」

「そうじゃなくてさ」

「何て言うか」

「疑ってるの？」

「だから違ってる」

二羽は反論した。

「何かやけにテンション高いなって思ってた」

「いつもの御主人に比べて」

「そりゃ高くもなるわよ」

美樹は答えた。

「私大好きなんだもん」

「信也君が？」

「ええ。それにピクニックも」

足取りも軽いものになっていた。

「楽しみなのよ。それにお料理を作るのもね」

「成程」

「その三つが揃っているから」

「そうよ、メニューは何がいいかな」

「そうだね」

二羽はそれに応えて考え込んだ。

「サンドイッチなんてどうかな」

「あれだったら手軽に作れるしバリエーションもあるし」

「そうね、じゃあそれにしようかしら」

「うん」

「私達も手伝うわ」

「有り難う。それじゃあ宜しくね」

美樹は二羽を連れてスーパーへと入って行った。その鞆の中に使  
い魔達を隠して。そして買い物に興じるのであった。

魔女に乾杯！

第一百話

完

2  
0  
0  
6  
・  
3  
・  
2  
1

## 第一百話

### 第一百話 お料理

「まずはね」

美樹は金曜の夜にその買って来た食材を料理しにかかった。

「ハムとソーセイジを切って」

同時に卵を茹でている。

「それからレタスと」

「トマトもだよね」

「勿論」

ファルケンとビルガーに応える。

「お肉とかお野菜を切っておかなくちゃね」

「パンはいいの？」

「それは後で」

それに対して言葉を返す。

「挟んでから切るつもりだから」

「そうなんだ」

「後でパンの耳は置いておいてね」

「どうするのさ」

「それはまた使うから。あれはあれで使えるのよ」

「ふうん」

そうは言ってもあまり実入りのない言葉であった。

「使えるの、これ」

「わかってないわね、パンは耳が一番栄養があるのよ」

二羽の使い魔に対してこう言う。

「これをどう使うかで違ってくるのよ」

「じゃあどう使うのさ」

「それは後でお楽しみ」

だが今は言おうとはしなかった。

魔女に乾杯！

「それよりもサンドイッチを何とかしないと」

「卵できたよ」

「了解」

「あとハムカツ切っておいたから」

「どうやって切ったのよ」

「魔法で。ついでにハンバーグもね」

「有り難うね」

使い魔達も美樹を助けていた。彼等も魔法を使えるようになってきたのである。それが美樹にとって非常に大きな助けになっていた。

「切った後は挟んで」

「だからサンドイッチなんだね」

「そういうこと。大抵のものは挟めるのよ」

「どんなのでも？」

「勿論。それこそ砂と魔女以外はね」

「サンド・・・・・・・・砂と」

「イッチ・・・・・・・・ウイッチで魔女か」

「よくわかったわね」

「わからない筈がないよ」

「簡単じゃないか」

「あら、そうかな」

「こんな駄洒落、誰だっと思って思いつくから」

「それよりも早く作ろうよ」

「そうね」

そんな軽いやりとりをしながらサンドイッチを作っていた。そしてそれを作り終えてからベッドに入ったのであった。

魔女に乾杯！

2  
0  
6  
・  
3  
・  
2  
9

## 第二百二話

第二百二話 出発

サンドイツチを作り終えた美樹は次の日の朝早く信也と一緒にピクニックに出発した。御供はファルケンとビルガーである。

「それじゃあ行きましょう」

「うん」

「了解」

「しゅっぱー！ー！ー！ー」

信也と使い魔達は美樹の言葉に頷く。そして家を出てまずは駅に向かうのであった。

「今日はいい天気よね」

美樹は空を見上げて言った。

「雲一つないし。爽快だわ」

「ここまで晴れていると何か飛び回りたくなるよ」

「あんたはいつも飛び回ってるじゃない」

美樹はファルケンに対してこう言った。

「それも好きなのだ」

「そうかなあ」

「そうよ。まあ鳥だからいいけれどね」

「そりやどうも」

「けれど御主人も飛べるじゃない」

「ここでビルガーが美樹にこう言ってきた。

「篤で」

「あれは魔法だからね」

けれど美樹はそう言われてもどうということとはなかった。

「自分の力で飛んでるわけじゃないから」

「それじゃ自分の力で飛んでみたい？」

「まあ確かに」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

それにこくりと頷いた。

「せめて箒を使わずにピーターパンみたいに飛んではみたいわね」  
「そんなこと出来るの？」

信也が尋ねてきた。

「おとぎ話みたいに」

「ええ、出来るわよ」

美樹はにこやかに笑って信也の言葉に応えた。

「もっと魔法が上手くなったらね」

「そうなたら僕も一緒に飛びたいな」

彼はそれを聞いて無邪気な顔で言った。

「お姉ちゃんと一緒にさ。お空を好きなだけ」

「けれどそうなる為には私はもっと魔法が使えるようにならなくちゃ駄目なのよね」

「そうなの、御免ね」

「いえ、今すぐにじゃなかったらいいわ」

しかし美樹は弟を咎めようとはしなかった。

「何時かきつとね」

そして言った。

「一緒に飛びましょう、それでいいわね」

「うん」

信也はその言葉を聞いてにこやかな顔で頷いた。

「何時か絶対ね」

「うん」

「その時は僕達も一緒だよな」

「勿論よ」

美樹は使い魔達の言葉にも応えた。

「皆で飛ばうね」

こんな話をしているうちに駅に着いた。そして電車に乗り山に到着した。

魔女に乾杯！

第一百一話

完

2  
0  
0  
6  
・  
3  
・  
2  
9

## 第二百三話

### 第二百三話 山登り

山に着くとまずは頂上目指して登りはじめた。山自体は平坦でありそれ程苦しくはない。二人と二羽は順調に進んでいった。

「何か思ったよりしんどくないや」

「この山はね」

美樹は信也にこう返した。

「ピクニックにもってこいの。穏やかな山なのよ」

「そうなんだ」

「天気もいいし。落ち着いて行きましょう」

「うん」

信也はそれに頷いて進んだ。そして少し歩いて一休みとなった。

「頂上まであとどれ位かな」

「もうすぐよ」

「そうなんだ」

「ほら、もう見えるでしょ」

そう言つて上の方を指差す。

「あそこよ。もう少しでしょ」

「そうだね」

「見えているから。頑張りましょうね」

「そうは言つてもあまり疲れてないよ」

「あら」

そういえば美樹の方もそうであった。

「こんな山なら大丈夫だよ」

「そうだったの」

どうやら信也は美樹が思っていたより体力があるようであった。

「それだったらもっと高い山にしておくべきだったかしら」

「いや、それは」

魔女に乾杯！

しかし信也はそれには快い顔をしなかった。

「困るなあ」

「そうなの」

「やっぱりこの位の山がいいよ、僕には」

「ふうん」

「またピクニックに来るんならここがいいね」

「けれどとりあえずは頂上にね」

「うん」

「行ってから話しましょう。もう少しだし」

「そうだね、それじゃあ」

二人は立ち上がった。そして頂上に向かいはじめた。

「ねえ御主人」

ここでビルガーとファルケンが声をかけてきた。

「お天気、大丈夫かなあ」

「お天気！？」

美樹はそれに応えて顔を上げた。しかし空は綺麗に晴れたままである。

「大丈夫でしょ」

「そうかしら」

「だといいいけれど」

二人の心配は後で的中することになる。だが美樹はまだそれには気付いていなかった。

「何はともあれ行きましょう」

「うん」

「そうだね」

二人と二羽はそのまま頂上に向かった。頂上が見えてきた。遂にそこに到着したのであった。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
6  
・  
4  
・  
4

## 第四百話

### 第四百話 サンドイッチ

頂上に着いた。美樹は早速弁当箱を開けた。するとそこから豪華なサンドイッチが姿を現わしたのであった。

「うわあ」

「どう、凄いでしょ」

彼女は信也に顔を向けて言った。

「苦労したんだから」

「凄いサンドイッチだね」

見ればトマトにレタス、卵、カツ、ソーセージにハンバーグ。その他にも色々と入っていた。とにかく豪華なサンドイッチであった。

「挟めるもの全部挟んだんだから」

「こんなに食べきれるかなあ」

「食べきれなかったら持って帰ればいいじゃない」

美樹はニコリと笑って言った。

「それも考えてあるんだから」

「凄いね、お姉ちゃん」

彼はそれを聞いてもう嬉しさで一杯だった。

「こんなサンドイッチ作れるなんて」

「誉めるのはまず食べてからにしてね」

美樹はにこりと笑ってこう述べる。

「味が一番大事なんだから」

「うん、それじゃあ」

信也はそれに従いサンドイッチを手に取った。ソーセージサンドである。まずはそれから食べてみることにした。

口に入れる。それから噛んで口の中に入れる。美樹はその間信也をじっと見ていた。

「どうかしら」

魔女に乾杯！

「美味しいよ」

彼はにこりと笑ったまま言った。

「味付けもいいね」

「そう、よかったわ」

それを聞いた美樹の顔もほころんだ。

「そう言ってもらえるとね、頑張ったかいがあったわ」

「皆でどんどん食べようよ」

「勿論。ファルケンとビルガーもどうかしら」

「僕達もいいの？」

「勿論よ。それじゃあいただきますよ」

「うん」

二羽の使い魔達もそれに加わった。二人と二羽で楽しく食事を続ける。それが終わった時であった。

「!？」

急に雲行きが怪しくなってきたのである。

「まさか」

「やっぱりね」

ファルケンとビルガーはそれを見て納得した様に頷いた。

「思った通りだ」

「やっぱり雨が降りそうだね」

「勘がいいわね、相変わらず」

「それはね」

「伊達に使い魔やってないって」

二人は真剣な顔で美樹にこう返す。

「とにかく早いうちに帰った方がいいよ」

「そうね」

「帰ろう、お姉ちゃん」

一行はすぐに帰路に着いた。だがそうは問屋が卸さなかった。

魔女に乾杯！

第四百話

完

2  
0  
0  
6  
・  
4  
・  
4

## 第二百五話

第二百五話 雨

「うわっ！」

「やっぱり」

雨が降ってきた。それが美樹達に降り注ぐ。

「お姉ちゃん、急ごう」

「急ぐ必要はないわよ」

けれど美樹は冷静であった。

「何で？」

「忘れたの？私は魔女よ」

にこりと笑ってこう言った。

「ここは任せて」

「どんな魔法を使うの？」

「その木の葉っぱを使ってね」

側にあつた木を指差す。そこから葉っぱを二枚持って来た。魔法

で取り寄せたのである。

「傘を作るのよ」

「傘を」

「ええ、こうやって」

その葉っぱに魔法をかける。そしてそれを大きくさせた。

「これでどうかしら」

「何か凄く大きいね」

見れば身体全体が隠れるまでの葉になっている。それを傘に使お

うというのだ。

「これを傘に使えばいいわよね」

「うん」

信也は姉の言葉に頷いた。

「それじゃあ悪いけれど僕にも一つ頂戴」

魔女に乾杯！

「勿論よ」

美樹はそれに応えた。

「はい、どうぞ」

「有り難う」

信也はそれを受け取った。彼は姉から受け取ったそれを傘に使った。

「じゃあ行きましょう」

「うん」

二人はそれで雨を防ぎ先に進んだ。そして無事に駅まで辿り着いたのであった。

「何かお姉ちゃんにずっと助けられてばかりだよね」

「そうかしら」

美樹は電車の中で信也にそう言われてキョトンとした顔になった。二人は向かい合って座っている。ファルケンとビルガーは美樹の鞆の中に隠れている。

「サンドイッチも作ってもらったし。雨だって」

「けれど私は別に大したことはしていないわよ」

「僕にとっては大したことだよ」

けれど信也はこう返した。

「こんなことしてもらえるなんて。夢みたいだよ」

「夢じゃないのよ」

けれど美樹はそんな信也に対してまた言った。

「私達姉弟でしょ」

「うん」

「だったらこれも当然よ。姉弟なんだから」

「そうなんだ」

「そうよ。だから私は大したことはしていないのよ。当然のことだから」

「じゃあ僕もいつかその当然のことをするよ」

信也は強い声で言った。

魔女に乾杯！

「見ていてね、お姉ちゃん」  
彼は言った。

「大きくなったらきっとお姉ちゃんを守るようになるから」  
「ええ、御願いね」

美樹はにこりと笑った。姉と弟の小さな、楽しいピクニックであった。

第一百五話 完

2006・4・11

## 第百六話

第百六話 お水

春奈の使い魔であるイーとリヤンは亀と蛙である。それぞれ水に住む動物達である。

「なあ」

イーが水槽の中でリヤンに声をかけてきた。

「何だい？」

「御主人様がお困りみたいだよ、最近」

「何かあったのかい？」

「魔法のことみたいだよ」

「魔法ねえ」

リヤンはそれを聞いて首を傾げさせた。

「御主人はそんなに困ってるようには見えないけれどな」

「薬のことですか」

「薬!？」

「ああ、薬草を使った」

そうした薬を作ることも魔法の術の一つなのである。

「御主人あまり目がよくないだろ？」

「ああ」

眼鏡をかけていることからそれはわかる。

「それで薬草の選別に苦労してるみたいなんだ」

「そうだったのか」

「それでさ、考えがあるんだけど」

「何だい？」

「僕達でさ、薬草を見つけて来ないか」

「薬草を」

「ああ。山まで行けば何でもあるだろ」

「まあね」

魔女に乾杯!

「イーはその言葉に頷いた。

「あそこは何でもあるからね」

「そこへ行って薬草を調達して御主人様にお渡ししようよ」

「僕達が」

「それも使い魔としての務めだと思っただけね。どうかな」

「僕達の役目は御主人様のサポートだからね」

「そうだろ？だから」

「悪くはないね。じゃあ行こうか」

「よし」

リヤンはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「山までね」

「けれど用心しなよ」

「何がだい？」

今度はリヤンが尋ねた。

「山は何かと物騒だからさ」

「大丈夫だって、僕だって魔法が使えるし」

リヤンはドンと胸を叩いて言った。

「安心してくれよ」

「だといえどもね」

「じゃあ今から行こうか」

「今からかい？」

「そうさ、思い立ったが吉日」

リヤンはそう言いながら水槽から出た。

「すぐに行かないと」

「何かなあ」

おっとりしたイーは困った顔をしたがそれに従うことにした。こ  
うして二匹は春奈の薬草の為山に向かうのであった。

魔女に乾杯！

1  
1

2  
0  
0  
6  
・  
4  
・

## 第一百七話

### 第一百七話 山

二匹は山に入った。山に入ると早速薬草を探しはじめた。

「こっちにもあったよ」

「こっちにも」

意外にも草は次々と見つかった。そしてそれを採集していく。

「何か意外とすぐ見つかるね」

「本当だね」

うず高く積まれた薬草を見上げて顔を見合わせる。

「蛇とか鳥もいないし。無事集まってるし」

「やっぱり蛇は怖いよね」

「当然じゃないか」

リヤンはイーにこう返した。

「魔法を使っても僕はやっぱり蛙なんだし」

「そうなんだ」

「亀はいいよね、こつした時は」

「まあね」

イーはにこりと笑って答えた。

「甲羅があるから」

「うらやましいなあ、僕も甲羅が欲しいよ」

「何言ってるんだよ、君のジャンプの方がうらやましいよ」

「そうかなあ」

「僕は動きが鈍いからね。それを考えるとどっちもどっちかな」

「そうかも。まあ話はいいや」

リヤンは話を打ち切った。

「これ持って帰ろうよ。これだけあれば充分だと思おうよ」

「そうだね。それじゃあ」

魔女に乾杯！

イーも頷いた。

「魔法で持って帰ろうよ」

「頼むよ」

「僕が!？」

だがイーはキョトンとした顔で言葉を返した。

「君が魔法を使うんじゃないの!？」

「えっ、僕物を持ち上げる魔法なんて知らないけれど」

「僕もだよ。だって君が知ってると思っただから」

「何でそれ言わなかったんだよ」

リヤンはそれを聞いてその平べったい口を尖らせた。

「早く言ってくれば」

「それは僕の台詞だよ」

イーも言い返す。

「どうするんだよ、御主人に持って帰ろうにも」

「そんなこと言われたって」

二匹は困り果ててしまった。どうすればいいのか。だがここで思わぬ助っ人の声があった。

「お困りのようですね」

「!？」

二匹は突然の声にハッとした。

「この声は」

「一体!？」

声はすれども姿は見えず。声はそれには答えず言葉を続けた。

「お助けしましょうか」

「お助け!？」

「はい」

声は二匹に対して語る。二匹はそれを黙って聞いていた。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
6  
・  
4  
・  
1  
8

## 第百八話

第百八話 声

謎の声は語る。力を貸そうと。

「その薬草、お運びしましょうか」

「何で急にまたそんなことを」

「困っている方を放ってはおけませんので」

声はまた語る。

「それで宜しいでしょうか」

「見返りとか要求されてもないよ」

「ははは、御心配なく」

イーの言葉に笑う。

「そのようなものは要求しませんよ」

「つまり完全な善意ってこと？」

「はい」

声は答えた。

「あらためてそれで宜しいでしょうか」

「わかったよ。それじゃあお願いするよ」

二匹はそれを聞いて頷くことにした。

「僕達だけじゃどうしようもないから」

「お願いします」

「わかりました。それでは」

声が答えると薬草の束がふわりと浮き上がった。

「ではこれはそちらのお家まで運ばせて頂きますね」

「うん、お願いするよ」

こうして話はまとまった。声の謎の主は無事春奈の家にまで薬草を届けた。ここに一つ秘密があった。

「他言は無用ですよ」

声の主は最後にそう付け加えた。そういつわけで彼等の手柄にな

魔女に乾杯！

ったのである。

春奈には褒められ、そして春奈にもいいことであった。だが二匹はどうしてもわからないことがあった。

「あの声の主さ」

「うん」

水槽の中で話をしている。

「何者だったんだらうね」

「只者じゃないのはわかるけれどね」

それだけははっきりとわかった。

「けれど。何で僕達の家場所まで知ってたのかな」

「それもあるしね。すっごく怪しいよね」

「もしかするとだよ」

リヤンは言った。

「紫の魔女の手の者だったりして」

「ははは、まさか」

だがイーはそれを信じようとはしなかった。

「それだったら何で僕達を助けるんだよ」

「そうか」

「そうそう。それだけは絶対にないって」

二匹はそんな話をしていた。だがそれを遠くから聞く二つの影があった。

「上手くいったわね」

「はい」

三つの影は夜の闇の中にいた。その中で一つの影が二匹の話を魔法で聴いていた。

「これでよし。あとは」

「いよいよですね」

「ええ」

その影の中央は少女のものであった。少女の影は大きく頷いた。  
「決めるわ」

魔女に乾杯！

「はい」

影達は夜の中に消えた。その後には紫の空が広がっていた。

第一百八話 完

2006・4・18

## 第百九話

### 第百九話

#### 視線の先

暫く鳴りを潜めていた紫の魔女であったがまた姿を現わすようになつていた。

最近ではしきりに夜の街に現われ、不思議な魔法を使つていて。そして華奈子達を挑発していた。

「この街にすっかりした魔女はいないみたいね」

しきりにこう言っているのだ。

「私の相手になるのは。やっぱりいないのかしら」

「あいつまた出て来たのね」

そしてそれが華奈子達の耳に入らない筈がなかった。五人は熟の教室で相談していた。

「今度こそ。やっつけてやる」

「いえ、こつちから動くのはまずいわ」

そんな華奈子をリーダーである梨花が制止する。

「何で？こつちから先に仕掛けてギャフンと言わせちゃおうよ」

「相手は紫の魔女よ」

梨花はそう言つて彼女をまた制止した。

「畏だつたらどうするのよ」

「それもそつか」

「かなり頭が切れるから。挑発に乗っちゃ駄目よ」

「そつね」

それに美樹が頷く。

「ここは。慎重にいきましょ」

「それじゃあこつちからは動かないのね」

「ええ」

梨花は赤音に答えた。

魔女に乾杯！

「今はね。皆ここはじつとしてましょ」

「うん」

「あたしの性に合わないけれどね」

春奈は素直に、華奈子は不満を抑えて頷いた。

そして他の二人も。とりあえず五人はここは抑えた。

それからまた暫く経った。華奈子はイライラしながらも耐えていた。

イライラした様子は傍目からもよくわかった。そんな彼女に美奈子が声をかけた。

「最近イライラしてるわよね」

「わかる？」

「ええ。何があったの」

「魔法のことだね」

双子の姉妹ということもあり安心して話した。

「紫の魔女の奴がね。また出て来ているのよ」

「あの最近噂の魔女ね」

「そうなのよ。それであたし達を挑発してきてて。もう腹が立って」

「それでその魔女をどうしたいのよ」

「決まってるでしょ。負かすの」

華奈子は言った。

「向こうから喧嘩売ってきてるし。今度やるってなったら徹底的にやっつけてやるんだから」

「徹底的ね」

「美奈子には関係ない話だけどね」

笑って姉妹にそう言った。

「今度こそ。決着を着けてあげるわ」

「そうね」

美奈子はそれを聞いて静かに頷いた。

「今度こそ。つけるといいわ」

「ええ、そうしてやるわ」

魔女に乾杯！

華奈子は美奈子のその言葉に元気に頷いた。だがこの時彼女は氣付いていなかった。美奈子の目が一直線に彼女を見据えていたことに。

第百九話 完

2006・4・25

## 第一百話

第一百話

挑戦状

「皆さんにお手紙ですよ」

熟の授業がはじまる前に先生が五人にこう言った。

「お手紙？」

「はい、こちらに」

先生はその手紙を五人に手渡した。

「授業が終わってから読んで下さいね」

「はい」

それに応えた後で授業になった。五人はそれが終わるとすぐにその手紙を囲んだ。

「ラブレターかな」

「まさか」

そんな冗談を言いながら手紙を開く。それは残念ながらラブレターなどではなかった。

「これは……」

五人はその手紙の中を見て顔を暗くさせた。

それは挑戦状であった。送り主はもう言うまでもなかった。

「紫の魔女」

「やっとなたわね」

五人は手紙を読んで思わず声を出した。

「待っていたけれどやっとなたわね」

「場所は……ふん夜の学校の校庭で」

かつて五人が魔女と戦った場所である。

「今夜。随分早いわね」

「向こうも待てなくなってきたってことかしら」

美樹が春奈に答えた。

「待てなくなっただ？」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「あたしと同じで焦ってるってことかしら」

赤音は首を傾げ華奈子は自分の考えを口にした。

「多分ね」

そして梨花は華奈子の言葉に頷いた。

「魔女も。焦ってるわよ。若しかしたら私達よりも」

「何で？」

「決着をつけたがってるのでしょーうね、向こうも」

「それも早いうちにね」

美樹の目が光った。

「だったりやってやりましょーうよ」

赤音が言った。

「向こうがやる気なら望むところよ」

「けれど畏があるかも知れないわ」

春奈は慎重論を述べた。

「若しあつたら」

「いえ、ないと思うわ」

だがここで華奈子が言った。

「どうしてそう思えるの？」

「相手が焦っていたらね」

彼女は四人にそう答えた。

「畏なんて。そういう時は仕掛けるよりも自分の手でやるものだから」

「成程」

「向こうが焦っていたらただけだね。けれどこんなに早い時間に指定してくるってことは」

「ないわね」

「ええ」

「じゃあ今夜ね」

「梨花は最後に四人に声をかけた。」

「決めるわよ」

魔女に乾杯！

「うん」

四人はそれに頷く。こうして五人と紫の魔女の最後の戦いがはじまることになった。

第百九話 完

25

2006・4・

## 第百十一話

第百十一話 あの場合で

かつて五人と紫の魔女が戦った夜の校庭。今ここにまた五人が集まっていた。

皆法衣を着ている。それぞれのステッキをその手に持っていた。使い魔達も一緒である。そして敵を待っていた。

「これで用意はいいわね」  
「ええ」

美樹は華奈子の言葉に頷いた。

「何時でもいいわよ」

「紫の魔女、今度こそ」

華奈子は意気込んだ。

「やっつけてやるんだから。覚悟しなさいよ」

「力が入るのはいいけれど気をつけてね」

ここで梨花が華奈子に注意した。

「力が入つてるとかえって動きが鈍るから」

「ええ、わかってるわ」

「けれど気を抜いちゃ駄目よ」

「うん」

赤音がそれに頷く。

「手強い相手だし」

「私達五人でもそうそう勝てるかどうかかわからないものね」

「そうよ」

今度は梨花が頷いた。春奈の言葉だった。

「今度は。何をしてくるか」

「また笛かしら」

華奈子が言った。

「それでそこからの魔法で」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「それとも別の」

「またゴーレムか何か」

「それもすぐにわかるわね」

梨花の声はもう戦闘に入っている時のそれであった。

「もうそろそろ時間だから」

「もうなの」

「皆、用意はいいわね」

「ええ」

「勿論」

梨花を中心に広がる。

「何時でもいいわよ」

「どっから来てもやっつけてやるんだから」

ここで一陣の風が吹いた。

そして笛の音が聴こえて来る。見れば校門から一匹の影がやって来ていた。

「来たわね」

五人はその影を認めて身構えた。

「紫の魔女」

「遂に」

「皆さん、こんばんは」

やはりその影は紫の魔女のものであった。二匹の使い魔も一緒にある。

「私の申し出、受けてくれたのね」

「当たり前よ」

華奈子が返す。

「今日こそは。あんたをこてんぱんにやっつけてあげるんだから」

「覚悟しなさいよ」

「やれるのならね」

紫の魔女はその言葉に対して不敵な笑みを浮かべた。

「やって御覧なさい」

魔女に乾杯！

魔女と五人は睨み合った。校庭はこのうえない緊張に支配された。

第百十一話 完

2006・5・2

## 第一百十二話

第一百十二話 開戦

五人と魔女は睨み合っている。その中先に動いたのは魔女の方であつた。

「!?!」

右に動く。紫の法衣が夜の闇の中に消えていく。

「消えた!?!」

「まさか」

だが本当に消えてしまっていた。見れば二匹の使い魔達も消えてしまっている。

「うふふ、私は何処にいるかわかるかしら」

声だけが聞こえてくる。

「わからないわよね。こんな夜の中じゃ」

「くっ」

「何処にいるのよ」

「さて、何処でしょうね」

魔女は笑っていた。五人の焦りを見て笑っていた。

「貴女達には私は見えない。けれど私には貴女達が見える」

魔女の声は語る。

「それは確かなことよ。そして」

「笛の音が聴こえてきた。」

「この魔法も。確かなことなのよ」

「この曲は」

「知ってるの、春奈ちゃん」

「ええ」

春奈は四人の言葉に答えた。

「ビゼーの花の歌よ」

「花の歌」

魔女に乾杯!

「カルメンってオペラの曲なんだけれど。けれどどうしてこの曲を」  
「それはすぐにわかるわ」

魔女の声が答えた。

「すぐにね。うふふ」

「何勿体つけてるのよ」

華奈子がそんな魔女の声を聞いて悪態をつく。

「言いたいのなら早く言いなさいよ」

「何をするつもりか……!?!」

赤音は何かを言おうとして別のことに気付いた。

「皆、これって」

「花!?!」

暗闇の中に花びらが舞っていた。黄色い鮮やかな花びらが舞っていた。

「どうしてお花が」

「しかもこんなところに」

「これが私の今度の魔法よ」

魔女の声が五人に答えた。

「これがね」

「花びらがどうしたっていうのよ」

だが美樹はその花びらを見ても動じない。

「花で私達を倒せると思って!?!」

「ええ」

また魔女の声は答えた。

「だからこそ使うのよ」

「だからって」

「一体何を」

五人の周りを花びらが舞う。闇の中に紫の魔女の声だけが木霊していた。

魔女に乾杯！

2  
0  
0  
6  
・  
5  
・  
2

## 第一百十三話

第一百十三話

廿

い香り

魔女のかわりに花びらが舞う。それも様々な色の花びらが。

赤、青、白、黄、そして緑の。五人はその花の色に気付いた。

「このお花って」

「まさか」

「ええ、そうよ」

魔女の声が答える。

「この花びらは。全て貴方達の色」

「やっぱり」

「これってどういうこと!？」

「すぐにわかるわ」

だが魔女はそれには答えない。ただこう言うだけであった。

「すぐにね」

「どうということなの!？」

「どちらにしろ油断は禁物よ」

梨花が他の四人に対して言う。

「そこを。付け込まれるから」

「そうね」

美樹がその言葉に頷く。

「どちらにしろ。紫の魔女が私達に何かをしてくるのは間違いない

から」

「そうね。だから」

次に春奈が頷いた。

「ここはまとまるってことね」

「それじゃあ」

赤音も華奈子もわかった。五人は一箇所に集まる。

魔女に乾杯!

魔女に乾杯！

「何が来ても負けないから」

「見てなさい、紫の魔女」

「考えたわね、一つにまとまるなんて」

魔女の声はそれを見て笑った。

「けれど。それでどうにかなるものではないわよ」

「どういうこと!？」

「今からわかるわ」

声は言った。

「今からね」

花びらの数が多くなった。その花びら達が五人の周りを覆う。

「受けなさい、私の新しい魔法」

「!？」

魔女の声と共に花びら達が変化した。

それは無数の蝶になった。花と同じ色の蝶に。また五人の周りを

漂う。

「今度は蝶……」

「花が蝶に」

「只の蝶じゃないわよ」

声はまた言った。

「さあ、覚悟はよくて？」

「覚悟!？」

「これが私の新しい魔法」

魔女の声は勝ち誇っているのがわかる。

「幻蝶よ」

「幻の……」

「蝶」

五人にはそれが何なのかわからなかった。だが今実際に蝶達が五人の周りを舞っている。この蝶達が魔女の魔法であることはわかる。だが何をするのか、まだ誰も把握出来ないでいた。そしてそれが危機を招く結果となってしまったのであった。

魔女に乾杯！

第一百十三話

完

2006・5・9

## 第百十四話

第百十四話

力を合

わせて

梨花の目は落ち着いていた。そして何かを見ていた。

「いい、皆」

「うん」

他の四人はそれに頷く。

「まずは皆の魔法を一気に出して」

「魔法を！？」

「ええ、魔力が吸い取られる前に」

梨花は言う。

「一気に蝶をやつつけるの。いいわね」

「けど。大丈夫かな」

「迷ってる暇じゃないよ、春奈ちゃん」

華奈子が春奈に対して言った。

「今はね。いいわね」

「ええ、わかったわ」

「それしかないわね」

美樹も頷く。

「それじゃあ皆やろう」

「ええ」

赤音が言うと他の四人もそれに応えた。

「いくわよ」

それぞれ身構えた。そして魔法を放つ。

「それでいけるかしら」

そんな五人に魔女の声は相変わらず余裕に満ちたものであった。

「私の蝶は。甘くはないわよ」

「確かに甘くはないでしょうね」

魔女に乾杯！

華奈子はそれに応える。

「あんたの蝶はね。けれどあたし達だって甘くはないわよ」

「そうなの」

「ええ、それを今見せてあげるわ」

華奈子は炎を放った。他の四人もそれぞれ魔法を放つ。

それぞれ蝶達に放つ。それは美樹の風に乗って忽ちのうちに嵐となつた。

「!？」

「その蝶の色を見てわかつたわ」

梨花が言った。

「魔力を吸い取るのなら何を吸い取るのかがね」

「見抜いたの」

「ええ、色があるのがかえって仇になつたわね」

梨花の声は笑っていた。

「その蝶は私達一人にそれぞれ対応している。そして」

「あたしには赤い蝶って感じね」

「そう。だから赤い蝶は火を吸い取るの」

見ればその通りであつた。風の中にある赤い蝶は火を打ち消していた。

「けれど他のは吸い取れない。潰されていく」

土と光、そして水と風を受けると蝶は壊れていった。脆く、燐粉となつて消える。

「それで間違いないわよね、紫の魔女さん」

「ええ」

魔女の声は悔しさに満ちたものであつた。

「お見事」

まずは五人を讃えた。

「けど。これだけじゃないわよ」

彼女はまだ負けてはいなかった。戦いはさらに続くのであつた。

魔女に乾杯！

第一百十四話

完

2  
0  
0  
6  
・  
5  
・  
1  
6

## 第百十五話

第百十五話

力

を合わせて

梨花の目は落ち着いていた。そして何かを見ていた。

「いい、皆」

「うん」

他の四人はそれに頷く。

「まずは皆の魔法を一気に出して」

「魔法を！？」

「ええ、魔力が吸い取られる前に」

梨花は言う。

「一気に蝶をやっつけるの。いいわね」

「けど。大丈夫かな」

「迷ってる暇じゃないよ、春奈ちゃん」

華奈子が春奈に対して言った。

「今はね。いいわね」

「ええ、わかったわ」

「それしかないわね」

美樹も頷く。

「それじゃあ皆やろう」

「ええ」

赤音が言う。他の四人もそれに応えた。

「いくわよ」

それぞれ身構えた。そして魔法を放つ。

「それでいけるかしら」

そんな五人に魔女の声は相変わらず余裕に満ちたものであった。

「私の蝶は。甘くはないわよ」

「確かに甘くはないでしょうね」

魔女に乾杯！

華奈子はそれに応える。

「あんたの蝶はね。けれどあたし達だって甘くはないわよ」  
「そうなの」

「ええ、それを今見せてあげるわ」

華奈子は炎を放った。そして他の四人もそれぞれ魔法を放つ。

それをそれぞれ蝶達に放つ。それは美樹の風に乗って忽ちのうちに嵐となった。

「!?!」

「その蝶の色を見てわかったわ」

梨花が言った。

「魔力を吸い取るのなら何を吸い取るのかがね」

「見抜いたの」

「ええ、色があるのがかえって仇になったわね」

梨花の声は笑っていた。

「その蝶は私達一人にそれぞれ対応している。そして」

「あたしには赤い蝶って感じね」

「そう。だから赤い蝶は火を吸い取るの」

見ればその通りであった。風の中にある赤い蝶は火を打ち消していた。

「けれど他のは吸い取れない。潰されていく」

土と光、そして水と風を受けると蝶は壊れていった。脆く、燐粉となつて消える。

「それで間違いないわよね、紫の魔女さん」

「ええ」

魔女の声は悔しさに満ちたものであった。

「お見事」

まずは五人を讃えた。

「けど。これだけじゃないわよ」

彼女はまだ負けてはいなかった。戦いはさらに続くのであった。

魔女に乾杯！

第百十五話

完

2006・5・16

## 第一百十六話

### 第一百十六話

消えている魔女

蝶達は忽ちのうちに消え果てた。五人はまずは危機を脱した。

「まずは褒めてあげるわ」

紫の魔女の声が五人を讃える。

「けれど。それではまだ私に勝ったことにはならないわよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

五人はその言葉に対して沈黙していた。確かに魔女はまだ健在だからだ。

「私が何処にいるか、わかるかしら」

魔女は問うてきた。

「わからないと。どうしようもないわよ」

「きつと出させてあげるわ」

華奈子は強い声でそれに返す。

「何があってもね」

「それじゃあそれをどうするのか見せてもらおうわ」

魔女の声は笑っていた。

「私をどうして出してくれるのかをね」

魔女の笛の音が聴こえてきた。それだけがその場を覆っていた。

「皆、焦ったら駄目よ」

華奈子が言った。

「焦ったら魔女の思うツボだから」

「え、ええ」

四人は何時になく落ち着いた華奈子の声に戸惑いを覚えながらもそれに頷いた。いつもはもっともせつかちな彼女がそんなことを言うとは思わなかったからである。

「きつと。チャンスがあるから」

魔女に乾杯！

「ではどうやって見せてくれるのかしら」

魔女の声はまた尋ねてきた。

「私を出すのを。楽しみにしてるわよ」

「それは」

「だから焦っちゃ駄目」

華奈子はまた四人を制止した。

「焦ったら負けなんだから」

「そうね」

「それじゃあ」

四人はそれに従うことにした。そしてじつと時を待つ。

姿が見えない魔女と睨み合う。まだ互いに動かない。

魔女も一言も発しなくなった。ただ笛の音だけが聴こえている。

華奈子はそれから耳を離さない。じつと目を閉じていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は何かを聴いていた。音を聴き分けることには自信がある。

そして今それを聴いた。

「そこっ！」

「!?!」

ある一点に炎を放った。その炎は何かを撃った、

「くっ！」

「なっ」

「魔女が！」

四人はそれを見て驚きの声をあげた。何とそこから紫の魔女が飛

び出てきたからである。

「やっぱりそこだったわね」

「ええ」

魔女は悔しさに満ちた声で華奈子に応えた。

「よくわかったわね、私の場所が」

「音よ」

「音!?!」

魔女に乾杯！

「そう、それは」

華奈子は話した。そこに魔女の姿の秘密があったのだ。

第一百十六話 完

2006・5・16

## 第一百七話

## 第一百七話

騙せないもの

「笛の音でわかったのよ」

華奈子は四人と魔女に対して言った。

「笛の音で!？」

「ええ、何処にいるのかね。あんたが笛を吹くとそこから音が聴こえてくるから」

「そうよ」

魔女は悪びれずに笑っていた。

「そこで場所がわかったのよ。後はそこを狙うだけ」

「そうだったの」

「けれどよくわかったわね」

「あたしじゃなきゃわからなかったでしょうね」

華奈子は真剣な顔で魔女を見据え続けた。

「あたしの耳は誤魔化せないわよ、何があってもね」

「いい耳をしているわね」

「それだけじゃないわよ、その音感だつてわかるんだから」

「音感も」

「あたしの耳を誤魔化そうと思ったらね、この程度じゃ駄目ってことよ」

「それじゃあ正攻法で来いってことかしら」

「そうよ」

華奈子は言い切った。

「そろそろあんたもタネ切れでしょ。最後にどかんとでつかいの見せて欲しいわね」

「大きいかどうかはわからないけれど」

魔女は笑みを消して言った。

魔女に乾杯!

魔女に乾杯！

「とびきりの魔法を見せてあげるわ」

「むっ」

「何が出るのかしら」

「どっちにしる凄いのが出るでしょうね」

何時の間にか華奈子が魔女と対峙していた。そして四人もそれぞれ魔女を取り囲んでいた。

「あなたとの勝負も、これで最後にさせてもらうわ」

「それはこちらの台詞よ」

華奈子と魔女はそれぞれの言葉で宣戦を布告した。

「貴女達との戦いも。これで終わりよ」

「はい」

「それではここで」

タミーノとフィガロも身構えた。

「タロ、ライゾウ」

それを受けて華奈子も使い魔達に対して言う。

「覚悟はいいわね」

「うん」

「面倒臭いけれどね」

二匹もそれに頷いた。ライゾウは多分に嫌々であったが。

「とにかくいいわよね」

「だからいいんだって」

ライゾウは相変わらずだったがそれでも華奈子はよしとした。他の四人とその使い魔達もそれぞれ戦闘態勢に入っていた。いよいよであった。

「では見せてあげるわ」

魔女はまたしても笛を構えた。

「私の最高の術」

笛から曲が響きはじめる。

「聴きなさい」

その曲が場を支配しはじめる。最後の幕が開いた。

魔女に乾杯！

第一百七話

完

2  
0  
0  
6  
・  
5  
・  
2  
3

## 第一百十八話

### 第一百十八話 魔笛

笛の音自体は綺麗な曲であった。とても紫の魔法の最高の術には聴こえない程だ。

だが五人はそれを聴いても油断してはいなかった。魔法の恐ろしさを誰よりも知っているからだ。

「何が来るか」

「鬼が出るか、蛇が出るか」

五人はそれぞれ身構えていた。魔法をしっかりと取り囲んでいる。

「さあ、聴きなさい」

魔法は笑った。

「魔笛、その調べを」

「魔笛!？」

「どうしたの、春奈ちゃん」

赤音が春奈の驚いた声に反応した。

「魔笛ってモーツアルトの曲だったわ」

「そういえば授業で習ったわね」

美樹がそれに頷く。

「確かモーツアルトの最後の方のだったっけ」

「そうよ、モーツアルトが死の間際で作曲したオペラ」

魔法は梨花の言葉に応えた。

「それがこの曲。その中の『何と美しい姿』よ」

主人公であるタミーノ王子がヒロインのパミーナ王女の肖像画を見て歌う曲である。テノールの美しいアリアとして知られている。

「いい名前ね」

「そうでしょ」

今度は華奈子の言葉に応えた。

「そう、何と美しい姿」

魔法に乾杯!

「!?!」

華奈子はその言葉に何か引つ掛かるものを感じた。

「それがこの曲の名前を」

「まさか」

気付いた時にはもう遅かった。五人とそれぞれの使い魔達を稲妻が襲った。

「!?!」

「しまったわ!」

「ふふふ、上手くいったわね」

魔女は稲妻が華奈子達を襲ったのを見てほくそ笑んだ。

「これが。この曲の力なのよ」

華奈子達は動けなくなってしまうていた。金縛りであった。

「まさかとは思ったけれど……」

「気付くのが一瞬だけ遅かったわね」

「ふんっ」

「そして魔笛の曲はこれだけじゃないのよ」

「というと」

「そう、これとセットなのよ」

魔女はまた笛を構えた。

「これで決まるわ。最後の曲は」

「最後の曲は」

「復讐は地獄の様に」

「地獄……」

「さあ、覚悟はいいかしら」

魔女の声が一際冷徹なものになっていた。

「これで決着がつくわ。私の勝ちで」

魔女の笛がはじめた。それはうって変わって激しい調べであった。

魔女に乾杯！

第一百十八話

完

2  
0  
0  
6  
・  
5  
・  
2  
2  
3

## 第一百九話

### 第一百九話

復讐は地獄の様に

「今まで貴女達とは引き分けてばかりだったけれど」

「生憎ね」

「こちらは勝ちたかったけれど」

五人は魔女に不敵な言葉を返す。動けなくなっているにも気持ちは負けてはいなかった。

「最後で決めるわ。これでね」

「何をするつもりなのかしら」

五人はヒステリックな響きの曲を聴きながら尋ねる。

「まさかとは思うけれど火なんて出さないわよね」

「地獄だからって」

「そのまさかよ」

魔女は五人に対してこう答えた。

「死にはしないわ。それは安心して。けれど」

「けれど？」

「私が勝つことには変わりがないわ。この笛が終わった時に私が勝つ」

「まずいわね」

「動けないとどうしようもないわ」

五人はそれを聞いても諦めていなかった。だが動けないのには変わりがない。

「どうしようかしら」

「せめて動けたら」

「動けないなら動けないでやり方があるわ」

華奈子はその中でも最も負けん気が強かった。その負けん気を四人にもはつきりと見せていた。

魔女に乾杯！

「何か考えがあるの？華奈子ちゃん」

「ええ」

華奈子は仲間の言葉に頷く。だがやはり動けはしないのだ。

「身体が動けないならね」

「ええ」

「こうすればいいだけよ」

目がカツと光った。そしてその全身が赤く光った。

「!？」

「これは一体」

「まさかそれは」

「そう、そのまさかよ」

華奈子は驚きの声をあげた紫の魔女に対して応えた。

「紫の魔女」

「何!？」

「あんたは確かに凄いわ。本当に天才よ」

「有り難う」

「それは認めるわ。けれどね」

「それですんなりと従う華奈子ではないのだ。

「あたしだってね、負けるわけにはいかないのよ。スポーツと魔法

ではね！」

「なっ!？」

「見てなさい、これがあたしの全力よ！」

その赤い光が辺りに散った。

「一体何を」

「火を使うのならね、あたしが一番なのよ！」

彼女はそう宣言した。

「今それを見せてあげるわ、覚悟しなさい！」

「一体何を」

「するつもりなの？華奈子ちゃん」

他の四人も見守る。華奈子は動けないまま今渾身の魔法を使った

魔女に乾杯！

のであつた。

第百十九話

完

30

2006・5・

## 第二百二十話

第二百二十

話 赤い光

華奈子の全身から赤い光が放たれる。それはそのまま五人とそれ  
ぞれの使い魔達を丸ごと包み込んでいた。

「その光が何をするのかしら」

「すぐにわかるわ」

華奈子は紫の魔女にそう答える。

「すぐにね。あなたの曲ももう終わるんでしょ？」

「ええ」

魔女も答える。

「もうすぐよ。そうしたら」

「私が勝つ時」

「あなたが敗れる時」

二人は同時に言った。奇妙な程何もかも似た声であった。

「!？」

その声を聞いて四人は妙な違和感を覚えた。

「何か華奈子ちゃんと紫の魔女って」

「似てない？」

「まさかと思うけれどね」

「さあ、これでおしまいよ」

今魔女の笛が終わった。

「私の炎、どう防ぐのかしら」

五人の周りに下から炎が現われる。その炎はそのまま五人を包み  
込もうとする。

「華奈子ちゃん！」

「大丈夫！」

彼女は魔女を見据えたまま四人に対して言う。

魔女に乾杯！

「あたしを。信じて」

「華奈子ちゃん……」

「今日だけはね」

「馬鹿ね、何言ってるのよ」

四人はその言葉を聞いて笑った。

「えっ!？」

「今日だけなんて」

「そうよ、私達仲間でしょ」

「皆……」

華奈子は四人のその言葉に呆然となった。

「今日だけ信賴してなんかしないわ」

「そうよ、前から。そしてこれから」

「ずっと頼りにしてるからね。頑張ってね」

「うん……」

四人のその言葉が何よりも温かかった。思わず笑みがこぼれた。

何とか顔は動いたからだ。

「そういうことよ、紫の魔女」

また魔女を見据える。

「あたしを頼りにしてくれる皆の為にも、その炎防いであげるわよ

！」

「クッ！」

魔女はその力強い言葉を聞いて舌打ちした。

「それならね！」

魔女は珍しく激昂した言葉を口にした。まるで華奈子の言葉が琴

線に触れたかの様であった。

「どうしたの、これ」

華奈子もそれに気付く。だが魔女はさらに言った。

「防げるものなら防いでみなさい！」

「ええやってやるわよ！」

炎が大きく動いた。そして赤い光に包まれた五人に襲い掛かる。

魔女に乾杯！

炎と赤い光が激突した。今それがぶつかり合い草原は赤く燃えたのであった。

第二百十話 完

2006・5・30

## 第二百一十一話

第二百一十一

話 魔女の怒り

「覚悟しなさい、華奈子ちゃん！」

「ええ、紫の魔女！」

華奈子の光と魔女の炎がぶつかり合う。戦場が赤い世界になった。

「これで決めてやるから！」

「そうはいかないわよ！」

ケリをつけようとする魔女に対して華奈子は守勢であった。しかし彼女の気持ちの方が魔女の魔力より上であった。

光が炎を押ししてきた。紫の魔女も負けじとさらに魔力を込める。

「やらせないわよ！」

「こつちだつて！」

二人の力は拮抗していた。だが華奈子の気持ちの方が勝った。

「えい！」

渾身の力を込めた。それで魔女の炎を跳ね返した。

「これで………終わりよ！」

炎を消すと飛び上がる。そして今度はそのステッキの自分の炎を宿らせた。

「忘れていたようだけれどね」

魔女を見下ろしながら言う。

「あたしの一番得意な魔法は火の魔法なのよ！」

「魔法なら私の方が！」

「少なくとも火に関しては別よ！」

「クッ！」

「受けなさい、あたしの火！」

華奈子は叫んだ。そのステッキに赤い火が宿る。

「これで………終わりよ！」

魔女に乾杯！

巨大な火の帯が数条華奈子のステッキから放たれた。そして魔女を襲う。

「それでも！」

「いけません！」

「ここは……お下がりに下さい！」

踏み止まるうとする彼女とタミーノとフィガロが引き止めようとする。

「危険ですから」

「危険なんて気にしてたら華奈子ちゃんには勝てないわ」

しかし魔女はそう言っただがろうとはしない。

「ここで……負ける位なら」

その数条の炎を見据えながら言う。

「最初から魔女にならないわよ！」

「言っただわね、紫の魔女！」

華奈子はそれを聞いて言葉を送ってきた。

「なら、この炎受け止めてみせなさい！」

「言われなくてもね！」

魔女は笛を構えた。

「タミーノ、フィガロ」

構えながら自身の使い魔達に語り掛けた。

「貴方達は。下がって」

「ですが」

「これは命令よ」

有無を言わせぬ口調であった。

「いいわね」

「……わかりました」

主人に言われては使い魔としては従うしかない。ここは下がった。

「そっちがそう来るのなら」

魔女は笛を吹きはじめた。それは冷静で余裕のある普段の彼女の態度とは全く違うものであった。

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

第二百一話

完

2  
0  
0  
6  
・  
6  
・  
1  
4

## 第二百二十二話

第二百二十二話 火と

音楽と

華奈子の放った数条の炎が紫の魔女に襲い掛かる。魔女はそれに対してもたまたま笛で対抗しようとしていた。

「今度は水の曲でも出すつもり!？」

「いえ、違うわ」

彼女は華奈子にそう言い返した。

「貴女の力を認めたから」

構え、上にいる華奈子を見据えながら言う。

「私本来の魔法で。相手をするわ」

「音楽ね」

「ええ」

彼女は答えた。

「曲は………これよ!」

急に何やらおどろおどろしい感じの曲が奏でられはじめた。

「この曲は………」

「魔王!」

梨花が言った。

「魔王つて………」

「シューベルトの魔王よ。これは」

「その通りよ」

魔女も梨花の言葉を認めた。

「今の私の最高の魔法」

「最高の魔法」

「これで退けられないと私の負けよ」

「じゃあ負けね」

「それはどうかしら」

魔女に乾杯!

だが魔女も切り札を出しただけはあって自信があった。

「魔王の名前は伊達じゃないから」

「じゃあその魔王を倒してあげるわ」

華奈子も臆してはいない。

「この魔法でね。あんたごと」

「それはこっちの台詞よ」

魔女は相変わらず華奈子を見据えていた。しかしその顔は紫の帽子の深い縁のせいでよくは見えない。

「これが……破られる筈がないわ」

「言っわね」

「さあ、来なさい」

魔女の周りを黒い気が覆ってきた。

「私の音楽と貴女の火のどっちが強いのか」

「決着を着けてあげるわ！」

黒い気はそのまま巨大な影となった。影は次第に馬に乗った漆黒の騎士になった。

「あれが魔王ね」

「多分ね」

赤音に美樹が答える。

「華奈子ちゃん、あんなのに勝てるのかしら」

「ここは華奈子ちゃんを信じよう」

梨花はそう言って不安げな顔をする春奈を安心させた。

「仲間なんだからね」

「うん」

春奈はその言葉に頷いた。

「仲間だから」

「そうよ」

四人と使い魔達は二人の戦いを見守るだけだった。それは今最後の局面を迎えようとしていたのであった。

魔女に乾杯！

2  
0  
6  
・  
6  
・  
1  
4

第百二十一話  
完

## 第二百二十三話

第二百二十三

話 魔王

騎士は魔女の横にいた。そして上を見上げている。

「頼むわね」

騎士はその言葉に黙って頷く。すぐにその手に持つ巨大な槍を掲げた。

「何をするつもりか知らないけどね」

それを見ても華奈子の強気は変わらない。

「あたしのこの火は消せないわよ！」

「消してあげるわ！」

魔女の声も普段のクールさは何処にもなかった。

「絶対貴女に勝ってやるんだから！」

「言うわね！」

「何度でも言うわ！」

二人は魔法をぶつけ合う前からもう戦いに入っていた。

「貴女にだけは負けない！」

「あたしだって！」

「.....」

四人はそんな二人の様子を見て妙なものを感じていた。

「おかしいわよね」

「ええ」

互いに囁き合う。

「何か紫の魔女って」

「華奈子ちゃんには特に凄いライバル感情剥き出しだけれど」

「何かあるのかしら」

「妙なものは感じるけれどね」

しかしそれが何かまではわからない。今將に二人の魔法が激突す

魔女に乾杯！

るところであった。

「これで！」

「終わりよ！」

炎と槍がぶつかり合う。赤と黒がその場を支配した。

「ウツ！」

「危ない！」

衝撃と爆風が飛び散る。四人と使い魔達はそれから何とか身を守る。それぞれの魔法で必死にバリアーを作る。

ほんの僅かだがそれが間に合った。しかしそれは二人の魔法の激突の衝撃を相殺するだけであった。バリアーが消し飛んでしまった時全ては終わってしまった。

「決着は」

「どっちに!？」

目の前にその目を凝らす。だがそこには二人はいなかった。

「華奈子ちゃん！」

「何処!？」

四人とそれぞれの使い魔達は彼女を探す。だがその姿は何処にも見えない。

「まさか……」

「いえ、そんな筈ないわよ」

「けど」

「だからそんなこと言わないですよ」

梨花と美樹が弱気な顔になる赤音と春奈に対して言う。しかしその二人にしろ実際は不安であった。だが。

「みんなぁ……」

少し離れた場所からその探していた声が聞こえてきた。

「無事だったの!？」

「よかった」

「あまり無事とは言えないけれどね」

だがそこには華奈子がいた。ボロボロになった赤い法衣のままそ

魔女に乾杯！

ここにいた。彼女は何とか魔法の激突から助かっていたのであった。

第二百二十三話 完

2006・6・17

## 第二百二十四話

第二百一

十四話 素顔

とりあえず華奈子は無事だった。だが紫の魔女の姿は見えなかった。

「逃げたのかしら。それとも」  
「皆、見て」

華奈子が離れた場所を指差す。そこに魔女がいた。

魔女は仰向けに倒れていた。その周りにはタミーノとフィガロがいる。倒れている主を守っているのだ。

「御主人様には」

「指一本触れさせませんよ」

「くっ」

「仕方ないわね」

「ですが華奈子様」

二匹は華奈子に対して言った。

「この勝負、貴女の勝ちです」

「御見事です」

「そう」

華奈子はとりあえずその言葉に納得した。

「じゃあそれでいいわ。あたしは魔女に勝った」

そしてそれで満足することにした。

「それでいいのよね」

「はい」

「それ以上を求められるのなら我等にも覚悟があります」

身体を触れるのも顔を覗き込むのも許すつもりはなかったのである。二匹は忠誠という点でも立派な使い魔であった。

「宜しいですね」

魔女に乾杯！

魔女に乾杯！

「ええ」

華奈子は頷いた。

「勝ったからね」

「はい。ではお引き下がり下さい」

「また。御会いする日まで」

「わかったわ」

華奈子はそれでその場を去った。四人と使い魔達も。後には魔女とその使い魔達が残っていた。

「あの」

「ええ、わかっているわ」

紫の魔女には意識があつた。紫の法衣はボロボロだったが何とか無事であつた。

「………負けたのね」

「はい」

「残念ですが」

使い魔達はそれに応える。

「仕方がないわね」

魔女はその敗北を受け入れた。

「華奈子にだけは負けたくはなかつたけれど」

そう言つて帽子を取る。そこから現われたのは何と美奈子であつた。

「負けちゃつたわね」

そして苦笑いを浮かべた。

「華奈子も。腕をあげたわね」

「これから。どうされますか？」

タミーノがそんな彼女に声をかけてきた。

「これから？」

「はい」

「また。戦いを挑まれますか？」

「そうね」

魔女に乾杯！

だが紫の魔女、いや美奈子はそれにはすぐに答えなかった。暫く不思議な笑みを浮かべてそこに座り込んでいるのであった。敗れてもその顔は何故か晴れやかなものであった。

第二百二十四話 完

2006・6・17

## 第二百二十五話

## 第二百二十五話

負けてから

「ねえ」

美奈子は使い魔達に声をかけてきた。

「私、負けたよね」

「はい」

タミーノとフィガロはそれに答える。

「けれどね、悔しくはないわ」

「悔しくないのですか？」

「ええ、全然」

見ればその顔は実に晴れやかなものであった。

「何か、清々しいわ」

「そうなのですか」

「それでね」

彼女は言う。

「今考えているのだけれど」

「何でしょうか」

「いい？」

彼女は二匹に話しはじめた。自分の考えを。それから姿を消した。だが姿を消した魔女はこれまでの紫の魔女ではなくなっていた。

魔女との戦いから数日経った。華奈子達は今日も塾で魔法を習っていた。

授業はまだはじまっていない。五人はその前におしゃべりに興じていた。

「この前はやったわね」

「そうね」

話題は紫の魔女との戦いのことであった。

魔女に乾杯！

「魔女も。これで当分懲りたでしょうね」

「そうよね、あれだけ痛めつけてやったんだから」

華奈子が言った。

「今度出て来たらもつと酷い目に遭わせてやるんだから」

「強気ね、華奈子ちゃんは」

「当たり前でしょ、そのつもりじゃないとあいつには勝てないから」

「それもそうね」

「そういうこと、またギツタンギツタンにしてやるんだから」

「皆さん」

そう言ったところで今田先生が教室に入って来た。

「授業がはじまりますよ」

「あっ、いけない」

「早く席に着いて下さい」

「はい」

「わかりました」

五人はそれを受けて席に着く。

そして先生に挨拶をした。先生もそれに返す。それが終わってか

ら先生はゆっくりと口を開いた。

「今日は皆さんにお話することがあります」

「お話？」

「何ですか？」

「はい」

先生は華奈子達に応えた。暫く間を置いてからまた口を開く。

「新しい御友達です」

「御友達って」

「誰ですか？それは」

「はい、それは」

入り口に顔を向ける。そして言った。

「どうぞ」

「はい」

魔女に乾杯！

「えっ！？」  
五人は教室に入って来た。女の子を見て声をあげた。彼女は一体誰なのか。

第二百二十五話 完

2006・6・20

## 最終話

最

終話 新しい仲間

「嘘っ」

「何で貴女が」

五人は彼女の姿を見てそれぞれ驚きの声をあげる。  
とりわけ華奈子は。最も驚いていた。

「美奈子、どうして」

「私もね、魔法を勉強してみたくなったのよ」  
美奈子にはこりと笑って姉妹にそう答えた。

「貴女みたいだね」

「あたしみたいに」

「ええ」

見れば紫の法衣を着ている。しかしそれは紫の魔法のそれとは違  
いむしろ五人のそれと同じ様なデザインである。

「いいかしら」

「あたしに言われても」

華奈子はまだ戸惑いを隠せない。

「ねえ」

「いいわよね」

「ちゃんと御両親からの許可は得ていますよ」

「何時の間に」

「うふふ」

「って何で華奈子ちゃんが知らないのよ」

「迂闊って言えば迂闊じゃない？」

四人はそんな華奈子を見て突っ込みを入れる。

「それでは皆さんいいですね」

先生があらためて言った。

魔女に乾杯！

「美奈子さんも今日から皆さんの御友達です」  
「はい」

五人はそれに返事をする。華奈子はまだ戸惑ったままであったが。  
「わかりましたね。それで席は」

「やっぱりあたしの隣よね」

「うん、宜しくね」

「ええ、宜しくね」

姉妹は隣同士の席になった。これで美奈子も魔女になったのであった。

塾の帰り。華奈子と美奈子は一緒になっていた。

「何かねえ」

華奈子はまだ何か言いたそうであった。

「また魔法なんかやるんだか」

「貴女に負けたくないからよ」

「あたしに!？」

「そうよ」

美奈子は強い声で言った。

「魔法でもね。いいかしら」

「好きにしたら」

華奈子はそんな美奈子に対して言い返す。

「あたしに勝ちたいんだったらね」

「ええ、負けないからね」

「それはあたしだっつてね」

華奈子も美奈子も互いの顔を見ていた。夕陽の中で見合っている。

「勉強以外では負けないわよ」

「スポーツ以外では負けないわよ」

「魔法だっつてね」

「望むところよ」

二人は笑い合っていた。今ここにライバルが誕生した。

紫の魔女は姿を消した。だが美奈子が替わりに魔女になった。こ

魔女に乾杯！

うして魔女達は六人になったのであった。

最終話 完

2006・6・20

女に乾杯！第一部 完

2006・6・20

魔

魔女に乾杯！

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

### PDF小説ネット発足にあたって

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1558a/>

---

魔女に乾杯！

2008年11月7日07時02分発行